324
384

諸經論大意

清原秀惠師著

始

3

輯教　清原秀惠師述

諸經論大意

諸教論大意

輔教清原秀惠師述

龍谷學會發行

大正
3. 2. 28
内交

諸經論大意

輔敎　清原秀惠述

序言

題して諸經論大意といふ、甚漠然たる講題にして且つ耳新しく感せらるゝなるべしと雖、既に昨年四月より更改せられたる佛敎大學幷に專修學院の學課目中に加へられ、又た昨年度第三回（八月末擧行）の敎師試驗より始てこれを課せらるゝに至りしは、多數讀者の既に了知せらるゝ所なるべし、依て本號より逐次この講題を掲げて筆を取らんとす、而して叙述の方針如何といふに、まづ『本典』『七祖聖敎』等に引用せられたる經論を撰びて聊その大意を解說すべし、さはれ、豫め諸經論の題號を掲るの煩を避けて取りあへず本號には涅槃部に屬する經卷數部を撰ぶことゝなしぬ、卽ち左の如し。

大般涅槃經

大悲經

集一切福德三昧經

菩薩處胎經
蓮華面經

更に一言附記し置くべきことあり、予は何故にまづ涅槃部に着眼せしかといふに、高祖は『本典』六軸中數多の經論を引用したまひしも、その最も多きを占むるは實に涅槃經なりとす、これ予がまづ涅槃經を撰びし所以にして、從て涅槃部に屬する數部をも附加せるのみ。

第一　大般涅槃經

一　大乘涅槃經と小乘涅槃經

涅槃經に大乘部に屬するものと小乘部に屬するものとの二種あり、まづ大乘部に屬する諸譯を譯經目錄によりて列記せば左の如し。

胡般泥洹經　二卷　漢　支讖譯　缺
大般涅槃經　二卷　魏　安法賢譯　缺
大般泥洹經　二卷　吳　支謙譯　缺
大般泥洹經　六卷　東晉　法顯譯　存

大般涅槃經　四十卷　北涼　曇無讖譯（北本）存
大般涅槃經　三十六卷　宋　慧觀等修訂（南本）存
般泥洹經　二十卷　北涼　智猛譯　缺

右七本中現存するは、法顯譯と南本北本の三本なり、卽ち三存四缺なり、而して南本は法顯譯と曇無讖譯とを對照し曇無讖譯を修訂して成りしものなれば、七本ありと雖も實は六譯に過ぎざるものとす。

法顯譯は法顯三藏の在竺中（東晉安帝隆安三年、長安を發して渡竺の途に上る、正に是れ佛敎支那に傳來せしより三百三十三年、在竺十一年、歷遊三十國）中印度巴連弗（波吒釐子城 Pataliputra 現今のパトナ市）阿育王塔南天王寺に得たる梵本にして、東晉義熙十三年、道場寺に於て覺賢三藏と共に譯して六卷とす、羅什門下四哲の一人なる道生これに依て闡提成佛の說を唱へたりしが、經中にその明文なきを以て邪說として擯斥せられたり、蓋し法顯譯泥洹經は尙後半を缺けばなり、後ち曇無讖譯の涅槃經內地に傳來するや、果して闡提成佛の明文あり、人皆道生の卓見に服せりといふ。

北本は、北涼玄始三年より同十年に至るの間に於て、中印度三藏曇無讖の涼州姑臧に在て譯出せるもの、讖始め十卷を譯し、更に其後分の闕を補はん爲に印度に還り、梵書を索め來て之を續譯し

四十卷を完成す、時に玄始十年なり、然るに尚その闕分あるを聞き、再び印度に還りて之を搜索せんと欲せしも、北凉王蒙遜その去るを惜みて應せず、識遂に彼の命を待たずして西行す、蒙遜是に於てか赫怒し、刺客をして途に識を殺さしむ、可惜。

識の譯出せし涅槃經は、久しからずして宋土に傳はり、羅什門下の英傑、慧嚴、慧觀、道生の三師並に之を弘布せり、而して慧嚴、慧觀・謝靈運等、曇無讖譯と法顯譯とを參照して讖譯を文飾し品名を加減して一本を出だしき、これより北凉の原譯を北本と稱し、宋土の修訂を南本と名け、二本並び行はる、而して法顯譯の六卷十八品は北本の初五品十卷、南本の十卷十七品に當る。

前記三存の外の四缺に就ては、全く其內容を知ること能はずと雖、その卷數の少きを見れば、蓋し大般涅槃經の一部分なることを類推して誤なかるべき歟。

更に藏經目錄を見るに、涅槃部に屬する經卷は、三存の涅槃經以外に十三部あり、何れも佛陀の入涅槃に多少の關係を有するものならざるはなし。

既に大乘部に屬する涅槃經に就てその種類を記述し終りたれば、次に小乘部に屬するものに就て一言せざるべからず、之に二種あり、卽ち左の如し。

第一種

雜阿含經第四十四卷第二十

別譯雜阿含經第六卷第十

第二種

長阿含經中の遊行經（第二卷より第四卷に至る）

これに異譯三部あり、左の如し。

佛般泥洹經　二卷　西晉　白法祖譯

大般涅槃經　三卷　東晉・法顯譯

般泥洹經　二卷　失譯

第一種は佛陀の入滅に關する簡單なる事實的記述なり、第二種は更にこれを廣說敷演せるもの、卽ち入滅の前後に亘れる比較的詳細なる記述なり、而して大乘涅槃經が法身常住佛性涅槃の深義を開顯せるものとは頗る趣を異にし、小乘敎的に佛陀入涅槃の事實を記載せるを以て小乘涅槃經の特色とす。

二　支那に於る傳譯講究

支那佛敎は、姚秦弘始三年（東晉安帝隆安五年）羅什三藏關中に來りて盛に空宗を宣傳せしより、次第に十三宗の興隆を見るに至りしことなるが、眞空と妙有とは本來表裏を成せるものなれば、眞

空は必ず妙有を反顯す、されば羅什所傳の空宗の勃興に伴ふて、妙有の方面を代表する涅槃經の講究また其譯出と共に當然盛んなるべきものなりとす、かくて涅槃經を主として講究する涅槃學派は夙に三論成實の盛行に伴ふものあるに至りき、而して前節既に述る所の如く、道生は法顯譯泥洹經に依てまづ闡提成佛の深解を發表し、次で北本の宋土に傳來するや茲に南本の成立となり、以て漸く講究の盛時に入れり。

支那の涅槃宗は曇無讖の涅槃經譯出に基くこと勿論なるが（讖の涅槃經四十卷を完成せる北凉玄始十年は、法顯譯の成りし東晉義熙十三年に後るゝこと四年）この學派の興隆に與て力ありしは、實に道場寺の慧觀その人なりとす、爾來、六朝を經て初唐に至るまで、此經を講布すること常に盛んにして涅槃宗なる一派を成し來りしも、天台宗勃興以後、法華涅槃を同一味の經と判せし結果、自から天台宗に融合する傾向を馴致し、中唐以後は全く融合するに至りき、而して六朝の間に於る幾多明匠中、寶林、慧靜、慧皎、慧遠、寶瓊、靈裕等の十四家各註疏を撰せしと雖、惜哉、亡逸して今に存せず、唯僅に慧遠の涅槃經義疏二十卷、嘉祥の涅槃經遊意一卷、天台の玄義及び疏あるのみ。

涅槃宗の興起に伴ふて支那佛教界に一大異彩を放てるは、實に教判論なりとす、教判とは大藏觀なり、一代佛教に對する自家の見解なり、それ漢代以後陸續譯出せられし經論なるものは、大小二

乘、頓漸二教、紛然としてまことに望洋多岐の感に堪へざりしなるべし、是に是てか、是等經卷の分類歸屬を明かにし、世尊一代の化益が如何に終始せるものなるや、且つ攝機調根の深意が、如何にして果遂せられしものなるか等の幾多の疑問に對する解答として起りしものは、實に教判論なりとす、而して教判論の濫觴ともいふべきは羅什の一音教なりと雖、これ唯濫觴たるに留まりて未だ教判組織として觀るに足らず、然るに道場寺慧觀法師一たび涅槃經に依て頓漸五時の判を立つるや爾來各種の教判論は江の南北に起り、洵に異彩煥爛たるものあるに至りき、天台大師は是等各種の教判を南三北七十家の異說として列擧せる中、南三の所立は何れも慧觀の典型を出でざるものゝ如し、以て當時江南に於る涅槃宗の盛況を察するに足らん歟、さはれ、慧觀所立の教判とは實に左の如し。

- 頓
  - 華嚴經
- 漸
  - 有相教
    - 阿含經
  - 無相教
    - 般若經
  - 抑揚教
    - 維摩經
  - 同歸教
    - 法華經
  - 常住教
    - 涅槃經

この教判に依て見るに、華嚴と涅槃とは何れも佛自内證の極理を談せしものなれど、華嚴は頓に至理を開顯し、涅槃は所化の機類を漸次に開發陶冶し來て最後に至理を開顯せしものなれば、理の淺深に就けば華嚴涅槃全く同一なりと雖、諸機を攝する上に於て涅槃は最も優れるものなりとするに在り、而して此教判成立の經過に就て思擇するに、涅槃經譯出の前年、卽ち宋永初元年、六十華嚴は曇賢三藏によりて譯成せられ、彼羅什所譯の法華維摩等並にその前後に亘りて幾回も傳譯せられし諸部の般若及び阿含等と相待て、茲に釋尊說法の始中終を見ることを得たるものなれば、慧觀法師の教判の出づる洵に偶然ならずといふべし。

三　高僧の涅槃經觀

高祖、『本典』所々に涅槃華嚴等の諸經を引用したまへるに就て、その引意所々異なるものあるは勿論なりと雖、これを概括して高祖の對聖道諸經觀を伺ふに、所謂、三部中の大藏として適宜引用したまへるものなるべし、『行卷』一乘海釋の下に（四十五丁右）「涅槃經』の「善男子實諦者名曰大乘（中略）一道者謂大乘也」の諸文を引用したまへるに就て、『六要鈔』には次の如き問答を設けられたり。

問。此等經文。不レ說二彌陀如來功德一。何引レ之耶。

答。一往誠然。但有二深意一。一代教文。隱顯雖レ殊。併說二彌陀濟凡利生一。得二此意一時。諸文無レ違。

以レ之言レ之。或云二一道一。或云二一實一。或云二一乘一。潛顯二念佛一乘之理一。粗明二淨土一實之義一。遙說二淸閑一道之利一。云々

以て知るべし、此意によれば、聖道一代の諸經には表裏隱顯の兩面ありて、表面には彌陀念佛の法門を開說せずとも、裏面には何れも彌陀法門の深意を存せざるはなし、此意を得て聖道の諸經を見る時は悉くこれ彌陀法門中のものなりといふにあり、凡そ各宗に通じて各その宗旨眼を以て一代經を見ざるはなし、故に天台には天台の一代經あり、眞言には眞言の一代經あり、今も亦た淨土眞宗の眼光を以てする時は、一代經悉く眞宗の爲の一代經なり、日溪學則にいふ所の「大藏中の三部を學ぶことなく、須く三部中の大藏を學ぶべし」とは、之をいふなり、これ一見甚しき宗我見に陷りたるものゝ如く思はるれど、其實決して然らず、如何となれば佛陀世尊は衆生の機根に應じて開導したまはんが爲に、八萬四千の法門を開闡したまひしに外ならざれば、衆生趣入の門戸各異なるは理の當然なると共に、畢竟成佛の曉に至れば平等々々にして、縱說橫說全く同一際なるべし、是に於てか有緣の法門を信受奉行するに於ては、自から如上の宗旨眼を開くべきこと亦た呶々を待たざるところなりとす。

更に進んで高祖の涅槃經に對する深旨を伺ふに、『本典』所々に涅槃華嚴の次第を以て引用したまへり、それ華嚴は佛成道最初の說法にして所謂自内證の眞理を文殊普賢の大機に向て說きたまへる

もの、涅槃はこれ般涅槃の際に於る扶律談常の說法なり、然れば華嚴涅槃と次第すべき筈ならずや何故に逆次に涅槃華嚴と引用したまへるやといふに、本典中最も多く引用したまへるは涅槃經なり華嚴等は涅槃に比してその引文遙に少し、是を以て涅槃は助顯の正文と見ることを得べし、それ高祖が『本典』所々に正依の經文幷に異譯その他聖道諸經を引用したまふに就ては、正依は正證、異譯幷に聖道諸經はその助顯なることいふまでもなし、而して聖道諸經を以て弘願眞宗の法義を助顯する中、涅槃經に最も重きを置かれたる祖意は、引文の序次及び多引によりて明かなりといふべし、今茲に恐れながら這般祖意の存する所を伺ふに、試に左の四ケ條を列擧するを得ん歟。

佛敎講義錄

一、涅槃經は在世の機に被らしむるよりも、寧ろ滅後の弟子を敎誡したまふ經なり（次項、扶律談常の下參照）これ大に淨土の經と其趣を同ふす、淨土の經亦た滅後造惡の劣機を救濟するにあり、大經に曰く、「我以慈悲哀愍特留此經止住百歲」等と、觀經に曰く、「爲未來世一切衆生」等と、以て知るべし。

二、涅槃經は捃拾敎なり、天台に法華を大敎に譬へ、涅槃を捃拾に譬ふ、卽ち法華の開顯に洩れたる一類を救はんが爲に、更に四敎を並說し、後またこの四敎を泯じて一實の道に歸せしむ洵に佛一代の化益の終極を告ぐるものは涅槃經なり、故に此經を以て念佛成佛是眞宗の法義を助顯するは、いよ〳〵佛出世の本懷を明了ならしむるものなるべし。

三、法華同味の敎たる涅槃經を以て、法華同時の敎たる淨土の法門を助顯する意ありしならん、尤も念佛を以て法華同時の敎とすることは、存覺師以後の所談なりと雖、高祖にも亦た此意趣なしとすべからず。

四、相承の釋多く此經を引けばなり。

高祖屢々涅槃華嚴の次第を以て引用したまへるは、恐くは右に述ぶるが如き祖意の存するありて諸經中、先頭第一に涅槃經を引抄せられたるものならんかと伺はる、それ華嚴は佛成道最初の說法なり、涅槃は最後の大獅子吼なり、初後の二經を引用して聖道一代の經を總括したまふところ祖意深重、末徒宜しく思擇すべし。

佛敎講義錄

四　一經の要義

釋尊成道已來すでに五十年、各地に遊履して日夜に法雨を澍ぎたまひ、今や方に入滅すべきの時至れるを以て吠舍離國拘尸那城に入りたまふ、時に跋提河畔沙羅雙林の間に阿難の設けたる牀座は正に是れ大聖世尊最後の大獅子吼を爲し給ひし法座にして、涅槃經は實にこの際一日一夜の大獅子吼なりき。

涅槃經一部四十卷、これが宗要を述ることもとより容易の業に非ずと雖、且らく左記三項を提示

してその要義に擬する亦た可ならん歟。

（イ）一切衆生悉有佛性

佛敎講義錄

一切衆生悉有佛性の深義は、實に大般涅槃經の始終を通貫せるものにして、凡そ實大乘敎に於て佛性を談ずるもの一として涅槃經の所說に由らざるはなし、之を以て天台にては二經を合一して第五時とし、同一醍醐味の經とす、卽ち法華經に說く所の十界皆成佛と涅槃にいふ所の悉有佛性とは全く異なることなければなり、それ佛性とは開覺性なり、吾人相對的心念の中に宇宙絕對の理體を開覺すべき性種あるをいふ、而して相對と絕對とは隔別すべきものに非ず、相對卽ち絕對、絕對卽ち相對、眞如卽ち萬法、萬法卽ち眞如なり、されば眞如往いて萬法を現ずるに非ず、萬法來りて眞如に具するに非ず、相對を離れたる絕對なく、絕對を離れたる相對なし、所謂、煩惱卽菩提、生死卽涅槃なるもの、吾人現前の語默作々、乃至、蛙鳴蟬噪一としてその當所に如來の光明の赫奕たらざるなく、常樂微妙の法音を傳へざるはなきなり、然るに生死の外に涅槃を求め、煩惱を除却して別に菩提を求めんとするは、これ吾人隔歷不融の妄見にして恰かも澁柿を捨てゝ甘干を求めんとするが如きのみ、未だ迷悟不二の大悟界に證入せざる迷妄の致す所なり、涅槃經玄義（灌頂撰）卷上に曰く、

夫正道幽寂、無始無終。妙理虛玄。非新非故。無始而言其始者。謂之無明生死。無終而語其終者。卽是種智涅槃。無明生死。本自有之。名之爲故。種智涅槃。修因方克、目之爲新。此經乃於非始之始。分別佛性三因之殊。還就無終之終。辨於涅槃之三德極果之別。（中略）非新非故之理。卽是法身。非新而新之果。卽是摩訶般若。既有非新而新種智之圓極。則非故之故。無明生死患累。究竟斯亡。目之解脫。此則三德之義。宛然不縱不橫。妙等伊字。

此文によれば、佛果涅槃の三德たる法身、般若、解脫の三は、宛然圓具せられたるもの、卽ち法身とは非新非故の理體なり、般若とは非新而新の果なり、卽ち斷惑證理の智用なり、解脫とは無明生死永く離脫せる相なり、更に平易なる譬喩を以てすれば、法身とは火の如し、般若とは火の光能く物を照すが如し、解脫とは火にて物を燒き盡くせるが如し、一切の煩惱繫縛永盡せるをいふなり

佛敎講義錄

かくの如く果上に全現する涅槃の三德は宛然として吾人芥爾の妄心中に覆藏せらる、これを悉有佛性と名く、佛性と涅槃とは且らく因果の別ありと雖、因果一如なれば、本來非一非異なり、北本涅槃壽命品一之二に曰く、

我今當令一切衆生及以我子四部之衆。悉皆安住秘密藏中。我亦復當安住是中入於涅槃。何等名爲秘密之藏。猶如伊字三點。（∴）並則不成伊。縱亦不成。如摩醯首羅面上三目。乃得成伊。三點若別。亦不得成。我亦如是。解脫之法。亦非涅槃。如來之身。亦非涅槃。摩

訶般若。亦非二涅槃一。三法各異。亦非二涅槃一。我今安二住如一是三法一。爲二衆生一故。名入二涅槃一。

又た同如來性品第四之一に曰く、

如來是常住。法無有變易。諸佛所師。所謂法也。是故如來恭敬供養。以二法常一故。諸佛亦常。（中略）佛言。迦葉汝今不應作二如是言一。如來無常。何以故。如來是常。善男子。如二彼然木滅已有一灰。煩惱滅已。便有二涅槃一。

又た同上如來性品第四之六に曰く、

如來性實無二涅槃一。而諸衆生。皆謂二如來實般涅槃一。喩如二月沒一。善男子。如來之性。實無二生滅一。爲化二衆生一故示二生滅一。（中略）或見二半月一。或見二滿月一。或見二月蝕一。而此月性。實無二增減蝕噉之者一。常是滿月。如來之身。亦復如是。是故名爲二常住不變一。

又た同上光明遍照高貴德王菩薩品之六に曰く、

若有二衆生一。信二此經典一。乃至半句一。當知是人眞我弟子。因二如是信一。卽見二佛性一。入二於涅槃一。

これ等の類文一々引抄するの遑あらず、唯僅に一例を示すのみ、要するに佛性涅槃の深理を開說し、以て一切衆生をして悉く三德秘密藏に入らしめんための說法、これ如來臨滅の大獅子吼にてありき。

（ロ）信心佛性

信心佛性は、淨土眞宗に於る別途不共の佛性論なり、上に既に悉有佛性の要旨に就て實大乘圓融の所談一班を記し終りたる以上は、是れより進みて淨土眞宗別途の佛性論を尋究するところなかるべからず。

淨土眞宗にありては彌陀修得の佛性を談ず、故に眞宗眼を以てすれば、涅槃經に說くところの悉有佛性も全くこの信心佛性卽ち彌陀修顯の佛性に外ならざるものとす、彌陀修顯の佛性とは本佛彌陀の全性修起したまへる往生淨土の因種にして、これ所謂他力回向の大信心なるもの、吾等凡夫いかでか證大涅槃の佛因を蓄へんや、佛因は偏に本佛彌陀の成就したまへる名號實相法なるのみ、されば聖道諸宗にて盛に談するところの本具佛性論も、淨土眞宗の眼光を以てすれば彌陀修顯の佛性に外ならずして、彌陀法界身の別德を密に說き顯はしたまふものといふべし、而して彌陀の佛性卽ち衆生の佛性なり。『本典信卷』本二十右に涅槃經獅子吼品の文（北本三十二、南本三十）を引けり、卽ち左の如し

善男子。大慈大悲名爲二佛性一。何以故。大慈大悲。常隨二菩薩一。如二影隨一形。一切衆生。畢定當得大慈大悲。是故說言二一切衆生悉有佛性一。大慈大悲者。名爲二佛性一。佛性者。名爲二如來一。大喜大捨。名爲二佛性一。何以故。菩薩摩訶薩。若不一能二二十五有一。則不一能得二阿耨多羅三藐三菩提一。以二諸衆生畢當一得故。是故說言二一切衆生悉有佛性一。大喜大捨者。卽是佛性。佛性者。卽是如來。（以

上、四無量心(佛性)

佛性者。名二大信心一。何以故。以二信心一故。以下菩薩摩訶薩。則能具二足檀波羅蜜乃至般若波羅蜜一。一切衆生。畢定當中得大信心上故。是故說言二一切衆生悉有佛性一。大信心者。卽是佛性。佛性者。卽是如來。(以上、信心佛性)

佛性者。名二一子地一。何以故。以二一子地因緣一故。菩薩則於二一切衆生一。得二平等心一。一切衆生。畢定當二得二一子地一故。是故說言二一切衆生悉有佛性一。一子地者。卽是佛性。佛性者。卽是如來。(以上、一子地佛性)

佛教講義錄

右の文を『對問記』に解して曰く、此中三節あり、初に四無量心佛性を明す、今の引意卽ち佛心に約す、慈悲はこれ欲生心、喜捨は智惠に屬す、卽ちこれ至心なり、二心成一の故に能く衆生の佛性を成す、次に大信心を明して佛性と爲す、正しく衆生機受の信樂を指す、後に一子地を明して佛性と爲す、これ大信所得の利益なり、和讃に曰く「平等心をうるときを一子地となづけたり一子地は佛性なり安養にいたりてさとるべし」これ佛性の顯現に約するなりと。

今『對問記』の說によりて、更に上の涅槃經の文を伺ふに、正しく信心佛性を顯すは第二節の文なりと雖、第一節第三節亦た其義を助顯するに餘りあるを見る、まづ第一節の四無量心佛性に就て見るに、四無量心とは卽ち佛心なり、一切衆生畢竟じて當にこの佛心を得べきが故に一切衆生悉有佛

性とのたまへるなり、而して此文中、畢定當得、若くは畢當得といふもの、獨り獲信の行者のみ佛性を有するに非ず、未信の者も一として攝取衆生の佛の大悲に洩るゝ者なきを示すにあり、佛性卽如來とは因果不二の義にして、佛性とは因に約し如來とは果に約す、獲信の行者當に無上菩提を究竟すべきが故に因果不二の義邊よりして佛性卽如來といふべく、又た未信の行者も當得大信の義邊よりいへば、悉有佛性佛性卽如來といふを妨げざるなり、不能二十五有とは二十五有界に於て自由自在ならざるをいふ、若し能く大喜大捨を得れば迷界に於て自在ならざるなし、自在を得るに非ざれば阿耨菩提を得ること能はざるの意なり、

佛教講義錄

次の信心佛性の文中、大信心とは通途に約すれば凡夫二乘の心に簡異なれども、別途に約すれば自力の信に簡ぶものなること知るべし、而してこの他力の大信を得たる人能く六波羅蜜等の功德を具するなり、後の一子地佛性は大信所得の利益なるを既にいふところの如し、一子地とは初地の位に名く、菩薩この位に入れば怨親平等心を成就して衆生を見ること一子の如くなる故に一子地といふ、卽ち所謂正定不退の位に同じ、以上、三佛性の義を一言にして盡くせば、他力の大信これ佛心なるもの、佛心能く衆生心中に徹到して無疑信樂の大信を成じ且つ正定不退の位に入らしむることを示すにありとす。

（八）追說四教と扶律談常

涅槃經を說きたまひしには大凡二意あり、一は法華開顯の化益に洩れたる未熟の機を收拾して一實の道に歸せしめんが爲めにして、他の一は末代の機に對して其邪見を防護せんが爲めなりとす、第一意よりいへば涅槃は後番の醍醐味にして法華は前番の醍醐味なり、卽ち佛成道已來、華嚴の擬宜阿含の誘引、方等の彈訶、般若の淘汰を歷たる前番調熟の機は、法華の會座に於て既に入實し了りたるも猶この化益に洩れたる機類あり、依てこの機類の爲めに更に藏通別圓の四敎を說く調熟せしめ、具に佛性を談じて竟に一實に歸せしむるを以て涅槃經の目的とす、故に涅槃經に追說追泯の二方面あり、追說とは法華に於て曩に廢せられたる四敎を更に再び說くをいひ、追泯とはこの追說四敎を復た更に泯亡して一實に開會するをいふ、斯く法華の開顯に洩れたる一類の機を收拾するが故に、法華を大收に喩へ涅槃を捃拾に喩へて之を捃拾敎と稱す、卽ち法華の開顯は秋熟の時一齊に收穫するが如く、涅槃は遺穗を拾ふが如しとなり。

次に第二意よりいへば、涅槃を扶律談常の敎と稱す、蓋し末代の衆生は根機漸く淳朴を缺き惡見ます〳〵熾盛にして、佛法の中に於て斷滅の見を起し、或は因果の理法を撥無し、或は圓理の高妙に馳せて妄りに戒律を破り、遂に中道の慧命を夭傷し常住の法身を忘失するに至る、佛豫て之を惑みたまひ、諸種の惡見を防がん爲めに涅槃經に於て具に前三敎の方便を用て圓實常住の眞理を助顯し、且つ善惡因果三世相續の道理を示し、以て斷滅の見に墮する者、及び高妙の理談にのみ馳する

者を痛誡し、特に戒律を扶持して實踐道德の重んずべきことを懇諭したまひき、故にこれを末代贖命の涅槃とも稱す、命とは智慧の命根なり、卽ち正見に住して觀慧を修せしむるを贖命といふ、而してこれに對して前の捃拾敎としての涅槃を當座贖命の涅槃とも名く。

斯の如く二意ありと雖も、涅槃經の眞の目的は前者に非ずして寧ろ後者にあり、扶律談常の敎これ正しく入滅に際する佛陀矜哀の至極なり、之を要するに一切衆生悉有佛性の所談は當座末代を通じて諸機を悉く三德秘藏の大涅槃に歸せしむる爲めなれば、闡提斷善の輩と雖も皆成佛せざるはなきなり、啻に有情に佛性を具するのみならず、無情の草木瓦礫にも皆悉く佛性を具して法界は一圓の佛性なるものなれば、之を法華の一切皆成佛道の說に比するに二經全く同一致に歸す、爰を以て天台にては法華涅槃の二經を合して第五時とし、前番後番の異あれども同じく醍醐の極味に比す、されど其內容を檢すれば法華は純圓獨妙なれども、涅槃は四敎を追說するが故に法華の純圓なるが如きに非ず、故に論其部內純雜小異（『四敎儀』といひ、又た二經の功用を論ずるときは、大收と捃拾との相異あれば、二部同味涅槃尙劣（『釋籤』一之上）と判せり。

以上、僅に三項目に就て要義一班を摘記し畢りぬ、『安樂集』上五右に曰く、若依二涅槃經一佛性爲宗と、今や此一節を終るに臨み、更に要文二三を抄錄する亦た可ならん歟。

『北本涅槃』如來性品第四之二に闡提成佛の理を說て曰く

解脱者。名曰虚寂。無有不定。不定者。如一闡提究竟不移。犯重禁者。不成佛道。無有是處。何以故。是人若於佛正法中心得淨信。爾時卽便滅一闡提

又た『同上』聖行品七之四に此經の最上最妙なる所以を説て曰く

譬如從牛出乳。從乳出酪。從酪出生酥。從生酥出熟酥。從熟酥出醍醐。醍醐最上。若有服者。衆病皆除。所有諸藥。悉入其中。善男子。佛亦如是。從佛出生十二部經。從十二部經出修多羅。從修多羅出方等經。從方等經出般若波羅蜜。從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐。言醍醐者。喩於佛性。佛性者。卽是如來。以是義故。說言如來所有功德無量無邊不可稱計。迦葉菩薩白佛言。世尊。如佛所讃。大涅槃經。猶如醍醐。最上最妙。若有能服。衆病悉除。一切諸藥。悉入其中。我聞是已。竊復思念。若有不能聽受是經。當知是人。爲大愚癡。無有善心。

又た『同上』梵行品第八之四に此經を如來秘密之藏となすことを説て曰く

復有二種。一者十一部經。二者方等經。十一部經。則有壞滅。方等經典。無有壞滅。善男子。若我弟子。受持讀誦書寫解説方等經典。恭敬供養。尊重讃歎。當知爾時佛法不滅。（中略）大涅槃經。悉是一切諸佛秘藏。何以故。諸佛雖有十一部經。不説佛性。不説如來常樂我淨。諸佛世尊。永不畢竟入於涅槃。是故此經。名爲如來秘密之藏。十一部經。所不説故。故名爲

藏。

先に涅槃經中、大乘部に屬するものと小乘部に屬するものとの二類あるを示せり、而して上來聊か大乘涅槃經に就て解説するところありしが、最後に品名及大科を掲げて此經に對する解説を終らんとす、尤も小乘涅槃經の内容及大小兩部の比較に關して更に後日を期せしめよ。

五　品名及大科

『涅槃經義記』（隋慧遠撰）卷一本には『北本』に就て左の如く大科を分てり。

- 序分――――――壽命品第一（卷第一）
- 開宗顯德分――壽命品第一之二（卷第二）
- 辨修成德分――
  - 壽命品第一之三　金剛身品第二　名字功德品第三（卷第三）
  - 如來性品第四之一―第四之七　一切大衆所問品第五（卷第四―第十）
  - 現病品第六　聖行品第七之一―第七之四（卷第十一―第十四）
  - 梵行品第八之一―第八之六　嬰兒行品第九（卷第十五―第二十）
  - 光明遍照高貴德王菩薩品第十之一―第十之六（卷第二十一―第二十六）
  - 師子吼菩薩品第十一之一―第十一之六（卷第二十七―第三十二）

- 迦葉菩薩品第十二之一—第十二之六（卷第三十三—第三十八）
- 憍陳如品第十三之一　第十三之二（卷第三十九—第四十）

破邪通正分——憍陳如品第十三之一—此後一分。外國不來。

如來滅度闍維供養分—此後一分。外國不來。

而して右大科五段に關して次の如き簡單なる説明を與へたり。

化必有レ由。故先明レ序。由序既興。宜レ顯二所明一。故次第二。顯レ宗開レ德。宗謂諸佛圓極妙果。果成レ由レ田。故次第三。辨二修成德一。眞法既開。欲下以二所明一傳レ化不上レ絶。故次第四。破レ邪通レ正。爲レ化既周。遷レ影歸レ寂。故次第五。如來示レ滅。人天大衆。闍維供養

次に『南本涅槃經疏』（隋灌頂撰）には左の如く分科せり。

- 一召請涅槃衆——序品——卷第一
  - 純陀品二
  - 哀歎品三——卷第二
  - 長壽品四
  - 金剛身品五
  - 名字功德品六——卷第三
  - 四相品七——卷第四、五
  - 四依品八——卷第六
  - 邪正品九
  - 四諦品十
  - 四倒品十一——卷第七
  - 如來性起品十二
  - 文字品十三
  - 鳥喩品十四——卷第八
  - 月喩品十五
  - 菩薩品十六——卷第九
  - 大衆所問品十七
  - 現病品十八——卷第十
  - 聖行品十九——卷第十一、二、三
  - 梵行品二十
  - 嬰兒品二十一——卷第十四—第十八
  - 高貴菩薩品二十二—卷第十九—第二十四

- 二開演涅槃施
- 三示現涅槃行

- 四問答涅槃義
  - 師子吼品二十三――卷第二十五―第卅
  - 五攝所涅槃用
    - 迦葉菩薩品二十四―卷第三十一―卅四
    - 憍陳如品二十五――卷第三十五、卅六

唐麟德年至後分經四品半

- 初折惡攝邪用
  - 陳如品末
  - 遺教品一――卷第三十七卷
- 次化周掩迹用
  - 還源品二
  - 茶毗品三
  - 廓潤品四――卷第三十八

右の科圖は、『縮刷』盈帙卷七『南本涅槃經』の卷頭に揭げられたるものに依る、此中、最後の第三十七、第三十八の兩卷は、『大般涅槃經後分』（大唐南海波凌沙門若那跋陀羅譯）と稱せらるゝものにして、先きに曇無讖の北本涅槃四十卷を譯成したる後、尙その闕分あるを聞き再び印度に還りて之を將來せんことを企てしものなるべし、而して『閱藏知律』卷二十五丁十には、南本涅槃經の品名を列記し終りて左の如く附記せり。

此部文更精練。章安尊者依此作疏。但世罕流通。而舊本久行二世間一矣。

猶、法顯譯『泥洹經』六卷十八品は、北本の初五品十卷、南本の十卷十七品に相當すること、既に一言し置けり、左に其品名を列記すべし。

卷第一（序品、大身菩薩品、長者純陀品）
卷第二（哀歎品、長壽品、金剛身品、受持品）
卷第三（四法品）
卷第四（四依品、分別邪正品）
卷第五（四諦品、四倒品、如來性品、文字品、鳥喩品、月喩品）
卷第六（問菩薩品、隨喜品）

『大涅槃經』四十卷十三品、各品の大要を叙述すること、餘りに廣博なれば、これを省略せりと雖も、『閱藏知律』卷二十五丁一以下に就て知るを得べし。

最後に『七祖聖教』『本典』に涅槃經を引用したまひし箇所を指摘すること左の如し。

『往生論註』上二十二丁
『安樂集』上四丁（三文）　同八丁　同十七丁　同二十四丁　同三十五丁（三文）　同三十六丁　同下卷三丁（二文）　同十一丁　同十七丁
同二十二丁
『往生要集』上本二十四丁　同上末二十九丁　同中本二十一丁　同下末三十丁　同三十六丁　同三十七丁

『本典』行卷四十五丁（四文）　信卷本二十一丁　同二十二丁　同二十三丁（二文）　信卷末一丁　同五丁　同七丁　同十二丁
同十三丁以下　證卷五丁　化卷本二十六丁　同四十一丁　同末一丁

第二　大悲經

北印度烏長國（Udyāna 玄奘の烏仗那、今のスワート河の沿岸）の沙門那連提黎耶舍（Narendrayaśas）の北齊に來り譯出するところにして五卷十三品より成る、左に各品の大要を記述すべし。

梵天品第一、佛、拘尸那城力士生地娑羅雙樹間に在りて、將に涅槃に入りたまはんとし、阿難に命じて敷具を安置せしむ、阿難、悲泣流涙禁ずる能はず、時に三千大千世界六種震動、悲痛の光景を以て掩はれ、百川流れず、草木傾倒し、禽獸鳴かず、日月星霜また光りなし、既にして三千大千世界主、大梵天王、高心自恃、思へらく、此世界及衆生は是れ我所作なり、是れ我所化なり、然るに今や闇昧にして光りなきは、正に是れ如來入涅槃の相なりと、憂愁樂まずして佛所に到り、頭面に禮を作して白すらく、願はくば世尊、我に敎勅したまへ、云何にして住し、云何にして修行せんかと、佛、大梵天の心中の所念を洞知して問ひたまはく、梵天、汝の意に於て如何、此世界及衆生

は是れ汝の所作なりや、又た汝の所化なりやと、梵天恐懼して曰く、我れ本曾て斯る惡見を抱き、此世界及衆生は是れ我所依なり所化なりと思惟しき、然るに今我無智邪見を知るを得たり、願はくば還て佛に此義を問ひ奉らん、此世界及衆生は是れ誰の所作にして又た誰の所化なりやと、佛言はく、所有世界は是れ業の所作なり、是れ業の所化なり、一切衆生は是れ業の所作なり、業の所化なり、業力の所生なり、唯業あり法あり、和合因緣の故に衆生あり、若し能くこの業と法との和合を離れなば、則ち能く生死を遠離するを得んのみ、梵天、應に知るべし、此三千世界は梵刹に非ず、亦た外道六師の刹土にも非ず、これ我佛土なり、我れ長夜に四攝事を以て此衆生を攝す、所謂布施愛語、利行、同事なり、我れ今此世界を以て汝に附屬す、汝當に正法をして斷絕せしむること勿れと、梵天、卽時、聖法中に於て正信を生じき。

商主品第二、魔子あり、商主と名く、佛の涅槃を聞て憂惱戰慄、佛の所に到りて白す、唯願はくば世尊、衆生を憐愍し、世間を救護せんが爲に、涅槃に入りたまふこと勿れと、佛告げたまはく汝が父波旬、既に我れに請ふて涅槃に入らしめんとす、我れ彼の意に隨ふて之を許せりと、商主曰く、魔波旬は我父に非ず、我善友に非ず、我怨家大惡知識なりと、次で佛、商主に告げたまはく、汝我涅槃を聞て便ち淨信を生じ、衆生の爲に悲心を起して我れに住世を請ふ、此善根を以ての故に汝當に彌勒の出世に値遇し、八十劫を經たる末後身に於て悲愍と名くる辟支佛と作るべしと。

帝釋品第三、　釋提桓因、佛の所に到り頂禮して曰く、聖者目連、世に在りし時、法を以て阿修羅を伏し、諸天と鬪戰することなからしめき、然るに目連先きに滅度し、今復た如來般涅槃したまはんとす、今より後、阿修羅攻め來らば如何なる方計をか作さんと、佛言はく、憂ふること勿れ、若し持戒清淨にして欲と瞋と癡とを離れなば、所願必ず成らん、我れ今より當に加被を作すべしと、次で阿修羅を化して鬪諍を離れ慈心を修せしむ。

羅睺羅品第四、　羅睺羅、佛の涅槃を見るに忍びずとて、東北方難勝佛の所に到る、佛乃ち慰諭して拘尸那城に還らしめんとす、羅睺羅次で上方商主佛の所に往く、佛亦た種々に慰諭して拘尸那城に還らしむ、爾時、商主佛偈を說て曰はく、

諸行無常　是生滅法　生已還滅　滅後爲樂

と、既にして羅睺羅、拘尸那城釋尊の所に還る、世尊爲めに見實諦品を說きたまふ、その要に云はく如是法住、畢竟不生、畢竟不滅、畢竟空、畢竟無自性と、大衆これを聞て各三乘の益を得たり。

迦葉品第五、　阿難、佛邊に侍して慟哭悶絕す、佛言はく、汝憂愁すること勿れ、我正法當に廣く流布し久しく世に住して天人を利益すべし、我涅槃の後、迦葉比丘、汝と共に發心して我正法を護持すべしと。

持正法品第六、　阿難に對して佛滅後多くの弘法の人あることを說て曰はく、一に毗提奢比丘、

二に提知迦比丘、三に優波毱多、四に阿輸婆毱多、五に鬱多羅、六に設陀沙茶上座、七に毘頭羅及び刪闍耶二人、八に大精進、九に末田提、十に迦葉、十一に闍知迦長者、十二に法增優婆塞、十三に祇婆迦比丘、十四に大施國王、是等諸人、我正法を開示演說廣行流布すべし、汝憂愁すること莫れと。

舍利品第七、　復た阿難に告げたまはく、我滅度の後、若し善男子善女人、我舍利を恭敬尊重供養する者あらんに、一切皆當に涅槃の果を得べし、又に心に敬信を生じて我形像塔廟を造立する者あらんに、一切皆當に涅槃の果を得べし、又た若し佛を念じて一花を空中に散ずるも、猶能く涅槃の果を得、いかに況んや如來に親承し如來を供養する者をや、諸佛の境界は不可思議なり、人能く供養するあらば所得の福德亦た不可思議なり、諸福田中、佛は無上究竟の福田なり、阿難、汝、憂悲すること莫れ、汝、我れに承事供養すること二十年を過ぐ、如來八萬四千の法寶聚を受持せり、我滅後、汝、摩訶迦葉と共に大導師と作りて當に大神通功德利益を得べしと。

禮拜品第八、　復た阿難に告げたまはく、若し衆生ありて佛名を聞かん者、畢に定で當に涅槃に入るを得べし、若し南無佛と稱ふる者あらば、その功德虛しからず、必定涅槃に到達せん、如何となれば、此は是れ諸佛世尊の名號音聲なるを以ての故なり、今譬喩を說て此法中に於て信心を增益せしめん、過去に大商主あり、諸商人を將ひて大海に入る、時に摩竭大魚あり、來て船を呑噬せん

とす、商人驚怖色を失ひ、諸尊天神に祈請して救を求む、爾時、商主、船上に在て一心に佛を念じ合掌禮拜して唱ふらく、南無諸佛、得大無畏者、大慈悲者、憐愍一切衆生者と、諸商人亦た異口同音にかくの如く三稱す、既にして摩竭魚口を閉ぢて去り、其後命終りて人中に生じ出家して阿羅漢果を證りき、魚族にして佛名を聞くも所得の利益猶かくの如し、況んや、親しく佛所に於て諸善根を稱る者をやと。

善根品第九、　復た阿難に告げたまはく、若し衆生ありて、諸佛の所に於て一たび信心を發せば是の如きの善根遂に敗亡せず、いかに況んや諸の餘の善根を作すをや、譬へば、一毛を破斥して百分とし、一分の毛端に一滴の水を霑し、この水滴を恒河に投じ流に隨ふて大海に入らしむるに、劫盡の時至るとも水滴不增不減なるが如し、應に知るべし、細毛端とは心意識に諭ふ、恒河とは生死の流に喩ふ、一滴水とは一發心微少の善根に喩ふ、大海とは佛如來應正遍知に喩ふるなりと。

布施福德品第十、　復た阿難に告げたまはく、少善根を作すとも終に虛設ならず、一念の信を發さば皆當に涅槃を得べし、譬へば、捕魚師の魚を得んとて大池水に釣餌を置くに當り、魚來て呑食すれば、池中に在りと雖も久しからずして當に岸上に置かるべきが如し、言ふところの魚とは諸凡夫に喩ふ、池とは生死海に喩ふ、釣とは種る所の善根に喩ふ、釣に繩あり、繩は以て四攝に喩ふ、而して捕魚師とはこれ佛如來に喩ふるなり、應に知るべし、若し佛田に施はば假使久遠なるも終に

敗亡せず、必ず當に涅槃の果に趣くべしと、次で五莖の優波羅華を以て燃燈佛に供養せる妙報を示現したまひき。

植善根品第十一、　復た阿難に告げたまはく、我れ燃燈佛より以後、迦葉佛に至るまで多くの佛に値遇して、金華、銀華、寶錢、象寶等を供養し、梵行を修して怠ることなかりき、是れ皆無上菩提を求めんが爲めにして、自から度し、亦た未度を度せんが爲めなり、汝應に知るべし、佛所に於て善根を種ゆれば當に是の如きの大神通大利益大功德を得べしと。

以諸譬喩付囑正法品第十二、　復た阿難に告げたまはく、我れ本と菩薩の道を行せし時、久しく苦行を修しき、一切捨て難きをば悉く捨て、衆生の爲に衆苦を受くること極まりなかりき、而して今、汝及び諸天人の爲めに大利益を作し、大攝受を作し、無上安穩の道に向はしむるを得たり、汝等勤修して放逸なる莫れと、又た告げたまはく、阿難、汝、我を愛するや、阿難曰く、我れ世尊を愛すること言說を以て盡くすべからず、我れ如來の爲めに身命を捨つるも亦た惜まずと、時に世尊親しく阿難の手を執りて曰はく、汝若し我を愛せば、應に我が爲に愛事を作すべし、我れ無量百千億那由陀阿僧祇劫に於て積集するところの大法寶藏を以て汝に付囑す、汝當に護持して斷絕せざらしむべし、我れ今、喩を說て汝に敎勅せん、譬へば長者あり、一子を敎育して後、鉅萬の財寶を其子に付囑して曰く、汝、今日より當に三事を學ぶべし、以て我門族舊業を保守するを得べし、三事

とは、一に欲、二に精進、三に不放逸これなりと、然るに其一子、狂惑放逸にして父母の財産を蕩盡するに至らば、阿難、汝が意に於て如何、如來は則ち父なり、汝は一子の如し、今日は是れ我が最後の敎誡なり、我れ阿僧祇劫に於て積集せる無上法寶の庫藏を以て汝に付囑す、汝當に堅持して退失せざらしむべしと。

問敎品第十三、　最後に阿難に對して滅後結集の法を示し、且つ未來世法滅の時に於る比丘の六貪を誡しめ、愼みて放逸なる莫れと、懇誡痛諭したまへり。

以上、五卷十三品の大要を記述し終る、之を要するに、此經は阿難及羅睺羅、梵天帝釋等を對告衆とし、以て佛陀世尊無蓋の大悲を宣說したまへるものにして、まづ、世尊臨滅に於る悲絕哀絕の光景より說き起し、この三千大千世界を以て永く正法流布の佛土たらしむべし、これを大梵王に付囑し、次で、念佛、稱名、供養等の諸善を勸說し、更に滅後正法の護持に就ては、毗提奢比丘等の十五人を懸記し、最後に至りては、阿難にその重任を荷負せしめたまふもの、洵に是れ世尊矜哀の至極を感戴せざるべからざるなり。

『七祖聖敎』中、『安樂集』下十一丁　幷に『往生要集』下本二丁　同七丁　同二十丁（二文）　同下末二十五丁　同二十七丁に此經を引用せられたり、而して『本典』には信卷末八丁　化卷本四十三丁　に引文あり、披て見るべし。

第三　菩薩處胎經　Bodhisattva-garbhastha-sûtra

一　譯者幷に異名

姚秦の代、凉州沙門竺佛念の譯出するところにして、宋、元、明の三本には、標記の如く菩薩處胎經と題し、且つ一部を五卷に分てるも、麗本には菩薩從兜術天降神母胎說廣普經と題して、七卷に分つ、而して共に三十八品より成る。

二　一經の大意

處胎菩薩の神力妙用を闡顯するを以て一經の旨歸とす、まづ其說相よりいへば、佛、入涅槃に臨みて神力を示現し、母胎の中に十方の菩薩を集めて種々の法門を宣說したまへるものにして、種々の法門とは、或は大菩薩所成の神通功德を說くが如き、或は八方佛刹の事を說くが如き、或は六趣衆生の行業果報不可思議なるを說くが如き、或は佛陀世尊幷に菩薩の過去の本生本事を說くが如きこの他或は十住四禪、常無常、有盡無盡、六通慧等、一々列擧するの煩に堪へずと雖も、要するにこれ等種々の法門は、一切衆生をして第一義空無所有の眞理に通達せしめんが爲めなりとす、而し

て神力處胎の說法將に終らんとするに臨み、この胎化經典を以て彌勒に付囑し、當來に廣宣流布せしめたまひ、且つ斯經はこれ諸佛の父母、衆經中の長なりとて、奉持讀誦の功德を懇說したまひき猶、各品に就ての大意は次節に略記するが如し。

三　各品の大意

天宮品第一、　佛、伽耶羅婆兜釋翅授城北雙樹間に在て、將に涅槃に入らんとし、二月八日夜半金棺の裏に入て臥したまふ、時に梵天帝釋、諸大菩薩その周邊に立つ、須臾ありて佛と阿難との間に數番の問答ありたる後、佛、神足を以て母摩耶身中に於て坐臥經行する相を現じ、復た其胎宮に十方の菩薩を集め、文殊に對して處胎菩薩の神力を說示したまひき。

遊步品第二、　彌勒及び分別身觀菩薩の問に答へて第一義空無所有の法を說き、次で曰はく、菩薩能く空無所有に通達するが故に、卽ち胎中に於て無上道を成ずることを得るなりと。

聖諦品第三、　菩薩、四衆、天龍、鬼神等に對して、菩薩賢聖諦の法を說く、聖諦とは四禪を修して三昧力を成就するの法にして、能く三昧力を成就すれば、卽ち胎中に於て無上道を成ずと。

佛樹品第四、　佛、瑠璃定無形三昧に入て七寶樹を化現し、希有の法を闡揚したまふ、希有の法とは、大菩薩所成の三業功德及び神通說法これなり。

三世等品第五、　喜見菩薩の問に答へて無畏空界三昧に入り、三世無央數劫の間、四生に入て一切の衆生の爲めに、說法敎化することを說き、次に彌勒菩薩の問に答へて、その狐疑を解かんが爲めに、三世三界四生の身色すべて空なるを說き、最後に五十六億七千萬歲を經て無上覺を成ずることを懸記したまひき。

想無想品第六、　彌勒菩薩に告げたまはく、今當に識、想、受、無識、無想、無受を說くべしとて、識想受を分別解說したる後、大迦葉、佛に白さく、意、心、識、想、受何の差別ありやと、佛これに對して心、意、識、想、受は、人體の肢節各別名あるが如く、又た根莖枝葉の樹に於るが如しとて、最後に盲人模象の喩を擧げたまひき、試に其文を抄記すべし。

一一令二諸盲人。自在捉二象。是時盲人。或捉二象鼻一。或捉二象耳一。或捉二象頭一。或捉二象脚一。或捉二象腹一。或捉二象尾一。王問諸盲人曰。象何所像類。盲人答白。捉鼻者言如角。捉頭者言如甕。捉耳者言如簸箕。捉腹者言如箕。捉脚者言如柱。捉尾者言如箒。時傍觀有目之士。笑二彼盲者。不レ得二象具相一。盲人屏處。自共論說。（中略）迦葉。此亦如是。識想受法。各各不同。觀諸法性。無異無別。

住不住品第七、　時に坐中に無住菩薩あり、如來無量の法義を開くことを得て大に喜び、說偈讃佛に次で、世尊に住不住を說きたまはんことを願ふ、世尊告けて曰はく、色相、受相、想相、行相、識相、內法、外法、內外法、乃至發心成道、莊嚴佛土、遊戲百千三昧、四禪、四無量慧等、一切淸

淨にして不住不不住なりと、更に迦葉に告げたまはく、今當に八清淨甘露法味池を說くべし、何等をか八となす、一に喜味、二に盡味、三に定味、四に到味、五に靜味、六に相味、七に不動味、八に不究竟味これを浴池の八味と爲す、若し菩薩摩訶薩、この甘露漿を飲む者は、三惡道に入らず、無上道を成じて心垢を洗除し盡くすを得べしと。

八種身品第八、　佛、三昧力を以て諸魔を降伏することを說き、次で八方佛刹の事を說きたまふ。八方佛刹とは、東方阿閦佛刹、北方光影佛刹、西方無量壽佛刹、南方踊躍佛刹、東北方果熟佛刹、西北方寶瑠璃佛刹、西南方無想佛刹、東南方瑠璃佛刹これなり、中に無量壽佛刹を說ける文に曰く、

西方去二此閻浮提一。十二億那由他。有二懈慢界一。國土快樂。作二倡伎樂一。衣被服飾。香花莊嚴。七寶轉開床。舉レ目東視。寶牀隨轉。北視西視南視。亦如レ是轉。前後發意衆生。欲レ生二阿彌陀佛國一者。皆染二着懈慢國土一。不レ能三前進生二阿彌陀佛國一。億千萬衆。時有二一人一。能生二阿彌陀佛國一。何以故。皆由三懈慢執心不二牢固一。

と、この文は懷感禪師の『群疑論』四に引用して、以て專雜二種の得失を明せるものにして、この文に次で、是知。雜修之者爲執心不牢之人。故生懈慢國也。正與二處胎經文一相當。若不雜修。專行此業。此卽執心牢固。定生極樂國。といへり、而して淨土眞宗の第六祖源信和尙は、『往生要集』下末十一に、『群疑論』の文を引き、これを隨宜轉用して專雜二修の執心の淺深を判じ、以て報化二土を辯

立せられたり、今茲に是等の義趣を述ぶるの暇あらず、唯一言その文を指示するのみ、『和讃』に曰く、

本師源信和尙ハ　懷感禪師ノ釋ニヨリ
處胎經ヲヒラキテゾ　懈慢界ヲバアラハセル

全身舍利品第九　諸佛の全身舍利、及び碎身舍利、この大地の下方に住在せること、並に下方佛刹の事を說きたまふ。

常無常品第十　觀見無常菩薩の問に答へて、常無常の義を分別解了せしめたまひき。

隨喜品第十一　頂王菩薩、東方安住世界より來り、如來神力の所化に就て問ふ所あり、且つ偈を說て佛を讃し奉る、其中に曰はく、

佛本所行道　如レ空無二所著一　今處二神母胎一　受化非二一類一　得二佛眞如性一　亦如二實相一住

五道尋識品第十二　胎中に於て無量の鉤鎖骸骨を現じ、彌勒をして之を敲きて以て識の所趣を分別せしむ、佛舍利に至ては其識を尋究すること能はざりき、時に彌勒、佛に白さく、佛は不可思議にして限量すべからず、我等の能く籌量するところに非ずと。

諸佛行齊無差別品第十三　一切の菩薩を變じて盡く光明具足せる佛身と作し、同音に說法して無量の衆を度せしめ、次に無盡意菩薩の問に答へて往古に於て諸天發心し捨身受身せずして、佛道を

成することを說きたまひき。

行定不定品第十四　常笑菩薩、行業果報の差別、並に成佛の遲速に就て問へるに對し、菩薩摩訶薩の最第一義を說き、且つ菩薩所現の諸三昧力を示し、大衆をして在家の俗業を願樂せざらしめたまひき。

入六道衆生品第十五　自在菩薩の問に答へて、六趣衆生の行業果報を說きたまふ。

轉法輪品第十六　上方空界佛刹並に東南方佛刹より來至せる諸菩薩に對し、有盡無盡の法を說きたまふ。

五神通品第十七　妙勝菩薩の問に答へて、俗の五通と六通慧とを分別說示したまふ、俗の五通とは、神通を修習せるに非ずして、生得の通力をいひ、六通慧とは、聖道を修習して得るところのものをいふ、頌に曰はく。

凡夫所得通　猶如諸飛鳥　有近亦有遠　不離生死道　佛通無礙法　眞實無垢穢　念則到十方　往反不疲倦　以慈念衆生　得通無罣礙

識住處品第十八　普光菩薩の問に答へて識と身と先後あるに非ざることを示して曰はく、

識不離身。身不離識。猶如二牛共一軛。

善權品第十九　擧手菩薩の問に答へて、菩薩の善權適化、測量すべからざるを說て曰はく、

衆生心識。所念不同。若干思想。能令一切至解脫門。

無明品第二十　智淸淨菩薩の問に答へて、黑業は黑報を受け、白業は白報を受くることを分別解說せんとて偈を說き、次に一生補處の菩薩、方便を以て卑賤の家に生れ、父母を化度せしことを說きたまふ。

苦行品第二十一　來會の諸菩薩に對して過去經生の間に於る苦行を說き、次に菩提樹下に於る六年の學道思惟遂に能く魔怨を降伏して涅槃に到達せしことを說きたまへり。

四道和合品第二十二　遍光菩薩の問に答へて不二入を明したまふ、不二入とは不一不二これなり有餘無餘結使永盡これなり、解了無常內外盡空これなり、佛恩無邊得至無爲これなり、大慈覆蓋得至眞實これなりと。

意品第二十三　根蓮華菩薩、世尊に問て曰はく、四道所趣の意何の所にか在る、意ありとせんや意なしとせんや、意はこれ果なりや、果に非ずとせんや、意はこれ有對なりや、無對なりや、可見なりや、不可見なりや、過去未來現在なりや、過去未來現在に非ざるや、これ仙人の法なりや、仙人の法に非ざるや、これ有爲法なりや、無爲法なりや、これ有漏法なりや、無漏法なりや等と、世尊答へて曰はく、意本と善惡なし、行の所造に隨ふ、四大人身を成ず、意を求るに意根なし、識心の法を分別して實を求るに所有なし、意は形貌なく又た不可言なりと。

定意品第二十四　持空菩薩の問に答へて、眞實四不思議を明したまふ。

光影品第二十五　佛、光影を現じ、諸會者をして皆同金色ならしむ、時に賢光菩薩問て曰はく、この光明の所化は佛化の如くなりや否や、佛力功德一に非ず二に非ず、光明の所接窮盡すべからずこの二德行何の差別ありやと、世尊告げたまはく、汝の問ふ所は皆是れ如來の神力なり、如來の神光、衆生を濟度するに罣礙する所なし、光明遠照、六度を演暢して極まりなし、無數阿僧祇の衆生を濟度するは、皆是れ佛光の蔭凉覆蓋なりと。

破邪見品第二十六　釋尊、過去に於て光明佛の出世に値ひ、授記せられたることを說きたまふ。

文殊身變化品第二十七　文殊菩薩、往昔、花光世界に於て在胎說法せることを說きたまふ。

八賢聖齋品第二十八　智積菩薩の問に答へて、釋尊過去の本生を說きたまふ、吾れ無央數劫の昔金翅鳥王たりし時、化生の龍子より八齋戒を聞くことを得て心意開解せりと。

五樂品第二十九　往古に於て、天帝釋、佛の功德を憶念して阿修羅を降伏せることを說きたまふ。

緊陀羅品第三十　信解脫菩薩の過去の本事を說きたまひき。

香音神品第三十一　釋尊過去の本生を說て曰く、吾れ往昔人身を受け、香音神王たりし時、地神の偈を說くを聞て心意開解せりと。

地神品第三十二　地水火風空識の六大中、何れを以て最勝最妙となすやとの善業菩薩の問に答へて、識を王と爲すことを知らしめたまふ。

人品第三十三　法印菩薩の問に答へて、人種の法を明して曰はく、諸法性空寂無所有を解知して彼此を見ざる者、一二を見ざる者、淨と不淨とを見ざる者、定と不定とを見ざる者、正と不正とを見ざる者、是等を人種といふと。

行品第三十四　造行菩薩、行業果報不可思議なることを問へるに對して、佛世尊と雖も行業果報を避くること能はざるを示し、且つ如來亦た九惱を免れざることを說きたまひき。

法住品第三十五　時に世尊、大光明を放て無量阿僧祇の刹土を照し、還た光明を攝して彌勒菩薩に告げたまはく、吾れ無量劫來、身口意淸淨にして瑕穢なきを以て、この實相光明の報を得たるなりと、復た告げたまはく、吾れ今汝に胎化經典を囑累す、汝當に宣傳廣布すべし、若し善男子善女人ありて此經を諷誦すれば其功德甚多し、又た彈指の頃なりとも此經を念すれば其功德稱量すべからず、如何となればこの胎化經典は諸佛の父母なり、衆經中の長なればなり、汝當に佛恩を念報せんと欲せば常に一心に此經典を奉持供養すべし、これはこれ諸法の寶藏なり、諸佛の封印なり、唯佛世尊ありて能くこの印封を開きて衆生に示現したまへりと、かくの如く說きたまひし時、普地六反震動す。

復本形品第三十六　既にして世尊、胎化經典を說き終り、威神を攝して還た金棺の裏に在ます、

寂然として聲なし、時に大迦葉、五百の弟子を將て來至し、悲啼號泣自から勝ゆる能はず、次で牛頭栴檀香を以て耶維し奉る。

起塔品第三十七　舍利を三分して諸天と龍王と八大國王とに與へ、各本國に還りて起塔供養す。

出經品第三十八　大迦葉、優波離、阿難を首めとして五百の羅漢、幷に他方の羅漢八億四千衆を集めて法藏を結す、卽ち胎化藏第一、中陰藏第二、摩訶衍方等藏第三、戒律藏第四、十住菩薩藏第五、雜藏第六、金剛藏第七、佛藏第八これなりと。

最後に『七祖聖敎』中、この經を引用せられたる箇所を指的し置くべし、

『往生禮讃』上十二丁　『往生要集』中末七丁　同下本二十一丁　同下末十一丁

第四　集一切福德三昧經　Sarvapuṇyasamuccaya-samādhi-sūtra

一　譯者及異譯

この經に二譯あり、一は姚秦の代、鳩摩羅什 Kumārajīva の譯するところにして、標記の集一切福德三昧經これなり、他は西晉の代、竺法護 Dharmaraksha の譯するところにして、等集福德三昧經と題せり、共に三卷より成る。

二　題號略解

集一切福德三昧とは、讀で字の如く一切の福德を集むる三昧といふ意にして、菩薩、無上正眞道心を起せば一切の福德を攝取するが故に、菩薩の初發心をば斯く名くるなり、これを此經の文に徵するに、世尊、那羅延菩薩の問に答へて告げたまはく「菩薩、無上正眞道心を發して、而かも、この集一切福德三昧を修せざるものあることなし、何を以ての故に、一切の福德、初發心中に入らざるものあることなければなり、猶、江河一切諸流の大海中に入らざるものあることなきが如し、若善男子善女人、一切諸福德を集めんと欲せば、當に無上正眞道心を發すべし」と。

三　一經の大意

この經一部、全く集一切福德三昧の功德廣大なることを說示したまへり、更に一部の說相に就てその大要を摘記せんに、佛、毗舍離菴羅樹園、大法講堂に在り、諸菩薩幷に阿羅漢等に圍繞せられて說法したまふ、時に千世界主、那羅延、淨威力士、及び阿難等こもゝ代て問を起す、佛、一々これに對して正法の護持、集一切福德三昧、菩薩の神力、初發心中の功德、布施、持戒、多聞の三

法莊嚴、幷に種々の四法能く無生忍を證すること等を說きたまひき、左に項を分て說述すべし。

那羅延菩薩の發問　時に千世界主那羅延、佛に白す、如來久しからずして畢竟涅槃したまふべし、如來の法は最上なり、願はくば如來、諸の菩薩を護りて威德を增益せしめ、佛種を斷せざらしめたまはんことを、世尊曰はく、善哉々々、菩薩摩訶薩に三昧あり、集一切福德と名く、菩薩能くこの三昧を成就すれば、功德を失はず、智慧を失はざるべしと。

淨威力士を降伏す　既にして淨威力士あり、自己の大力を恃みつゝ世尊の所に來る、世尊その心中を知り、曾て菩薩たりし時の大力（悉達太子たりし時の體力）を示してこれを降伏せしめたまひき

三法莊嚴　佛、淨威力士に告げたまはく、三法ありて能く福德を莊嚴す、三法とは、一に布施莊嚴、二に持戒莊嚴、三に多聞莊嚴これなり、如何にして布施を修行すべきか、布施する時に於ては施心と所施と及び受者とを見ることなく、乞者來て求むる所あらば、慈悲攝護の心に住し、何物をも施與して憂悔することなかるべし、如何にして淨戒を奉持すべきか、身口意の三業を淸淨にし、自から十善を成し、又た他を敎へて十善を成さしめ、得失、毀譽、及び苦樂に於て心傾動することなく、餘乘に向はず、餘天を禮せず、諸見を捨離して心に歡喜を生ず、かくの如くにして、人天の快樂の爲めに、又は利養活命の爲めに禁戒を護持するに非ず、三寶の爲めに、出離解脫の爲めに、利益衆生の爲めに禁戒を護持するをば持戒淸淨と名く、持戒は則ち能く一切佛法を發起す、持戒あ

れば則ち三昧あり、智慧あり、解脫あり、解脫知見あればなり、如何にして多聞を修習すべきか、和上阿闍梨の所に於て供養尊重し、正法の中に於て藥想を起し、自身の所に於て病人の想を起し、說法者に於て明醫の想を起すべし、若しかくの如くにして多聞を成就すれば陰魔、煩惱魔、死魔、天魔を除くべしと。

得忍の四法　三法莊嚴の說法終りて、三千の衆生便ち無上正眞道心を發し、五千の天子、法眼淨を得、淨威力士亦た無生法忍を得たり、時に淨威力士、世尊に白す、菩薩摩訶薩、幾法を成就すれば能く無生忍を得んやと、佛言はく、菩薩、四法を成就すれば能く無生忍を得べし、四法とは、身は鏡像の如く、言說は響聲の如く、心は幻の如く、諸法は無二なりと解知することこれなりと、次で得忍の四法に、猶、種々あることを列擧したまひき。

諸種の菩薩行　得忍諸種の四法を說き終りて、淨威力士に成佛の記を授け且つ出家を聽許したる後、那羅延の問に答へて淨威力士の前生を示し、又た淨威力士と那羅延との間に數番の問答あり、次で佛幷に文殊師利、離魔、那羅延、常精進の諸菩薩等、おの〳〵菩薩所行の法門に就て問答說法する所ありき。

最後に高祖の御引文に就ての箇所を揭示すべし、『本典』化卷末二十三左に御引用あり、披て見るべし。

第五　蓮華面經

一　譯者及題號略解

隋代に、那連提黎耶舎 Narendrayas の譯するところにして上下二卷より成る、佛、入涅槃に臨み、この經を說きたまへる中、阿難に對して懸記したまはく、「滅後、罽賓國に蓮華面 Padmamukha or Pundarikamukha と名くる富蘭那外道の弟子あらん、聰明にして善く天文を解し、形貌金色にして且つ端正なり、この大凝人曾て前生に四阿難漢を供養せし時、誓願して曰く、願はくば未來に佛法を破壞せんと、かくて羅漢を供養せる因により世々端正の身を受け、最後身に國王の家に生れて其名を寐吱曷羅俱邏といひ、遂に我法を滅し、且つ佛鉢を破碎して阿鼻大地獄中に生ずべし」と、これ蓮華面經と名けらるゝ所以なりとす。

二　一經の大意

佛、臨滅の時、阿難に對して、まづ至心に如來身を觀ずべしと告げ、次で如來身の難見殊妙なること、滅後に於る碎身舍利の住處、惡比丘の破法、菩提樹下に於る諸天の哀歎、蓮華面破鉢の事、幷に破鉢展轉傳來して所在に佛事を作すこと等を說きたまへる經にして、要するに滅後に於る破法

の懸記を主とす、左に項を分て說述するところあるべし。

敎起因緣　佛、毗舍離獼猴池岸上大重閣中に在り、阿難と共に波波城に赴かんとて出で立ちたまひしに、途上、疲極の爲め、跋提河に入て浴す、時に阿難に告げたまはく、「汝、至心に如來身を觀ずべし、如來の身は優曇華の如く久遠にして乃ち現はる、かくの如きの佛身は三月の後當に涅槃に入るべし」と、次で種々に佛身の殊妙なることを譬說したまひき。

碎身舍利の所在　次に又た阿難に告げたまはく、「如來入涅槃の時、金剛三昧に入てこの肉身を碎くこと芥子の如くし、一分は諸天、一分は龍宮、一分は夜叉世界、その餘分は閻浮提に在らん、當來に王あり、阿輸迦と名く、この舍利を供養せんが爲に八萬四千の塔を作るべし」と。

末世破法の比丘　既にして佛念じたまふらく、當に諸天に佛法を付囑すべしとて、まづ天上に至り、次で龍宮、夜叉の世界に至り、また閻浮提に還る、時に阿難、久しからずして佛の入滅したまふを知り、大苦惱を生ず、雨涙慟哭、地に宛轉して曰く、「世尊の涅槃何ぞそれ速かなる、世間眼滅す、日月地に墮つ、解脫の門は今や閉塞し、三惡道の門は將に開かれんとす、」と、こゝに於てか、佛、有爲無常の理を說て之を慰諭し、更に未來世に於る惡比丘の事を說て厭怖の念を生せしめ、以て阿難の心胸深く入れる憂愁の刺を拔かんとて、次の如く說きたまひき。

佛告二阿難一。諦聽至心。我今當レ說。阿難。未來之時。有二諸破戒比丘一。身著二袈裟一。遊二行城邑一。

往二來聚落一。住二親里家一。彼非二比丘一。又非二白衣一。畜二養婦妾一。產二育男女一。復有二比丘一。住二婬女家一。復有二比丘一。婬二比丘尼一。復有二比丘一。貯二蓄金銀一。造二作生業一。以自活命。復有二比丘一。通致使驛一。以自活命。復有二比丘一。專行二醫藥一。以自活命。復有二比丘一。爲二他卜筮一。以自活命。復有二比丘一。爲二他呪彼死屍令一レ起。遣殺二怨家一。以自活命。復有二比丘一。爲二他誦呪一。驅二遣鬼神一。多取二財物一。以自活命。復有二比丘一。專行二殺生一。以自活命。復有二比丘一。住二僧伽藍一。私自費二用佛法僧物一。以自活命。復有二比丘一。內實犯レ戒。外示二護持一。受二人信施一。（中略）

如是無量地獄因緣。捨身之後。皆墮二地獄一。阿難。譬如下師子。命絕身死。若空若地。若水若陸。所有衆生。不二敢食一。彼師子身肉一。唯師子身。自生二諸蟲一。還自噉食。師子之肉。阿難。我之佛法。非二餘能壞一。是我法中。諸惡比丘。猶如二毒刺一。破二我三阿僧祇劫。積行勤苦。所レ集佛法一。

右の文の意を『正像末和讃』に、親鸞聖人述べたまはく、

造惡コノムワカ弟子ノ　邪見放逸サカリニテ
末世ニワカ法破スベシト　蓮華面經ニノヘタマフ

諸人の哀歎　世尊、阿難を慰諭し、其憂刺を除き、法を付囑し終りて、更に告げたまはく、今より、汝と共に諸國に往かんと、乃ち波波城に至り、次で摩伽陀國菩提樹下に至り結跏趺坐したまふ毘沙門、帝釋、梵天等の諸天、おの〳〵百萬億の天衆と共に佛所に詣し、最後の禮拜を爲したる後

悲泣雨涙、こも〳〵代て哀歎の偈を說けり。

蓮華面の懸記　次で阿難に告げたまはく、我れ昔、阿波羅龍王の處に於て罽賓國の事を記して曰く、我涅槃の後、其國熾盛安穩豐樂ならん、而して多くの羅漢その國に集まり、如來の十二部經を結集し、廣く諸論を造て流布すべし、又た金毘羅等の五天子ありて其國に生れ、廣く我法を宣布せん、然るに彼五天子滅度の後、富蘭那外道の弟子に蓮華面と名くる者ありて（中略）佛鉢を破碎し、阿鼻大地獄中に墮すべし、この大癡人命終の後、七天子ありて次第に罽賓國に生れ、復た更に如來の正法を建立せんと。

破鉢佛事を作す　蓮華面、佛鉢を破りし後、閻浮提の佛法漸く衰へ、比丘如法ならず、國土人民惡業を增長す、而して破鉢遂に閻浮提より娑伽羅龍宮及び諸天の間に傳來し、隨所に禮拜供養せられ、最後に彌勒佛の所に至ると。

佛、かくの如く阿難に未來の事を說き終りし後、次第にもろ〳〵の國土城邑に入りて衆生を度し遂に娑羅雙樹間に入滅したまひき。

第六　無量義經　Anitartha-sūtra

既に涅槃部に屬する五部の經に就て記述し終りたれば、以下、法華部に屬する左の三部を選び、逐次これが解說を試みんとす。

無量義經
妙法蓮華經
大法鼓經

一　無量義經の譯者及題號

蕭齊の朝に、中印度より來れる曇摩伽陀耶舍 Dharma gātayasas の譯出するところにして、一部一卷三品より成る、卽ち德行品、說法品、十功德品これなり、この經は、釋尊靈鷲山に於て『法華經』を說きたまはんとするに臨みて、先づ此經を說かれたるに依り、古來この經を以て『法華經』の序分と見做せり、無量義とは實相無相の一法より種々無量の法門を生じ來ることを說くの意にして、佛陀が無量の法門を說くは全く敎を受くる衆生の機根種々無量なればなり、而して無量の法義を生じ來る根源の無相實相なるものゝ何たるかは、此經に於て說破せざるところにして、實に一法の眞義

を開說せるは『法華經』なりとす、要するに此經の大意は、佛陀成道已來四十餘年、種々に方便して說きたまへる無量の法門は、これを無相實相の一法に攝束すべきものなることを示すにあり、これ『法華經』の序分と見做さるゝ所以にして、彼の有名なる四十餘年未顯眞實の文は、此經の說法品に說かれたるものなりとす。

二　各品の大意

德行品第一　佛、王舍城耆闍崛山に在まして、大比丘衆萬二千人、菩薩摩訶薩八萬人、この他、帝釋、龍神、四衆等こと〴〵く雲集せり、時に大莊嚴菩薩、偈を說て佛を讚したてまつる。

說法品第二　大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩、同音に佛に白す「世尊、菩薩摩訶薩、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に何等の法門を修行すべきや」と、佛言はく「善男子、一法門あり能く菩薩をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ、是の一法門を名けて無量義と爲す、菩薩、無量義を修學することを得んと欲せば、應に一切諸法を觀察すべし」と、次で左の如く說きたまへり。

如是觀已、而入二衆生諸根性欲一。性欲無量故。說法無量。說法無量。義亦無量。無量義者。從二一法一生。其一法者。卽無相也。如是無相、無二相不レ相。無二相不レ相。名爲二實相一。

十功德品第三　大莊嚴菩薩、この經典の無量功德不可思議力に就て問へる所あるに對して、十不

思議功德力を說きたまひき。

第七　妙法蓮華經　Saddharma-pundarika-sūtra

一　諸譯對照

完全なる譯本とし現存するものに左の三譯あり。

經名	卷數	譯出年代	譯者
正法華經	十一卷又八卷	西晉太康元年西曆二八〇年	竺法護譯
妙法蓮華經	七卷又八卷	姚秦弘始八年西曆四〇六年	鳩摩羅什譯
添品妙法蓮華經	八卷又七卷	隋仁壽元年西曆六〇一年	闍那崛多等譯

此外、一品一偈の異時に譯出せられたるものあり、左の如し。

提婆品　一卷	蕭齊	達摩々提譯
普門品重頌偈	隋	闍那崛多譯
藥王菩薩咒	唐	玄奘譯
成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經　一卷	唐	不空譯

以上は現存するものなるが、缺本としては左の二種あり。

經名	卷數	譯出年代	譯者
法華三昧經	六卷	魏甘露元年西曆二五六年	支彊梁接譯
方等法華經	五卷	西晉咸康元年西曆三三五年	支道根譯

『法華文句』（會本卷二十三）によれば、此經の譯出は前後四回にして二存二缺なりといへり、卽ち二存とは『正法華經』（竺法護譯）と『妙法蓮華經』（羅什譯）との二譯にして、二缺とは次上の二譯なりこれ寶唱の『衆經目錄』によりたるものなれば、實に隋代以前に於る譯本なりとす、而して闍那崛多譯の『添品法華經』は此後に出でたるものにして、且つ又た次上二種缺本の內容に就ては、全く知る・を得ずと雖も、恐くは完本の譯出に非ざるべし。

最初に揭げたる現存三譯は、おの〳〵別種の原本に依れるものなること古來の定說なり、この中羅什譯は譯文の流暢美麗なるため專ら依用せらる、而して『添品妙法蓮華經』とは、羅什譯に缺けたる提婆達多品と普門品重頌とを添加せる故に添品の二字を冠せるなり、尤も現行の羅什譯には是等を加ふと雖も、元より後代の增補にかゝるものなること、古來學者の意見略一致する所なりとす、今左に三譯の品次及出沒不同を圖示すべし。

『正法華經』　『妙法蓮華經』　『添品妙法蓮華經』

第一卷　第一卷　第一卷

光瑞品第一——序品第一——序品第一

善權品第二——方便品第二——方便品第二

第二卷　第二卷

應時品第三——譬喩品第三——譬喩品第三

第三卷　第三卷

信樂品第四——信解品第四——信解品第四

第三卷

藥草品第五——藥草喩品第五——藥草喩品第五

授聲聞決品第六——授記品第六——授記品第六

第四卷

往古品第七——化城喩品第七——化城喩品第七

第五卷　第四卷

授五百弟子決品第八——五百弟子授記品第八——五百弟子授記品第八

授阿難羅云決品第九——授學無學人記品第九——授學無學入記品第九

第六卷

藥王如來品第十——法師品第十——法師品第十

七寶塔品第十一——見寶塔品第十一——見寶塔品第十一

第五卷

勸說品第十二——勸持品第十二——勸持品第十二

第七卷　第五卷

安行品第十三——安樂行品第十三——安樂行品第十三

菩薩從地涌出品第十四——從地涌出品第十四——從地涌出品第十四

如來現壽品第十五——如來壽量品第十五——如來壽量品第十五

第八卷　第六卷

御福事品第十六——分別功德品第十六——分別功德品第十六

第六卷

勸助品第十七——隨喜功德品第十七——隨喜功德品第十七

嘆法師品第十八——法師功德品第十八——法師功德品第十八

法師功德品第十九——常不輕菩薩品第十九——常不輕菩薩品第十九

第九卷　第七卷

常被輕慢品第十九——常不輕菩薩品第二十——如來神力品第二十——如來神力品第二十

如來神足品第二十——如來神力品第二十一——陀羅尼品第二十一

藥王菩薩品第二十一——囑累品第二十二——藥王菩薩本事品第二十二

妙吼菩薩品第二十二——藥王菩薩本事品第二十三——妙音菩薩品第二十三

第七卷

諸經論大意（清原秀惠）

第十卷

光世音普門品第二十三
總持品第二十四
淨復淨土品第二十五
樂普賢品第二十六
囑累品第二十七

第八卷

妙音菩薩品第二十四
觀世音菩薩普門品第廿五
陀羅尼品第二十六
妙莊嚴王本事品第二十七
普賢菩薩勸發品第二十八

觀世音菩薩普門品第廿四
妙莊嚴王本事品第二十五
普賢菩薩勸發品第二十六
囑累品第二十七

佛教講義錄

右の圖に依て見るに、『正法華經』と『添品法華經』とは略その品次を同くせり、但、『添品法華經』にては、神力品の次、藥王品の前に陀羅尼品を置けり、これ『添品法華經』が他の二譯と全く異れる點なりとす、而して又た見寶塔品と提婆品とを別品とせざること、及び囑累品を最後に置くことは、『正法華經』『添品法華經』の二譯相同じく、獨り羅什譯の異れるを見るのみ、卽ち羅什譯にては、見寶塔品の次に提婆品を置き、又た囑累品を神力品の次に置けり、これ羅什譯に於る提婆品は後人の挿入なりと認めらるる所以なりとす。

諸譯の對照に次で、現存せる梵本に就て一言し置くの要あり、現存せる梵本は約六本ありて露國の國立圖書館に保存せらるゝ一本の外、總て英人の所有に屬せりといふ、此中、ケンブリッチ大學に藏せらるゝものは、蘭のケルン氏によりて英譯せられ、南條博士は曾て之を和譯して『無盡燈』誌上に揭出せられしことあり、而してこの梵本は品數及び順序等、全く『添品法華經』と一致せりと雖

も、もとより文句に於ては多少の增減あるを見る。

二　支那日本に於ける講究概觀

●支那●『法華經』の譯出に關しては前節述ぶるところの如し、而してこれに對する講究は如何なる狀況なりしやといふに、彼の羅什三藏の譯出以後、この經に對する講究亦た蔚然として興起するに至りき、『二樂叢書』第三號の卷頭には、テットルトラ（庫車の南方九十清里の古洞）にて發掘し得たる羅什譯『法華經』の斷片を揭載せり、この寫本は西凉建初七年（東晉義熙七年西紀四一一年）の寫經なれば、羅什三藏の沒後僅に二年、羅什が長安に在てこの經を譯せる後僅に五年、以て如何に傳播書寫の盛んなりしかを推知するに足れり、而して彼の道場寺慧觀の五時の敎判中には、『法華經』を以て同歸敎とせり、蓋し『法華經』は衆機を調熟し來りて一佛乘に入らしめし佛陀化導の終極旨歸を顯せるものなりとは、六朝時代に於ける『法華經』研究者の一般に思量せるところなるべし、この慧觀の五時の敎判は、『涅槃經』を中心とせるものなること、先きに『涅槃經』に就て叙述せる際、一言し置けるが如し、然るにこの敎判は、後に天台大師起りて『法華經』を中心として組織せる五時の敎判に向て寄與するところ多かりしは注意すべき事實なりとす、然り而して天台大師以前に於る『法華經』研究者中、最も出色の觀あるは光宅寺の法雲法師その人なりとす、この師は梁朝三大法師の一人にして『法華經義記』八卷を

著はせり、其中に始て四車說を唱道せり、四車說とは『法華經』譬喩品の三界火宅の譬喩を解釋するに當り、羊鹿牛の三車中の牛車以外に一の大白牛車ありとする見解にして、これ華天等一乘家の齊しく採用するところなり、されば、天台宗興起以前にまづ涅槃學派の盛行するありて、この學派に屬する慧觀、法雲の兩明匠が、天台宗興起に對して先驅を爲せる觀あるは、爭ふべからざる事實なり。

『法華經』の研究史は卽ち天台宗の傳播史なり、こはいふまでもなく天台宗は『法華經』を以て正依の根本經典とすればなり、故に天台大師一たび出でゝ天台宗を興隆するや、『法華經』研究の上に一大證權を樹立せるのみならず、支那佛敎はこゝに一新紀元を劃してます〳〵其精華を發揮するに至りき。

天台智者大師（梁大同四年（西紀四三八）出生、隋開皇十七年（西紀五九七）示寂）は荊州に生る、陳天嘉元年二十二歲にして杭州大蘇山に入り慧思禪師に謁す、三十歲にして師の許を辭し、金陵の都城に出でゝ大に講筵を張り、八年の後卽ち陳大建七年、去て天台山に隱れ專ら修錬に勉むること十年、陳主屢々使を遣はして懇請す、依て已むなく再び金陵に到り講經寧日なきこと十有餘年、左の如く天台の三大部を講述し終りぬ。

三大部
- 法華文句　陳禎明元年、光宅寺に於て講說す、
- 法華玄義　隋開皇十三年、荊州玉泉寺に於て講說す、

——摩訶止觀　隋開皇十四年、荊州玉泉寺に於て講說す、

『法華玄義』は、大師自解佛乘の活眼を以て『法華經』の幽玄なる義意を開陳し、且つ五時八敎の盆判を說けるもの、『法華文句』は文句を逐ふて『法華經』を解釋せるもの、『摩訶止觀』は已心中所行の三諦三觀の解行を詳說せるものにして、實にこの三大部は大師立敎開宗の根本的講述なりとす。

章安尊者灌頂（陳天嘉二年（西紀五六一）出生、唐貞觀六年（西紀六三二）示寂）は、智者大師の高弟にして師の沒後盛んに其卓說を講布し、且つ三大部を始めとして先師の講說をば悉く筆錄して後世に傳へ、以て師の偉業を完成します〳〵台宗の光輝を發揚するを得たり、然るに章安大師の沒後、法相、華嚴、禪、律等の諸宗齊しく興隆の運に際會し、法華一乘の法燈漸く明かならず、宗運大に傾きしも遂に荊溪尊者の出づるありて、能く中興の大業を成し遂げき。

荊溪尊者湛然（唐景雲二年（西紀七一一）出生、唐建中二年（西紀七八一）示寂）は、夙に一宗の中興を以て自から任じ、專ら著述を業として三大部の注疏を撰し、且つ數部の述作を出だして大に智者大師の深意を發揮せり、卽ち『法華玄義』に『釋籤』を、『法華文句』に『記』を、『摩訶止觀』に『輔行』を著はしき、かくて宗運を回復するを得たりと雖も、惜哉、師の沒後數十年にして會昌廢佛の法難あり、各宗の經卷典籍悉く燒亡し所謂支那佛敎の暗黑時代に入れり。

四明尊者智禮（宋建隆元年（西紀九六〇）出生、宋天聖六年（西紀一〇二八）示寂）は宋朝に入て一時廢滅せる佛敎幸にして興隆するの機運

佛教講義錄

に際會し、慈雲尊者遵式と共に天台の教觀を精研し、四明山に在て專ら講究著述に耽り、能く山外一流の邪義を破斥しつくして以て智者荆溪の眞義を宣揚せり、著書數十部、その偉業蓋し荆溪の下に在らずといふべき歟。

以上、天台大師及び其以後に於る法華經の研究者、即ち支那天台宗の巨匠に就て其偉勳一班を記し終る、それ天台大師は所謂自解佛乘の開拓者として『法華經』の講究史上第一位を占むるの人、而してその深解卓見は前記の如き明匠の出づるありて、ます〳〵發揮せらるゝものありしと雖も、四明尊者以後また一人の卓說を吐くなく、頗る寂寞の觀あるを免れず、獨り明末に藕益大師智旭の出づるありて博識卓見を誇るに足るが如きものあるも、天台の法孫として到底四明以上に出でざるものとす。

さはれ、天台の系統以外、別に一家の見地に立ちて『法華經』を解釋せる碩學としては、三論宗の大成者たる嘉祥大師吉藏及び法相宗の慈恩大師窺基のあるあり、何れも『法華經』の研究史上、教林義樹を飾れる大家なるを記せざるべからず、而して嘉祥に『法華經義疏』十二卷幷に『法華玄論』十卷の著述あり、慈恩に『法華玄贊』十卷の述作あり。

猶、天台大師及各宗の祖師が、一代經中に於る『法華經』の地位を如何に判定せしか、即ち所謂教判なるものに就て一瞥を與ふるの要あり、されど煩を恐れて其說明を避くるを可とせんか、即ち左に

佛教講義錄

圖示すべし。

天台宗五時の教判

- 第一華嚴時（涅槃五味）（雪嚴三照）（信解譬喻）（佛陀化窓）（教理純雜）
  - 乳
  - 高山
  - 旁追
  - 擬宜
  - 兼
- 第二阿含時
  - 酪
  - 幽谷
  - 二誘
  - 誘引
  - 但
- 第三方等時
  - 生酥
  - ……（食時）
  - 體信
  - 彈呵
  - 對
- 第四般若時
  - 熟酥
  - 平地（禺中）
  - 領知
  - 陶汰
  - 帶
- 第五法華涅槃時
  - 醍醐
  - ……（正中）
  - 付業
  - 開會
  - 圓

三論宗三轉法輪の教判

- 根本法輪——華嚴經
- 枝末法輪——阿含已後齊二法華一
- 攝末歸本法輪——法華經

法相宗三時の教判

- 第一時（初）―有教―諸部の小乘經
- 第二時（昔）―空教―諸部の般若經
- 第三時（今）―中道教―華嚴、深密、金光明、法華、涅槃等の諸の深大乘經

華嚴宗五教の教判

- 小教―諸部の小乘經―二乘―小乘
- 始教
  - 空始教―諸部の般若經
  - 相始教―深密經等
- 終教―楞伽、勝鬘、涅槃等
- 頓教―維摩、楞伽等
- 漸
- 三乘
- 頓
- 大乘
- 圓教
  - 同教―法華經
  - 別教―華嚴經
- 一乘

●日本　すでに支那に於る講究弘傳の狀況を略述せり、次で我邦に於る傳通如何といふに、まづ和國の教主たる聖德太子を擧げざるべからず、太子に『法華經義疏』四卷の著述あり（維摩、勝鬘二經の義疏と共に三經疏と稱せられる）、これ日本佛教最初の著作なると共に『法華經』研究の嚆矢なりといふべし、而して太子が『勝鬘經』及『法華經』を講せられしは推古天皇十四年、卽ち隋煬帝大業二年、天台大師の入滅を去ること僅に九年なれば、この研究が天台宗の說と沒交涉なること明かにして、從て太子は光宅寺法雲法師の說に依られしものなり、法雲は涅槃學派の明匠、太子の師なりし高麗の慧慈亦た涅槃宗の學匠なりければ太子の講說亦た涅槃宗の學說を繼げるものなること明かなり、卽ち『法華經義疏』の中には道場寺慧觀の五時の教判を依用せられたり。

孝謙天皇の天平勝寶六年、鑒眞和尙來朝す、此時和尙に隨從せる門人皆天台宗の學匠なりければ天台宗の典籍は茲に始めて我邦に傳はるを得たり、されど此時未だ荊溪の著述出でざる以前なれば齎し來れる章疏は天台大師の著述のみなりき、此後平安朝の初期に傳教大師最澄出でゝ日本天台を興隆せしより山家の法燈ます〳〵高く揭げられしと雖も、法華經に對する研究としては槪して天台荊溪を祖述するに過ぎざるものとす。

最後に記すべきは日蓮上人の法華宗なり、佛教各宗中、『法華經』を以て立教開宗の根本經典とするものに天台宗と日蓮宗あり、日蓮上人は傳教大師の後に出でゝ妙法蓮華經宗（略して法華宗といふ）を開き法華經を以て諸經中第一の經とし、盛んに其功德を稱揚せり、然るに『法華經』を見るの眼光に於て大に天台に異なるものあり、卽ら天台宗にては『法華經』の迹門を面とし、迹門より本門を解釋しゆく順序を取るも、日蓮上人は之に反して本門を面とし、本門より迹門を解釋し去るの順

序を取れり、これを以て天台は迹面本裏、日蓮は本面迹裏なりと稱す、されば其相承を立つるにも外用相承と內證相承との別あり、外用相承とは三國四師の相承、卽ち釋尊（印度）天台（支那）傳敎、日蓮（日本）と相承するをいひ、內證相承とは釋尊より直傳するをいふ、卽ち釋尊より上行菩薩、上行菩薩より日蓮上人と相承するところにして、天台傳敎同じく『法華經』を宗とすれど、これ等は迹門の理圓を主として一念三千の觀を修し、以て中道實相の眞理を證悟せんと期するにあるも、日蓮上人の唱道するところは之に異なり、本門の事圓を主として直に凡身に一念三千の妙行を現じ、娑婆卽寂光、卽身成佛の妙相を體現せんと勉むるにあり、これ天台傳敎の未だ說かざるところにして實に日蓮が『法華經』によりて得たる本化上行の自覺に基くものなりと。

佛敎講義錄

三　題號幷に一部の大意

Saddharmapuṇḍarīka-sūtra　薩曇芬陀利經、譯して妙法蓮華經といふ、梵語の薩 Sat には正、妙等の義ある故に譯者の意見によりて、竺法護は薩曇摩芬陀利を『正法華』と譯し、羅什は『妙法蓮華』と譯せり、これ妙法を芬陀利華卽ち蓮華に譬へたるものにして、法譬合して經名とせるなり、今少しく此意を敷衍せば、妙とは褒美の詞なり、法とは十界十如權實本迹の法なり、これを三千の妙法ともいひ、又た攝束して心、佛、衆生の三法なりといふ、而してこの三法同一體卽融不可思議なれば

歎美して妙法とはいふなり、蓮華とは華菓同時の德を有するにより、取て以て權實一體、本迹不二開廢同時なることを喩顯するにあり、これに就て迹門の三喩、本門の三喩とて、本迹二重合して六種の意味あり、圖示すること左の如し。

- 迹門三喩
  - 一爲蓮故華—爲實施權
  - 二華開蓮現—開權顯實
  - 三華落蓮成—廢權立實
- 本迹三喩
  - 四爲蓮故華—從本垂迹
  - 五華開蓮現—開迹顯本
  - 六華落蓮成—廢迹立本

經題の意味を略解すること右の如し、而して權實一體、本迹不二の深旨に就ては以下聊かこれが說明を試みんとす。

『法華經』一部二十八品、これを一言にして掩へば佛陀化導の終極旨歸を顯はさんが爲めの說法に外ならず、故に古來の學者この經に名くるに回歸敎の目を以てし、又は攝末歸本の目を以てす、卽ち衆多の機類を次第に陶冶調熟し來りて佛知見に開示悟入せしむるにあり、佛知見とは諸法實相の眞理を悟了せる佛陀無上の智慧にして、この智見を開かしむべく種々に方便して佛は誘引攝化の法

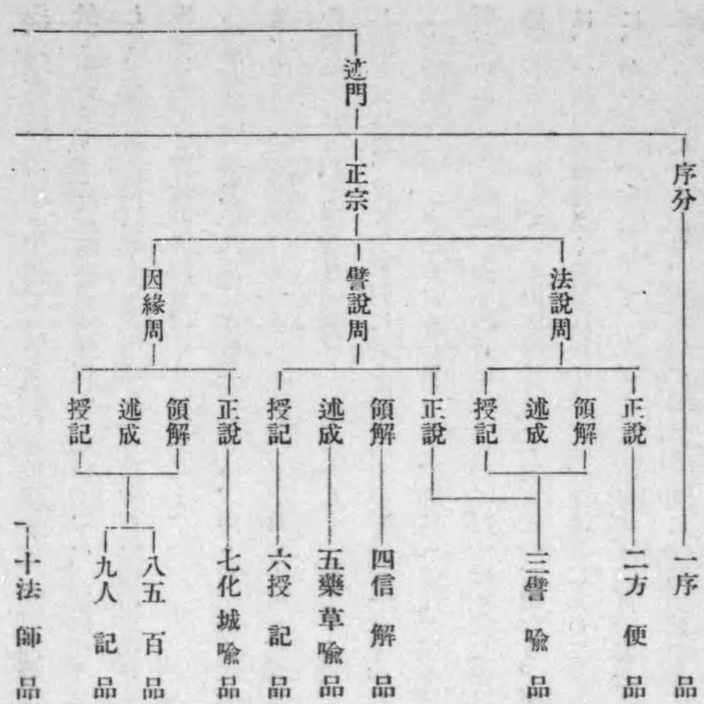
門を說きたまひき、顧れば、『法華經』を說くに至るまで成道已來四十年間、橫說縱說種々に法輪を轉じたまひしと雖も、是等は未顯眞實の分齊にして、一佛乘を分別して二乘三乘とし、以て暫く機情に逗ずるの手段を講じたまひしに外ならず、然るに今この法華經を說くに當りては妙法を開演して均しく一佛乘の法門卽ち佛知見に開示悟入せしむ、これを開權顯實といふ、權とは權假にして暫用還廢の意、暫時間に合せの假法なり、實とは眞實にして究竟旨歸の意、始終を通じて一貫する實法をいふ、卽ち一乘の外に二乘三乘あるに非ざることを示したまへるを開權顯實とはいふなり、開とは除くこと、權法を直ちに實法なりと說破し終るところに、權法の體として別に存在するものなきをいふ、故に又はこれを廢權立實とも會三歸一ともいふ、開權顯實は敎法の體に約し、廢權立實は化導の用に約す、權法卽實法と開顯する時、施權の化用として論ずべきものなきを廢權立實といふ、『法華經』方便品に十方佛土中唯有一乘法無二亦無三と說き、或は於一佛乘分別說三と說くが如きは此意なり、會三歸一とは所修の行に約する名目にして、方便品に汝等所行是菩薩道と說くが如し、二乘の行を會してそのまゝ一佛乘に歸せしむることなり、法華以前に於る爲實施權卽ち二乘三乘分別の說を聞て小果を得たる聲聞の人々は、到底佛果に進入し得ざるものなりと自覺し來りし情執を打破して、直ちに一佛乘に入らしめしをいふ、而してこの二乘の人の開會に就ては、根の利鈍に依て遲速の別あり、舍利弗等の如き上根の人は法說に於て開悟し、四大聲聞（迦葉、迦旃延、目

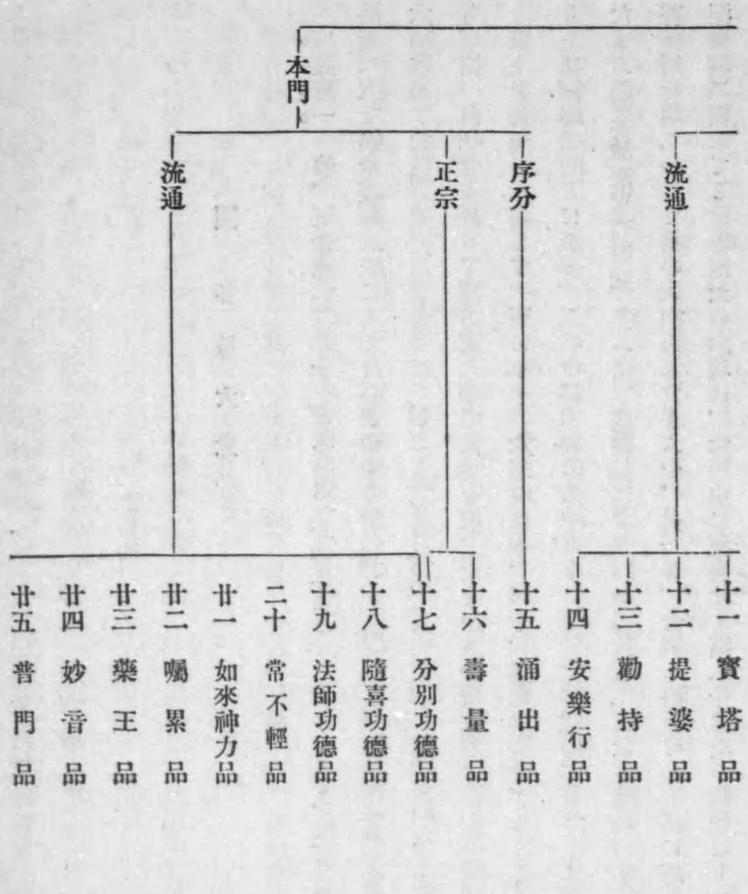
連、須菩提）の如き中根の人は譬說に於て開悟し、憍陳如等千二百聲聞の如き下根の人は因緣說に於て開悟せり、これを法譬因緣の三周說法といふ、法說周とは直ちに諸法實相の理を說ける一段にして、譬喩周とは三界火宅等の譬に寄せて實相の法門を說けるの一段なり。因緣說周とは大通智勝佛の因緣に寄せて實相の法門を說けるの一段、

『法華經』一部二十八品、本迹二門に分る、卽ち前十四品に於る迹門の說法は諸法實相の理を說き後十四品に於る本門の說法は久遠實成の事を說くと雖も、共に實相の一理を開顯して二乘三乘分別の情執を破り以て佛智見に契はしむるの外なし、而して上來、迹門の開權顯實に就て其要旨を略述し終りたれば、以下、本門に於る開迹顯本の要旨を一言すべし。

本迹は元と喩より出でたる名目にして、迹は人の往來する足跡をいひ、本は往來の所依たる本住所をいふ、卽ち釋尊、迦耶城菩提樹下に於て四十餘年前に成道したまへるは、全く化跡を垂るゝに過ぎざるものにして、その本地は實に久遠實成の古佛なり、而して『法華經』迹門の說法の終るまでは、一切の人々皆悉く釋尊は四十餘年前、迦耶城に始めて成道したまへる新佛なりと思ひ居たりしに、今や本門の說法に入て、我實成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫、卽ち塵點久遠の昔に既に成佛せる古佛なりと說て、其本地を顯はすと共に伽耶始成の佛と思ひ居たる情謂を拂ひたまへるを開迹顯本といひ、又は廢迹立本、會迹歸本ともいふなり、これ等名目の差別は前の開權顯實等に準じ

て知るべし、左に二十八品の科段を圖示せん。





四　各品大意

序品第一　佛、王舍城(Rājagṛha)耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)にましまして、先きに無量義經を說き(說法瑞)、次で無量義處三昧に入て身心動せず(入定瑞)、この時、天、曼陀羅華を雨らし(雨華瑞)、普地六種震動す(地動瑞)、一切大衆ことごとく未曾有歡喜の念を起して佛を觀たてまつる(心喜瑞)、佛乃ち眉間の白毫光を放ちて東方萬八千の世界を照したまひき(放光瑞)。

以上を此土の六瑞とす、更に他土の六瑞現はる、曰く、佛光周徧せざるところなく、下は地獄より上は阿迦尼吒天に至る、この中に六趣の衆生あり(見六趣瑞)、諸佛ましまして(見諸佛瑞)、說法したまふ(聞佛說法瑞)、四衆よつて以て修行得果し(四衆得道瑞)、又た菩薩おのおのその道を行ず(見菩薩所行瑞)、かくて佛の入涅槃したまふや、弟子等、舍利を供養せんが爲に塔を建つるあり(見佛涅槃瑞)、而してこれ等他土の六瑞は、光明中に現出せる萬八千佛土の相狀なりとす。

廿六　陀羅尼品
廿七　妙莊嚴品
廿八　勸發品

時に彌勒(Maitreya)菩薩、この一大奇瑞に就て文殊(Manjuśrī)菩薩に疑を質す、文殊菩薩卽ち過去無量劫に於ける日月燈明佛の因緣を說てこれに答ふ。

方便品第二　法華經二十八品中、方便品、安樂行品(迹門、第二と第十四)、壽量品、普門品(本門第十六と第二十五)を古來四要品と稱す、先きの序品に於ける奇瑞は、實に法華經が佛出世の本懷たることを表現するに足るものにして、次で方便品に於て佛は正しくその一大事因緣を宣へたまへり。今や佛は三昧より起ち、舍利弗(Śāriputra)に告げたまはく、「諸佛の智慧は甚深無量なり、解し難く入り難し、一切の聲聞辟支佛の知る能はざるところ、止みなん、舍利弗、復た說くべからず、所以はいかん、佛の成就したまふ所は第一希有難解の法なり、唯佛と佛と乃ち能く諸法の實相を窮盡したまへり」と、次に彼の有名なる十如是を說て諸法實相の理を示したまひき、その文に曰く、

唯佛與佛、乃能窮盡諸法實相、所謂諸法如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。

と。是に於てか、舍利弗三たびその希有難解の法を說きたまはんことを請ふて已まず、佛遂に舍利弗に告げたまはく、

汝已慇懃三請、豈得不說、汝今諦聽、善思念之、(中略)諸佛世尊、唯以一大事因緣故、出現於世、諸佛世尊、欲令衆生、開佛知見、使得淸淨故、出現於世、欲示衆生、佛之知

見」故、出二現於世一、欲レ令二衆生一、悟二佛知見一故、出二現於世一、欲レ令二衆生一、入二佛知見道一故、出二現於世一、舍利弗、是爲二諸佛以二一大事因緣一、故出二現於世一、（中略）舍利弗、如來但以二一佛乘一故、爲二衆生一說レ法、無有二餘乘一、若二若三一、舍利弗、一切十方諸佛法亦如レ是。

と、これ出世を本懷を最も明了に說破せるものにして、一大事因緣とは、諸法實相の眞實智を衆生に體得せしむるをいふ、卽ち佛知見に開示悟入せしむるにあり。

『法華經』には、各品しば〳〵重頌を說く、而してこの品の重頌の中、有名なる左の諸文あり、

十方佛土中、唯有二一乘法一、無レ二亦無レ三。

若人散亂心、入二於塔廟中一、一稱二南無佛一、皆已成二佛道一。

是法住二法位一、世間相常住。

正直捨二方便一、但說二無上道一、菩薩聞二是法一、疑網皆已除、千二百羅漢、悉亦當二作佛一。

譬喩品第三　方便品の說法を聞て、智慧第一の舍利弗は、始めて佛の本意を領悟して一乘の法に開會せられき、舍利弗、踊躍歡喜禁ずる能はずして自己の領解を述ぶ、佛印可して「汝、當來無量不可思議劫に於て、當に作佛して華光如來と號すべし」とて、成佛の記を授け、更に舍利弗の請によりて、四衆の疑惑を除かんために、三界火宅の譬喩を說きたまひき。

重頌中に左の文あり、

一切衆生、皆是我子、深著二世樂一、無レ有二慧心一、三界無レ安、猶如二火宅一、衆苦充滿、甚可二怖畏一、常有二生老、病死憂患一、如是等火、熾然不レ息（中略）、唯我一人、能爲二救護一。

信解品第四　譬喩品の說法によりて、惠命須菩提(Subūti)、摩訶迦旃延(Mahā-Kātyāyāna)、摩訶迦葉(Mahā-Kāśyāpa)、摩訶目揵連(Mahā-Maudgalyāyana)の四大聲聞は、佛の本意を信解して喜悅の情抑ゆる能はず、一心に合掌して佛に白さく、

我等、居二僧之首一、年並朽邁、自謂二已得二涅槃一、無レ所二堪任一、不二復進求一阿耨多羅三藐三菩提一。（中略）我等、今於二佛前一、聞レ授二聲聞阿耨多羅三藐三菩提記一、心甚歡喜、得二未曾有一、不レ謂於レ今忽然得レ聞二希有之法一、深自慶幸獲二大善利一、無量珍寶不レ求自得。

と。次で窮子の喩を說て、その領解を述成せり。

藥草喩品第五　迦葉等四大聲聞の告白を聞て、佛は「善哉善哉、迦葉、善說如來眞實功德、誠如所言」とのたまひて之を印可し、更に藥草の喩を說て、如來の說法は一相一味の一乘法なりと雖も衆生機根の不同なるが爲め、二乘三乘の區別を見るに至ることを示したまひき。

授記品第六　迦葉等の四大聲聞に對して當來作佛の記を授けて曰く、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦旃延は閻浮那提金光如來、大目犍連は多摩羅跋栴檀香如來と名けらるべしと。

化城喩品第七　先きに一經の大意を叙せし中、三周說法に就て一言し置けり、卽ち方便品は法說

周にして上根に對し、譬喩品以下の四品は譬說周にして中根に對し、化城品以下の三品は因緣說周にして下根に對するの說法なるが、この品に來りて釋尊と諸弟子との師弟の關係は、今生に始まれるものにあらず、その由來するところ極めて久しきものなりとて、大通智勝佛の因緣を說かれたり曰く、三千塵點劫の昔に大通智勝佛あり、この佛の未だ出家したまはざる以前に十六人の王子ありしが、これ等の王子は、父王の出家成道の後、亦た從つて出家して沙彌となり、智勝佛に代て『法華經』を覆述せしが、その時の第十六の王子こそ今の釋迦牟尼佛にして、汝等聲聞は、既にその當時に我が說法を聞て法華一乘の種子を下され（下種益）、爾來生々世々に於て幾多大小淺近の敎を聞ひて機根漸く熟し（熟益）、今や最後にまた法華一乘の法を聞て佛知見に悟入するを得たるなり（脫益）、我れと汝等との關係は、かくの如く遼遠なりと、次で化城の喩を說き、以て世尊誘引攝化の深旨を示したまひき。

五百弟子授記品第八　化城喩品の說法によりて、富樓那（富樓那彌多羅尼子 Pūrna-maitrayāni-putra）を上首とせる鈍根の五百の羅漢、皆開會せられ、受記を得て衣珠の喩を說けり。

學無學人記品第九　阿難陀（Ānanda）、羅睺羅（Rāhula）を上首として、學無學の聲聞悉く受記を得たり。

法師品第十　世尊、藥王菩薩に因て八萬の大士に告げて曰く、「若し人ありて法華經の一句を聞て

一念隨喜の心を起せば、皆當に菩提を成ずべし、復た一偈をも受持し、讀誦し、解說し、書寫し（これを五種法師と稱す、即ち五種の方法によりて法華を弘通する人をいふ）この經卷を敬視すること佛の如くにして種々供養するあらば、當に知るべし、この人はこれ大菩薩なり、如來の使なり、如來に遣はされて如來の事を行ずるなり」と。次で靈井の喩を說き、且つ滅後に『法華經』を宣說する者を誡めて曰く、

是諸善男子善女人、入如來室、着如來衣、坐如來座、爾乃應爲四衆廣說此經。如來室者、一切衆生中大慈悲心是、如來衣者、柔和忍辱心是、如來座者、一切法空是、安住是中、然後以不懈怠心、爲諸菩薩及四衆、廣說是法華經、と。

見寶塔品第十一　時に多寶佛全身の舍利を安置せる寶塔地中より湧出す、塔中に聲ありて讃嘆すらく「善哉善哉、釋尊の所說は皆これ眞實なり」と、會中に大樂說菩薩あり、世尊に寶塔湧出の因緣を問ふ、釋尊、多寶佛深重の誓願を說てこれに答へ、次で十方世界より分身諸佛を集め來り、この土を三たび變じて淨土と作し、右指を以て七寶塔を開く、既にして多寶佛、半座を分ちて釋尊に與へたまひ、釋尊乃ち塔中に入りたまふ、かくて大神力を以て四衆を接し、虛空にあらしめ、大音聲をあげて普く四衆に告ぐ、「誰能於此娑婆國土、廣說妙法華經、今正是時、如來不久當入涅槃」と。

提婆達多品第十二　釋尊、過去無量劫中に於て、國王の位を捨てゝ法華經を求む、四方に宣令して曰く、「誰か能く我が爲に大乘を說く者ぞ」と、時に阿私陀仙あり、來りて王の師となり、爲めに

大乘妙法華經を說けり、王乃ち歡喜して阿私仙に事へ、汲水拾薪、乃至、身を以て牀座となし、千歲を經歷して倦むことなかりき、かくて長時修行の功力により、終に成佛することを得たり、而してその阿私仙（Asita）とは、今の提婆達多（Devadatta）これなり、提婆達多は過去世に於ける我が善知識なれば、彼れ亦た當來成佛して天王如來と號すべしと。

時に多寶佛に隨從せる智積菩薩あり、本土に還らんことを多寶佛に白す、釋尊、智積菩薩に告げけまはく、「善男子、暫く待て、文珠菩薩、汝と相見て妙法を論說すべしと、この時文珠菩薩、娑竭羅龍宮より還り來る、智積問て曰く、「龍宮に於て化する所の衆生その數幾許なりしや」、文珠曰く、「無量不可稱計なり」と、次で八歲の龍女、甚深の妙法を受持し、須臾の頃に於て不退轉を得たることを說く、智積大に訝かる、言論未だ訖らざるに龍王その身を現じ、五障垢穢の女人といへども妙法の功力によりて成佛するに堪へたるを示現すべく、忽然の間變じて男子と成り、卽ち南方無垢世界に往き寶蓮華に坐して成佛し終りぬ。

勸持品第十三　藥王菩薩及び大樂說菩薩、二萬の眷屬と共に佛前に於て誓ふて曰く、「世尊、我等佛滅後に於て當に此經を奉持讀誦すべし」と、これ先きの見塔品の終に於ける釋尊の唱募に應じたるものなるべし、（以て、羅什譯の提婆品は後代の追加にかゝるものなることを知る、見塔品より直ちに勸持品に續くを妥當とす）更に復た受記を得たる五百の阿羅漢及び學無學八千人の者、齊しく誓願して曰く、「我等亦た他國土に於て廣く此經を說くべし」と、次で

佛は、姨母摩訶波闍波提比丘尼（Mahā-prajapati）、及び耶輸陀羅比丘尼（Yaśodhāra）に當來作佛の記を授く。

安樂行品第十四　文珠菩薩、末法に於て護持經典の方法を請問す、佛答て曰く、「身、口、意、誓願の四安樂行に安住すべし」と、身安樂行とは、菩薩の行處と親近處とに安住し、一切法空如實の相を觀ずるをいひ、口安樂行とは、他人の信ずる經典の短處を說かず、或は諸餘の法師を輕慢せず又は他人の好惡長短を說かざるが如きをいひ、意安樂行とは、嫉妬諂誑の心を抱くことなく、且つ諸の戲論諍競を離れ、一切衆生に於て大悲心を起し、如來に於て慈父の想を起し、菩薩に於て大師の想を起すをいひ、誓願安樂行とは、大慈悲を以て如何なる衆生をも必ず正法の中に住せしむべく發願するをいふ、かくの如く安樂行を說き終りて、次に輪王髻珠の喩を說きたまへり。

以上十四品の迹門說法中、その正宗分は三周說法にして、法師品以下、流通の五品に於ては、滅後に於ける法華經護持の功德を勸說し、且つ惡人成佛、女人成佛の明證を示されたるものなりとす

從地涌出品第十五　六萬恒沙の菩薩、各眷屬を將て地より涌出す、この菩薩衆中、上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩を上首とす、時に彌勒菩薩及び諸菩薩衆疑ふらく、「我等、昔より曾てかくの如きの諸菩薩衆あるを知らず」と、卽ち釋尊に問ひ奉る、釋尊告げたまはく、「我れ、娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得しより、これ等の諸菩薩を敎化示導せるなり」と、是に於てか、彌勒菩

薩及び無數の菩薩等、「ます〳〵疑惑を抱きて自から念ずらく、「世尊成道已來四十餘年、いかにしてかこの少時間に於て、かくの如き無量の菩薩衆を敎化せるや」と、乃ち彌勒菩薩重てこの義を問ひ奉る、これを開迹顯本の發端とす。

如來壽量品第十六　佛、彌勒菩薩の問に答て、將に久遠實成の本地を開顯せんとするに當り、まづ諸菩薩及び大衆に告げたまはく、「汝等まさに如來誠諦の語を信解すべし」と、かく繰りかへし警告すること三回、彌勒及び諸菩薩衆、四たび請ふに及び、遂に、

汝等諦聽、如來秘密神通之力、一切世間、天人及阿修羅、皆謂今釋迦牟尼佛、出釋氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得阿耨多羅三藐三菩提、然善男子、我實成佛已來、無量無邊百千萬億那由他劫。

と示し、五百塵點劫の喩を說き、我れ成佛已來常にこの娑婆世界に在て說法敎化せり、如來の壽命は、無量阿僧祇劫常住不滅なりと雖も、善巧方便の爲めの故に滅度を唱ふるなりとて、醫王の喩を說きたまひき、而して重頌に左の文あり、

自我得佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇、常說法敎化、無數億衆生、令入於佛道、爾來無量劫、爲度衆生故、方便現涅槃、而實不滅度。（中略）

於阿僧祇劫、常在靈鷲山、及餘諸住處、衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、

園林諸堂閣、種々寶莊嚴。

分別功德品第十七　壽量品の說法を聞きたる在會の衆生、大利益を得たることを說き、及び五品弟子の功德を明す。

隨喜功德品第十八　**法師功德品第十九**　聞法隨喜の功德無量なるを說き、次に法師六根淸淨の益を得ることを明す。

常不輕菩薩品第二十　佛、得大勢菩薩に告げたまはく、「法華經を持する者を惡口罵詈すれば、大罪報を得ること、及び法華經を護持する法師所得の功德は、向きに說くところの如し」と、次で常不輕菩薩の因緣を說て曰く、「過去無量劫に威音王佛あり、時に一菩薩比丘ありて四衆を見る每に、常に禮拜讚嘆して曰く、我れ深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、汝等皆菩薩の道を行ずればなりと、これを聞く者、怒てこの比丘を罵詈打擲するに、避走しつゝ猶高聲に前語を唱ふ、かくて常不輕の名を得たり、然るにこの比丘臨終の時、空中に威音王佛の聲ありて法華經を說きたまふの奇瑞現はれ、六根淸淨を得て更に壽命を增し、衆の爲めに說法して先きに己れを輕賤せる四衆を敎化し、遂に佛道を成ずるに至りき、而してこの常不輕菩薩とは豈異人ならんや、我身卽ち是れなりと。

如來神力品第二十一　文殊師利等百千萬億の菩薩及び一切大衆の前に於て、佛、舌相、放光、謦

咳、彈指、地動等の十種神力を現じ終つて、上行菩薩等に告げたまはく、「諸佛の神力はかくの如く無量不可思議なり、この神力を以てこの經の功德を說かんに、百千萬億阿僧祇劫に於て猶盡くすこと能はず」と。

囑累品第二十二　時に釋尊、法座より起ち、大神力を以て右手に無量菩薩の頂を摩してのたまはく、「我れ無量百千萬億阿僧祇劫に於て、この難得阿耨菩提の法を修習しき、今以て汝等に附囑す、汝等一心にこの法を流布すべし」と、かくの如く三たび附囑したまへる後、諸菩薩衆、世尊の敎勅を奉行すべきを誓ひ、こゝに十方如來の分身諸佛は各本土に還り、釋尊は多寶塔より出でゝ故の如く、その戸を閉ち、虛空より靈山に還りたまひき。

藥王菩薩本事品第二十三　宿王華菩薩の問に答へて藥王菩薩の本事を說て曰く、「過去無量劫に日月淨明德如來あり、彼佛、一切衆生憙見菩薩及び諸菩薩聲聞の爲めに、法華經を說きたまふ、時に一切衆生憙見菩薩、精進經行して現一切色身三昧を成就し、自から念ずらく、「我れ今當に佛に向つて最尊最上の供養を作すべし」と、乃ち香油を塗り香油を飲み、佛前に於て己が身を燃燒すること千二百歲に及べり、この菩薩命終の後、復に日月淨明德佛の國中に於ける淨德王の家に生れ、佛入涅槃の後、その舍利を供養せん爲めに再び兩臂を燃燒せり、而して一切衆生憙見菩薩とは、今の藥王菩薩これなりと。

妙音菩薩品第二十四　佛、眉間より光を放ちて東方世界を照し、淨華宿王智如來の淨土より妙音菩薩を召す、菩薩卽ち大神力を現じて娑婆世界耆闍崛山に來り、釋迦多寶の二佛に謁す、時に華嚴菩薩問ふて曰く、「この菩薩何の善根を種ゑ何の功德を修してこの神力を成就せるや」と、佛乃ち妙音菩薩の本事、幷にその菩薩の現身說法、隨類攝化自在なること、及び現一切色身三昧に住してかくは無量の衆生を饒益するなりと說く。

觀世音菩薩普門品第二十五　無盡意菩薩、佛に問ふて曰く、「世尊、觀世音菩薩、以二何因緣一、名二觀世音一」と、佛答へたまはく、「善男子、若有二無量百千萬億衆生、受二諸苦惱一、聞二是觀世音菩薩一、一心稱レ名、觀世音菩薩卽時觀二其音聲一、皆得二解脫一」と、次で觀世音菩薩（阿利耶縛盧吉帝濕縛羅 Aryāvalokiteśvara）の名を持すれば、七難を免るべきこと、又た常に觀世音を念じ恭敬すれば、三毒の煩惱を離脫すること等を說きたまふ。

無盡意菩薩又た問ふて曰く、「世尊、觀世音菩薩、云何遊二此娑婆世界一、云何而爲二衆生一說法、方便之力、其事云何」と、佛これに答へて三十三身普門示現を說く、三十三身とは(一)佛身、(二)辟支佛身、(三)聲聞身、(四)梵王身、(五)帝釋身、(六)自在天身、(七)大自在天身、(八)天大將軍身、(九)毘沙門身、(十)小王身、(十一)長者身、(十二)居士身、(十三)宰官身、(十四)婆羅門身、(十五)比丘身、(十六)比丘尼身、(十七)優婆塞身、(十八)優婆夷身、(十九)長者婦女身、(二十)居士婦女身、(廿一)宰官婦女身、(廿二)婆羅門婦女身、(廿三)童男身、(廿四)童女身、(廿五)天身、

（廿六）龍身、（廿七）乾闥婆身、（廿八）阿修羅身、（廿九）迦樓羅身、（三十）緊那羅身、（卅一）摩睺羅伽人非人身、（卅二）執金剛身これなり。

猶重頌に左の文あり、

觀音妙智力、能救二世間苦一、具二足神通力一、廣修二智方便一、十方諸國土、無二刹不一レ現レ身、種種諸惡趣、地獄鬼畜生、生老病死苦、以レ漸悉令レ滅、（中略）念二彼觀音力一、衆怨悉退散、妙音觀世音、梵音海潮音、勝二彼世間音一、是故須二常念一（中略）慈眼視二衆生一、福聚海無量、是故應二頂禮一。

佛敎講義錄

陀羅尼品第二十六　藥王、勇施の二菩薩、及び毘沙門等の天神、各陀羅尼を說て法を護る。

妙莊嚴王本事品第二十七　過去無量劫に佛あり、雲雷音宿王華智如來と名く、時に國王あり、妙莊嚴といふ、國王に二子あり、淨藏淨眼と名く、この二子父の王を化して佛に見ゑしむ、この因緣を說き終りてのたまはく、「妙莊嚴王とは今の華德菩薩にして、二子とは藥王藥上の二菩薩なり」と。

普賢菩薩勸發品第二十八　娑婆世界耆闍崛山にありて釋尊の法華經を說きたまふを聞き、東方、寶威德上王佛の世界より、普賢菩薩（三曼陀跋陀羅Samantabhadra）遙かに來つて世尊に謁し、左の如く問ひたてまつる。

若善男子善女人、於二如來滅後一、云何能得二是法華經一、佛告二普賢菩薩一、若善男子善女人、成二就四法一、於二如來滅後一、當レ得二是法華經一、一者爲二諸佛一護念、二者植二衆德本一、三者入二正定聚一、四者

發下救二一切衆生一之心上、善男子善女人、如レ是成二就四法一、於二如來滅後一、必得二是經一。

普賢菩薩は、猶語を次で白すらく、「後五百歲濁惡世中に於て、この經典を受持する者あらば、我れ當に守護して安穩なるを得せしめん、是人、若は行、若は立、此經を讀誦すれば、我れ六牙の白象王に乘り、其人の前に現せん、爾時、『法華經』を讀誦する者、我を見るを以ての故に、即ち三昧及び陀羅尼を得ん」とて、陀羅尼を說く。

以上、本門十四品の中、涌出品は開迹顯本の發端にして、次に壽量品に入て、佛は正しくその本地を開顯したまへり、即ち此二品は本門中の序分と正宗分なるが、次で、流通分に入ては、分別功德品以下の四品に於て『法華經』護持の功德を說き、神力品以下の八品に於て『法華經』の弘宣流布を付囑すると共に現一切色身三昧の妙用活現を示したまひき、現一切色身三昧とは、即ち普現色身三昧にして、身根淸淨能く身中に十法界の依止を現ずるをいひ、且つ妙音、觀音の如く、普門示現自在なるは全くこの三昧力の發現に外ならざるなり。

法華經一部各品の梗概を摘記すること上述の如し、更にこゝに一言附記すべきことあり、即ち法華經中に出でたる七喩これなり、七喩とは、一火宅喩（譬喩品）、二窮子喩（信解品）、三藥草喩（藥草喩品）、四化城喩（化城喩品）、五衣珠喩（五百品）、六髻珠喩（安樂行品）、七醫王喩（壽量品）にして、明代一如法師（法華經科註の著者）は、迹本二門開顯由二機分一利鈍一故有二三周七喩不同一といひ、而して七

喩の意を説明して、左の如くいへり、

火宅喩は三界不安穩のこと、窮子喩は小乘の羅漢、大乘功德の法財を有せざること、藥草喩は有漏の諸善能く惡を除く、而も無漏の善を最上と爲すこと、化城喩は二乘の眞空涅槃能く生死の敵を禦ぐこと、衣珠喩は一乘智寶の佛種卽ち了因種を下すこと、髻珠喩は中道實相の極果の宗とするところ、醫王喩は大醫王能く一切衆生の病を療することを喩顯せるものなりと。

七喩の內容事實を說くは、餘りに冗長煩雜の恐れあり、故に一言その喩意を述ぶるに留む。

五　高祖の法華經觀

出世本懷を談ずるに就て、我が高祖大師が彼の法華一乘に對抗して、本願一乘圓融至極の眞敎を顯はしたまふ思召あるはいふまでもなし、然るに本典六軸中、一箇所も『法華經』を引用したまはざるは何ぞや、これ大いに怪むべし、それ『法華經』は諸經中の王ともいはるゝ經典にして、三論、法相、華嚴等の祖師、何れも斯經を以て最上深妙の法門を說けるものなりと判せざるはなし、されば若し三部中の大藏たる眼光を以て諸經を取扱ふに當りては、まづ第一に斯經を自家藥籠中のものとなすべき筈なるに、本典六軸中、『華嚴』『涅槃』の文は盛んに引用しながら、獨り『法華經』を引用し

たまはざるは、一見頗る奇異の感なくんばあらざるなり、是に於てか、今家の或學者を說を吐て曰く、「これ捨聖歸淨の思召より出でたることならん、それ『法華經』は天台宗所依の本經にして、高祖は實に天台宗の龍象なりしなり、然るに一旦吉水の草庵に入て捨聖歸淨したまひし後は、本宗に毫も思を遺すことなく、從てその正依の經典をも擱て顧みざるの意を最も適切に示したまふものなるべし」と、又た或學者は此說を批評して曰く、これ恐くは祖意に非ざるべし、如何となれば、高祖既に『本典』に『華嚴』『涅槃』の經文を屢引用したまふもの、これ全く始終の二經によりて以て一代經を總括したまふ思召なるや明かなり（涅槃經の下に、高祖の涅槃經觀を題ざる一項あり、參照すべし）されば、『法華經』を引用せずとも、引用したるに同じ、況んや法華同味の『涅槃經』を屢引用せるに非ずや、若し引文なきを以て其經を措て顧みざるものとすれば、『本典』に引用せられし經は甚だ少く、然らざるものは極めて多きが故に、高祖の大藏觀は其內容極めて貧弱なるを免れざることゝなるべし、これを以て捨聖歸淨の思召よりして『法華經』不引を解釋するは、恐く祖意に反するには非ざるなき歟。

然らば、『法華經』不引の祖意如何といふに、彼の『法華經』は實に諸經の王なり、光闡道敎中の第一位を占むるものなれば、且く聖淨二門對抗の勢を示すべく、彼を光闡道敎の代表とし、これに對して弘願一乘の利益を宣說せんが爲に故意にこれを引用したまはざるものならん歟、若し直ちに自家藥籠中のものとして之を引用すれば、聖淨二門對抗することゝならず、故に一應は與門に約して

二門相對の勢を示し、後更に一歩を進めては奪門に約して、本願一乘絶對の眞敎以外、これと對立するものあることなく、所謂、十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三の文の如く、誓願一佛乘の外に餘他の法を見ざるなり、これ實に高祖の大藏觀なるべく、而してこの意の存するところは、先きにいふが如く、『華嚴』と『涅槃』との初後の二經を屢引用したまへるに就て明かなるものありといふべし、この說餘りに巧に過ぎて稍鑿說の嫌なきにあらずと雖、且く記して以て高祖の法華經觀に擬すること爾り

六　傍明淨土敎としての法華經

『本典』六軸中に法華經を引用したまはざりし祖意の如何に就ては、一二先哲の考究を守株して記述せること前項の如し、然り而して『選擇衆』上四右には傍明淨土敎として、『華嚴』『法華』『隨求尊勝』等の諸經、並に『起信論』『寶性論』『十住毗婆沙論』『攝大乘論』等の諸論を擧げたり、今これに就て一言するところなかるべからず。

傍明とは、聖道諸師の所謂、「諸經所讃多在彌陀」の分齊にして、諸經中に往生淨土を說くの文これ多し、今これ等を一括して傍明とし、これに對して三經一論の所明獨り殊絶顯露なるを以て正明

とす、故に正明淨土敎を明す一段の終には「是淨土正依經也」の文ありと雖も、傍明淨土敎なるものは、決してこれを以て傍依とは判定したまはざるなり、卽ち正明卽正依なれども、傍明卽傍依とはいふべからず、以て祖意の存する所を知るべし。

『法華經』中阿彌陀佛を說くの文左の如し、

羅什譯、第三化城喩品第七に曰く、

乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。爾時有佛。名大通智勝如來。（中略）其佛未出家時。有十六子。其第一者。名曰智積。（中略）爾時十六王子。皆以童子出家而爲沙彌。諸根通利。智慧明了。已曾供養百千萬億諸佛。淨修梵行。（中略）十六沙彌。今皆得阿耨多羅三藐三菩提。於十方國土。現在說法。有無量百千萬億菩薩聲聞。以爲眷屬。

其二沙彌。東方作佛。一名阿閦。在歡喜國。二名須彌頂。東南方二佛。一名師子音。二名師子相。南方二佛。一名虛空住。二名常滅。西南方二佛。一名帝相。二名梵相。西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切世間苦惱。西北方二佛。一名多摩羅跋栴檀香神通。二名須彌相。北方二佛。一名雲自在。二名雲自在王。東北方佛名壞一切世間怖畏。第十六我釋迦牟尼佛。於娑婆國土。成阿耨多羅三藐三菩提。

同　第六藥王菩薩本事品第二十三に曰く、

若有二女人一。聞二是藥王菩薩本事品一。能受持者。盡二是女身一後不二復受一。若如來滅後。後五百歲中。若有二女人一。聞二是經典一。如レ說修行。於レ此命終。卽往二安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處一。生二蓮華中寶座之上一。

右の二文中、初の化城喩品の文は、過去大通智勝佛十六王子、出家成道の宿緣を說けるものにして、西方阿彌陀佛は實に釋迦牟尼佛等と同じく十六王子の隨一なり、これ淨土正依經論に說く所と頗るその趣を異にするものありと雖も、阿彌陀佛の成佛を說けるの點に於て、傍明淨土敎として見ることを得べきのみ、固より阿彌陀成佛の因果卽衆生往生の因果なることを宣說せられたる淨土門別途不共の法義に至ては、之を大無量壽經の上に求めざるべからざるや論なし、若しそれ三部中の大藏たる眼光に照してこれを見るときは、是等の經文一として弘願一乘海に誘引するが爲めならざるはなし、思ふて知るべし。

次の藥王品の文は、彼の提婆品に於る龍女成佛の文と同じく、法華一乘に於る女人成佛の明證なること在文分明なりと雖も、卽往安樂世界阿彌陀佛の文より見こみて、これを我藥籠中のものとして扱ふに當りては、亦たこれ第三十五願女人成佛の利益を說けるものなりといふべし、卽ち聖道一代の敎は全く彌陀法の化前序たることを示すに外ならざるなり。

この他、『添品法華經』並に『正法華經』中にも、前の文と同一なるものあり、煩を恐れて省略す。

『七祖聖敎』中の『論註』『安樂集』『往生要集』には、所々に引文あり、披て見るべし、

因に『選擇集』上三左に、三部經名の例を擧げたり、左に附記し置くべし、

三部經名。其例非一。一者法華三部。謂無量義經。法華經。普賢觀經是也。（中略）三者鎭護國家三部。謂法華經。仁王經。金光明經是也。

第八　大薩遮尼乾子所說經

元魏　北天竺沙門　菩提留支 Bodhiruki 譯

一　翻譯並に題號

この經に二譯あり。大薩遮尼乾子所說經（宋、元、明の三本俱に所說の二字を受記に作る且つ宋本には大の字なし）と、佛說菩薩行方便境界神通變化經（元、明の二本には佛說の二字を冠せず）これなり、前者は、司州牧汝南王の爲めに、元魏正光元年、菩提留支の譯出するところにして、後者

は、劉宋の代に中天竺沙門、求那跋陀羅 Gunabhadra の譯出するところなり、而してこの二譯を比較するに、魏譯は十卷、十二品より成り、宋譯は三卷より成る、且つ品名を分たず、所々缺略せるあり。

大薩遮尼乾子 Mahāsatya-nirgranthi とは、耆那 Jaina 教徒の一師にして、尼乾子（呢犍陀子又は呢犍陀）は Nirgranthi の音譯なり、無縛（又は離繫）の義にして同教徒中の出家の者をいふ、この教徒は無縛の境に達するを以て終極目的とするが故に此名を得たるなり、（耆那教は釋尊と同時代の人なるワルダマーナー Vardhamāna をその教祖とす、十二年間の苦行を重ねて大道を成就し、その後三十九年間、佛陀と同地方に布教せりといふ）、薩遮とは、耆那教徒中の一大論師の名にして、Sacca 又は Saccaka（二語俱に俗語の形、梵語の Satya に相當す）の音譯なり、眞實又は眞諦と義譯す、大とは尊號なるべし、これを要するに、この經名は、大論師薩遮と稱する尼乾子（子は釋子の子の如く、徒衆の義）の所說なることを表彰せるものにして、實に一經の大部分は該論師が嚴燈王の問に答へたる說法なりとす。

南方所傳によれば、この薩遮なる者は佛在世の時の外道にして、屢々佛に法を聽きたれども、遂に佛門に歸せずして終りしが、佛はその滅後二百四十六年、彼れ再び師子島に生れて佛弟子となり阿羅漢果を得、遂に同島を擧げて佛教に化すべしと懸記せられたりといふ、（この傳說に就て一考す

るに、この經第二、詣嚴燈王品第四の初に南方國大薩遮尼乾子とあるもの暗に符合するところあるが如し）而してこの經の說相より見るに、後世の佛徒、在世の時に薩遮尼乾子に寄託して以て、佛陀の教法を宣揚記述せるものなるべく、果して然らんには、この經第十、授記品第十一に於て、この師は外道の相を現ずと雖も、その本地は大乘の菩薩なるを以て、佛は當來作佛の記を授けたまひしことを記せるもの、亦た思ひ半に過ぎんのみ、これ大薩遮尼乾子受記經とも稱せらるゝ所以なり。

二　一經の大意

『閱藏知津』卷二十四には、この經各品の大意を叙し終りて後、更に附記して曰く、

此經文葉俱暢。宣二說世出世法一。曲盡二其妙一。急宜二流通一。

と、大薩遮尼乾子の說くところ、實に世間出世間の兩方面に亘りて辯舌流瀉、まづ世間の方面に於ては王道を詳論して治國の要術を明かにし、且つ世間諸種の衆生の罪過を擧げて之を誡め、出世間の方面に於ては備に菩薩所行の諸種の法幷に如來所有の功德を說き、更に進んで大乘深妙の法門を宣說して唯佛一乘、佛性普遍、法身常寂の極理を說破せり、故に若し此經を所詮の教義より命名すれば、宋譯の如く菩薩行方便境界神通變化經といふべし、卽ち兩譯共に最後に至てこの經所說の法

門及說相に就て種々の名を列記せるを見るに、曰く菩薩行方便境界奮迅法門、曰く如來秘密藏、曰く如來具足功德、曰く如來甚深境界、曰く說一乘、曰く文殊師利所說經、曰く薩遮尼乾子所說經と、以て其大要を伺ふを得べき歟。

佛敎講義錄

猶、一言附記すべきは、文殊師利所說經と薩遮尼乾子所說經とは、兩名相容れざること是れなり然るにこの經の說相より見れば、これ實に相容れざるに非ず、卽ちこの經の敎起因緣は文殊菩薩の發問にあり、而して薩遮尼乾子所說の前後に於て、佛は文殊師利に對して菩薩所行の諸種の法門を宣說したまひしより見れば、佛說卽ち文殊師利の所說、亦たこれ薩遮尼乾子の所說なりといふを得べき歟。

三　各品の大意

序品第一　佛、鬱闍延城（又は優禪延國Ujjayinī 今のウザエーンに當り河育王の時には西方印度の大都會にして副王の住したる處なりといふ）嚴熾王（旃茶鉢樹提王 Candra-prajvalita）園中に住し、大比丘衆、大菩薩衆等に圍繞せられ、威光殊妙、希有の相を現じたまふ。

問疑品第二　時に文殊師利法王子、世尊殊特の相を拜し奉りて疑ふらく、「世尊、何故にかゝる希

有の相を現じ、又たかくの如き無量の大衆雲集せるや」と、乃ち偈を說て佛を讃歎し奉れる後、佛に問ふところあり、佛、答へたまはく、「菩薩行方便境界奮迅法門は知り難く入り難し、かくの如き甚深微妙の法は小行及び惡見の人の信知する能はざるところなり」と、文殊重ねて甘露門を開き最勝法輪を轉せんことを佛に願ひ奉る。

一乘品第三　佛、文殊師利に告げたまはく、「善哉々々、汝今能く如來に菩薩所行の甚深の法門を問ひ奉れり、我れ當に汝が爲めに菩薩行方便境界奮迅法門を說くべし」と、次で諸の大衆に對して、二種の十二法、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、般若、方便の七波羅蜜に、おの〳〵十二種の妙行あること、諸佛如來に十二種の勝妙功德ありて佛國土を淸淨ならしむること、及び衆生を利益せんが爲めに方便して十二濁を示現すること等を說き、最後に、一乘眞實、三乘方便の旨を明して曰く、「法界の性は無差別なるを以ての故に、佛法中に乘の差別あることなし、然るに諸佛、衆生の爲めに三乘を說くは、諸の衆生をして悉く漸く諸佛大乘の法門に入らしめんが爲めなり、宛かも諸伎を學ぶ者の次第に習學するが如し、如來は世諦に依りて三乘を說き、第一義に依りて一乘を說くなり」と。

諸嚴熾王品第四　時に南方國の大薩遮尼乾子、八十八千萬尼乾子と俱に諸國を遊行し衆生を敎化しつゝ次第に鬱闍延城に到る、嚴熾王これを聞き、薩遮、王を迎へて國內

の狀況幷に政令教化の如何を問ひ、次で十善業道を說く。

王論品第五　その時、嚴熾王、薩遮尼乾子の所說を聞て歡喜信受し、更に王道に就て問ふ、薩遮、告て曰く、「王に四種あり、一者轉輪王、二者少分王、三者次少分王、四者邊地王これなり、轉輪王は七寶を具足し、十善業道を以て四天下を化し、能く一切人民をして十惡業を離れしむ、而してその七寶を成就するは、實に瞋心と不善業とを離るゝに依てなり、轉輪王の下に諸小王あり、所謂、少分王、次少分王、邊地王これなり、是等の小王、亦た轉輪聖王の教令に隨順し、道を以て國を治め、諸の衆生を護りて安穩ならしむ、卽ち不放逸心大慈悲心を以て能く十種の功德を成就すればなりと。

請食品第六　大薩遮及び諸の大衆、王の請に應じ、宮中に入て種々の供養を受け、次で王の爲めに沙門を供養すれば福德無量なることを說く。

問罪過品第七　嚴熾王疑ふらく、「大薩遮說くところの法、皆是れ如來の正法に隨順す、大薩遮、今、如來を尊重するや否や」と、乃ち大薩遮に問て曰く、「聰明利根の人、罪過ありや否や」と、大薩遮曰く、「聰明利根なりと雖も、一切皆罪過あり」とて、次第に諸人の罪過を擧げ、終に王及自身の罪過にまで說き及ぼせり。

如來無過功德品第八　嚴熾王更に問ふて曰く、「この衆生界中、全く諸の過失なきものありや否や」と、薩遮答て曰く「有り、釋種沙門瞿曇、一切の過失なし、福德莊嚴、譏嫌すべからず」とて、備

に如來所有の功德を演ぶ、所謂、三十二相、八十種好、大慈心力、三十二種大悲觀心、三念處、三不護業、一切種智、十自在、三十七道品、十力、四無所畏、十八不共法、及び不可思議功德法身等に就て詳說せり。

詣如來品第九　薩遮、王及國內の諸人と共に佛所に詣す。

說法品第十　舍利弗、薩遮、見佛聞法の事に就て問答す、次で佛、目犍連の問に答へて、薩遮善男子、種々無量の身相を現じて無量の衆生を開化することを說きたまふ。

授記品第十一　佛、文殊師利に告げたまはく、薩遮善男子、無量無數劫を過ぎて當に大菩提を成じ、實慧幢王佛と名くべしと。

信功德品第十二　會中の大衆、歡喜踊躍して世尊に白す、「世尊、昔、波羅捺城 Vārāṇasī に在て、初て法輪を轉じ、今こゝに於て第二の法輪を轉じたまふ、我等願はくば常にこの妙寶法門を離れざらん」と、佛、文殊師利に告げたまはく、「末世の時、この法門を聞て能く信解する者は、已に曾て過去無量無數の諸佛を供養すればなり」と、次で阿難に對して「汝當にこの妙法を受持讀誦宣說すべし、當に大乘の根ありて能く信受するに堪へたる者を觀察して爲めに說くべし、卒爾に說くことを得ず」と、而して最後にこの法門を如何に名くべきかに就て種々の名稱を列擧したまひき。（前項參照）

四　『本典』御引用に就て

「信卷末』四十四右に左の引文あり、

二者大乘五逆。如薩遮尼乾子經說。一者破壞塔。焚燒經藏。及以盜用三寶財物。（中略）五者謗無因果。長夜常行十不善業。

と。これ『尼乾子經』第四、王論品第五之二の中の「王言。大師。何者根本罪。答言。大王。有五種罪。名爲根本」等の一段の文を取意抄出したまへるものにして、三乘の五逆の外に大乘の五逆あることを立證せんが爲に引用したまへるものなること在文分明なり、而して此他、『七祖聖敎』にもこの經を引用せられたることなし。

第九　大法鼓經　Mahābherī-hāraka-parivarta

劉宋　中天竺沙門　求那跋陀羅 Gunabhadra 譯

一　題號及大意

大法鼓經とは、大法鼓を擊つの意にして、深妙の法門を宣說するをいふ、卽ちこの經に明すところの要旨は、彼の『法華』『涅槃』兩經のそれに同じく、三乘方便、一乘眞實、一切衆生悉有佛性、及び涅槃常住等の深義を開顯せるを見る、されば、これ等の點より見れば、この經は實に小法華經又は小涅槃經とも名けらるべきものにして、彼の『法華經』に於る七喩の一なる長者窮子の喩及び化城の喩亦たこの經に出でたり、而して天台五時の敎判によれば、般若の次に法華を說けるものなりとし、佛陀世尊の化意よりいへば、般若の空觀を以て大小隔歷の情執を淘汰し、次で佛知見に開會せしむるためなりとす、この經亦た先きに空法を學びたる菩薩の爲めに、常住安樂有色解脫の法を說くものなりとし、且つ曰く、「一切空經、是有餘說、唯有此經、是無上說、非有餘說」と、以て知るべし、更に二三の項目を設けて一經の說相を記すること左の如し、

敎起因緣　佛、祇園精舍(Jetavana-vihāra)にまし〳〵て、大比丘衆、大菩薩衆等、無量の大衆に對し、有非有の法門を說て曰く、

有ゝ有則有二苦樂一　無ゝ有則無二苦樂一　是故離二苦樂一　則是涅槃第一之樂。

と、時に波斯匿王(prasenajit)鼓を擊ち貝を吹て來る、佛、阿難に告げたまはく、「我今當に大法鼓經を說くべし、この大法鼓經は、世間希有なること優曇鉢華の如し、二乘の人この法門を信せず」と、次で迦葉に命じて來會の大衆能くこの大法鼓方廣一乘の法を聞くに堪ゆるや否やを觀察せしむ、乃ち百千萬億阿僧祇分の聲聞緣覺、初業の菩薩ありて、自から大法を聞くに堪へずと思惟し、皆座より去る、その餘は住まりて大法鼓經を說きたまはんことを願ひたてまつる。

名號功德　佛、迦葉に告げたまはく、「比丘あり、信大方廣と名く、若し其名を聞く者あらんに、貪恚癡の箭ことゞく拔け出づ、譬へば波斯匿王、敵國と戰ふに當り、拔箭藥を以て戰鼓に塗らしむ、若し毒箭を被る者あらんに、若くは一由旬、若くは二由旬の間、その鼓聲を聞かば箭悉く拔け出づるが如し」と、迦葉白さく、「若し菩薩の名を聞て能く三種の毒箭を除かば、況んや世尊の名號功德を稱するに於てをや、況んや復たこの大法鼓經の名を聞くに於てをや」と。

有と非有　迦葉問て曰く、「有ゝ有則有二苦樂一　無ゝ有則無二苦樂一　この義如何」と、佛曰く、「若くは苦、若くは樂、彼れ則ちこれ有なり、無有とは則ち苦樂なきなり、この故に苦樂を離るゝを涅槃第

一の樂とす、當に求めて有を斷ずべしと。

業起と善起　迦葉また問て曰く、「生死及び涅槃、誰の所作なりや、佛曰く、「業起及び善起なり、業、無量の法を起す、善、無量の法を起す、業起とは有なり、善起とは解脫涅槃なりと。

一切衆生悉有佛性　衆生に佛性あるが故に涅槃することを得、然るに無量の煩惱癡、如來性を覆藏すること、恰かも膚翳の眼を覆ふが如く、重雲の月を隱すが如く、井を穿つに乾土濕土を經て遂に水を得るが如く、瓶中の燈焰の如し、煩惱の瓶を破壞すれば如來藏燈始めて明淨なり、煩惱の土を掘り去れば遂に如來性水を得べしと。

この他、法華經の三喩を擧げて唯佛一乘の深旨を說けること既にいふところの如し、煩を恐れて省略するを可とせん歟。

二　『安樂集』所引の文について

『安樂集』下十一に「依法鼓經云」又は「如大法鼓經說」と標して二箇所引用せられたるも、現行の本を檢するに全く是等の經文を見ず、これに就て古來の學者、說を吐く者少し、たま〳〵これ有るも取意の文として看過せり、然るに安樂集述聞卷四には左の如くいへり、

此文（法鼓經文）並下同經文。與二大悲經文一現行本無。（中略）按二大法鼓經上下頗末一。全無二此義一。以何爲二取爲一恐是異本乎。

と、この說實に當を得たり、法鼓經を通讀するに、彼の『安樂集』所引の文の如きは、全くこれなきのみならず、取意の文とも見得べからざるなり、且つこの他、祖典中本經の引文なし。

第十　大寶積經 Mahâratnakûta-sûtra

既に法華部に屬する四部の經に就て略述し終りたれば、以下、方等部に屬する經に就て、便宜解說を試むべし、まづ左にその經名を列記し置かん。

『大寶積經』
『佛說遺日摩尼寶經』
『阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經』
『觀世音菩薩授記經』

『大方等大集經』
『般舟三昧經』
『月燈三昧經』
『三千佛名經』
『楞伽阿跋多羅寶經』
『大乘寶月童子問法經』
『佛說藥師如來本願經』
『佛說觀佛三昧海經』
『佛說首楞嚴三昧經』
『維摩詰所說經』
『解深密經』
『金光明最勝王經』
『佛說莊嚴菩提心經』
『佛說大方廣菩薩十地經』
『思益梵天所問經』

佛教講義錄

『勝思惟梵天所問經』
『大乘同性經』
『菩薩瓔珞經』
『大乘本生心地觀經』
『無字寶篋經』
『寶雲經』
『觀察諸法行品』
『大樹緊那羅王所問經』
『佛說海龍王經』
『大方廣如來秘密藏經』
『佛說不增不減經』
『悲華經』
『佛說鹿母經』
『佛說無上依經』
『念佛三昧經』

『佛說觀彌勒菩薩上生兜率陀天經』

一　大寶積經の譯出並に組織

『大寶積經』一部、四十九會一百二十卷、唐代、南天竺三藏菩提流志の譯成するところ、（中宗神龍二年開筵、叡宗先天二年功畢）、これより先き本經の部分的譯出卽ち摘會別翻は夙に行はれ、後漢西晋の頃より幾多の三藏によりて試みられたるも、全部四十九會を將來し、舊譯を綜合勘同して、その未翻のものは之を翻譯し、且つ已翻のものと雖も、舊義擁迷のものは重ねて翻譯し、以て全部完璧の偉業を成したるは實に流支その人なりとす、流支の前旣に玄奘三藏あり、この梵本を將來せしも、僅にその中の一會を譯出せるのみ、尤も『大般若』を譯し畢りたる後、諸德の懇請により已むなく夾を啓て僅に數行を譯せしも、晚年その事を終る能はざるを知り、乃ち嗟歎して曰く「此經與二此土群生一未レ有レ緣矣。余氣力衰竭不レ能レ辨也」と、遂に輟みにきといふ。

四十九會百二十卷の中、流志の譯せしは二十六會三十九卷なり、左に其會名及譯者を列記すべし、

第一三律儀會三卷　菩提流支譯

『大方廣三戒經』三卷（北凉　曇無讖 Dharmarakṣa 譯）はこれが同本異譯なり。

第二無邊莊嚴會四卷　菩提流支譯（新譯單本）

第三密迹金剛力士會七卷　西晉　中天竺三藏竺法護 Dharmarakṣa 譯

『佛說如來不思議秘密大乘經』二十五卷（宋、中印度沙門　法護等譯）はこれが同本異譯也。

第四淨居天子會二卷　竺法護譯

第五無量壽如來會二卷　菩提流志譯

『佛說無量清淨平等覺經』二卷（後漢　月支國沙門　支婁迦讖 Lokarakṣa? 譯）

『佛說無量壽經』二卷（曹魏　天竺沙門　康僧鎧 Saṃghavarman 譯）

『佛說阿彌陀經』二卷（吳　月支國優婆塞　支謙譯）

『佛說大乘無量壽莊嚴經』（宋　中印度沙門　法賢譯）の四經はこれが同本異譯なり。

第六不動如來會二卷　菩提流支譯

『佛說阿閦佛國經』二卷（後漢　支婁迦讖譯）はこれが同本異譯なり。

第七被甲莊嚴會五卷　菩提流志譯（新譯單本）

第八法界體性無分別會二卷　梁　扶南國沙門　曼陀羅仙 Mandra 譯（彩二出）

第九大乘十法會一卷　元魏　北印度　佛陀扇多 Buddhasanta 譯

『大乘十法經』一卷（梁　扶南國三藏　僧伽婆羅 Saṃghapāla 譯）は、これが同本異譯也。

第十文殊師利普門會一卷　菩提流志譯

『佛說普門品經』一卷（西晉　竺法護譯）は、これが同本異譯なり。

第十一出現光明會五卷　菩提流志譯（新譯單本）

第十二菩薩藏會二十卷　玄奘譯

『佛說大乘菩薩藏正法經』四十卷（宋　法護等譯）はこれが同本異譯なり。

第十三佛爲阿難說人處胎會一卷　菩提流志譯

『佛說胞胎經』一卷（西晉　竺法護譯）は、これが同本異譯なり。

第十四佛說入胎藏會二卷　義淨三藏譯

第十五文殊師利授記會三卷　于闐國　實叉難陀 Śikṣānanda 譯

『文殊師利佛土嚴淨經』二卷（西晉　竺法護譯）は、これが同本異譯なり。

第十六菩薩見實會十六卷　高齊　烏萇國 Udyāna 那連提耶舍 Narendrayaśas 譯

『父子合集經』二十卷（宋　日稱 Sūryayaśas 等譯）は、これが同本異譯なり。

第十七富樓那會三卷　姚秦　鳩摩羅什 Kumārajīva 譯

第十八護國菩薩會二卷　隋　健陀囉國（Gandhāra 闍那崛多 Jñānagupta 譯

『佛說護國尊者所問大乘經』四卷（宋　北印度　施護 Dānapāla 譯）は、これが同本異譯也。

第十九郁伽長者會一卷　曹魏　康僧鎧譯

『佛說法鏡經』二卷（後漢　安息國　優婆塞安玄共嚴佛調譯）

『郁迦羅越問菩薩行經』一卷（西晉　竺法護譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第二十無盡伏藏會二卷　菩提流志譯（新譯單本）

第二十一授幻師跋陀羅記會一卷　菩提流志譯

『幻士仁賢經』一卷（西晉　竺法護譯）は、これが同本異譯なり。

第二十二大神變會二卷　菩提流志譯（新譯單本）

第二十三摩訶迦業會二卷　元魏　月婆首那 Upasya 譯

第二十四優波離會一卷　菩提流志譯

『佛說決定毘尼經』一卷（北云、東晉錄、失二譯人名）（南云、燉煌三藏譯）はこれが同本異譯なり、而して又は『佛說三十五佛名禮懺文』（唐　北天竺沙門　大廣智不空 Amoghavajra 譯）は、前經の中より譯出別行せるものなり。

第二十五發勝志樂會二卷　菩提流志譯

『發覺淨心經』二卷（隋　闍那崛多譯）は、これが同本異譯なり。

第二十六善臂菩薩會二卷　鳩摩羅什譯

第二十七善順菩薩會一卷　菩提流志譯

『佛說須賴經』一卷（曹魏　西域沙門　釋白延譯）

『佛說須賴經』一卷（前涼　月支國優婆塞　支施崙譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第二十八勸受長者會一卷　菩提流志譯

『菩薩修行經』（西晉　河內沙門　白法祖譯）

『佛說無畏授所問大乘經』（宋　北印度沙門　施護譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第二十九優陀延王會一卷　菩提流志譯

『佛說優塡王經』（西晉　沙門　法炬譯）

『佛說大乘日子王所問經』（宋　中印度沙門　法天 Dharma-deva 譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第三十妙慧童女會一卷　菩提流志譯

『佛說須摩提經』（西晉　竺法護譯）

『佛說須摩提菩薩經』（姚秦　鳩摩羅什譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第三十一恒河上優婆夷會一卷　菩提流志譯（新譯單本）

第三十三無畏德菩薩會一卷　元魏　北天竺三藏佛陀扇多 Buddhaśânta 譯
『佛說阿闍世王女阿述達菩薩經』一卷（西晉　竺法護譯）は、これが同本異譯なり。

第三十三無垢施菩薩應辯會一卷　西晉　聶道眞譯
『佛說離垢施女經』一卷（西晉　竺法護譯）
『得無垢女經』一卷（元魏　中天竺婆羅門　瞿曇般若流支 Gautama prajñâruci 譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第三十四功德寶華敷菩薩會一卷　菩提流志譯（新譯單本）

第三十五善德天子會一卷　菩提流志譯
『文殊師利所說不思議佛境界經』二卷（菩提流志譯）は、これが同本異譯なり。

第三十六善住意天子會四卷　隋　南印度三藏　達摩笈多 Dharma-gupta 譯
『善住意天子所問經』三卷（元魏　烏萇國沙門　毘目智仙 Vimokshasena 等譯）
『佛說如幻三昧經』三卷（西晉　竺法護譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第三十七阿闍世王子會半卷　菩提流志譯
『太子刷護經』（西晉　竺法護譯）
『太子和休經』（西晉　失譯）の二經は、これが同本異譯なり。

佛教講義錄

第三十八大乘方便會二卷半　東晉　西域居士　竺難提 Nandi 譯
『慧上菩薩問大善權經』二卷（西晉　竺法護譯）
『佛說大方廣善巧方便經』四卷（宋　施護譯）の二經は、これが同本異譯なり。

第三十九賢護長者會二卷　隋　闍那崛多譯
『大乘顯識經』二卷（唐　中印度三藏　地婆訶羅 Divâkara 譯）は　これが同本異譯なり。

第四十淨信童女會　菩提流志譯（新譯單本）

第四十一彌勒菩薩問八法會　元魏　北印度沙門　菩提留支 Bodhiruci 譯
『佛說大乘方等要慧經』（後漢　安息國沙門　安世高譯）はこれが同本異譯なり。

第四十二彌勒菩薩所問會　菩提流志譯（第三譯）

『彌勒菩薩所問本願經』（西晉　竺法護譯）はこれが同本異譯なり。

第四十三普明菩薩會一卷　秦錄失譯
『佛遺日摩尼寶經』一卷（後漢　支婁迦讖譯）
『佛說摩訶衍寶嚴經』一卷（晉代　失譯）
『佛說大迦葉問大寶積正法經』五卷（宋施護譯）の三經は　これが同本異譯なり。

第四十四寶梁聚會二卷　北涼　道龔譯

第四十五無盡慧菩薩會　菩提流志譯（新譯單本）

第四十六文殊說般若會　梁　扶南國三藏　曼陀羅仙 Mandra 譯

『文殊師利所說般若波羅蜜多經』一卷（梁扶南國三藏　僧伽婆羅 Saṅghapāla 譯）

『大般若波羅蜜多經』二卷（第五百七十四卷と同五卷）との二經は　これが同本異譯なり。

第四十七寶髻菩薩會二卷　西晉　竺法護譯

第四十八勝鬘夫人會一卷　菩提流志譯

『勝鬘師子吼一乘大方便方廣經』一卷（劉宋中天竺沙門　求那跋陀羅 Guṇabhadra 譯）はこれが同本異譯なり。

第四十九廣博仙人會一卷　菩提流志譯

『毗耶娑問經』二卷（元魏　瞿曇般若流支譯）はこれが同本異譯なり。

佛教講義錄

二　各品大意

（八八）

三律儀會第一（Trisaṃvara-nirdeśa）佛、耆闍崛山に住して大比丘衆大菩薩衆等と俱なりき、時に摩訶迦葉問ひ奉りて曰く、「何れの法を攝取修行し、諸の如來の道を增長成熟して無上菩提に證入し

不退轉を得べきや」と、佛答へたまはく、「佛の智慧力無畏を求むる者は依り倚るところなくして無所得に住し、以て諸善根を種ゆべし」とて、備に有所得執着の過患を說き、最後に在家の菩薩の種々の三法を明かす。

（八九）

無邊莊嚴會第二（Anantamukha-vinisodhana-nirdeśa）この會三品より成る。

無上陀羅尼品第一　佛、迦蘭陀竹林に住したまひし時、無邊莊嚴菩薩の問に答へて、如來の智、諸の善巧を攝することを說き、又、佛の所說は淸淨ならざるなく、根の成熟に隨ふて法皆平等なり能く實の如く了知すれば法に了不了あることなく、且つ一切の法は皆假名の說なるを以て幻の如く夢の如し、乃至、この淸淨の弘誓を以て衆生を攝する時、實に少法として着すべきものなしと示し次に陀羅尼の理趣差別、智慧善巧を說けり。

出陀羅尼品第二　佛の十力及び陀羅尼二章を說く。

淸淨陀羅尼品第三　佛先きに神通力を以て大衆をして十方の佛を見、その說法を聞かしめ、次に四無所畏及び十四呪を說き、頌を說き終りて誦持を勸め利益を結ぶ、最後に此經を「無邊辨才攝一切義善巧法門」と名くといへり。

密迹金剛力士會第三（Tathāgatâkintya-guhya-nirdeśa）佛、靈鷲山にまし〳〵て大衆の爲めに大士の業を說く、金剛密迹、稱歎して曰く「方便智度の二業當に佛道を成ずべし」と、寂意菩薩あり、

如來の秘要を敷衍せんことを密迹に請ふ、佛亦た勅して演べしむ、密迹まづ四不思議を說き、次に諸菩薩の密を說く、乃ち往事を引きて身密言密心密を說き畢る、既にして雷音菩薩來りて雷音王佛の命を傳ふ、釋尊爲めに密迹の夙因を說て曰く、「賢劫の千佛中、最後の樓由佛に二弟子あり、法意法念といふ、一は金剛力士と爲りて千佛に侍衞せんことを願ひ、一は梵天となりて千佛の轉法輪を勸請せんことを願ふ、今の密迹は卽ち法意なり」と、次に寂意復た如來の三密を問ふ、密迹これに對して身密、口密、心密を說く、寂意又た密迹に請ふて如來の苦行、乃至轉法輪の事を說かしむ、佛、密迹の爲めに記を授け、又た菩薩の十事無瞋恚の法、八法心無恐懼及び四事得自在等を說く。

佛敎講義錄

淨居天子會第四（Svapna-nirdesa）佛、耆闍崛山に住して食後三昧に入りたまふ、大千震動し諸天來集す、時に金剛摧天子、偈を說て佛に問ひ奉るところあり、佛、爲めに菩薩の百八の夢相を說く。

無量壽如來會第五（Amitâyusha-vyûha）淨土眞宗正依の佛說無量壽經の異譯なり。

不動如來會第六（Akshobhyasya-Tathâgatasya-vyûha）この會六品より成る。

授記莊嚴品第一　佛、耆闍崛山にまし〳〵て千二百五十の比丘と俱なりき、舍利弗、往昔、菩薩發趣修行する被甲精進の功德を問ふ、佛、不動菩薩所發の種々の弘誓を擧てこれに答ふ。

佛說功德莊嚴品第二　具に妙喜世界諸の莊嚴の事を說く。

聲聞衆品第三　不動國聲聞無數なるを明す。

菩薩衆品第四　不動國菩薩の事を明す。

涅槃功德莊嚴品第五　不動佛入涅槃の後の所作の佛事幷に法住久遠なるを明す。

往生因緣品第六　種々の善根回向、彼刹に生ずることを得ることを說きて最後に付囑流通せしむ。

佛敎講義錄

被甲莊嚴會第七（Varmavyûha-nirdesa）佛、迦蘭陀竹園に住したまふ、時に無邊慧菩薩、偈を以て法を問ひ奉る、佛亦た偈を說て許したまふ、次で正しく被大甲冑に就て問ひ奉る、佛具にこれに答へたまふ、卽ち初一番の長行偈頌には諸の甲冑の名を列ね、第三番の長行偈頌にはこの甲冑無相無名破壞すべからざるを明し、第三番の長行偈頌にはその大乘に乘ずることを、第四番の長行偈頌にはその八正道に住することを、第五番の長行偈頌には發趣攝取正道の法を、第六番の長行偈頌には一々皆慧を以て先導と爲すことを、第七番の長行偈頌にはその隨て一切法に入り大に衆生を饒益することを、第八番の長行偈頌には古の栴檀香光明佛の時轉輪王あり、一切義成と名く、能くこの法を求めて既に超無邊境界王佛と成ることを明し、第九番の長行偈頌には諸法に於て法光明を得て諸見に墮せざることを、第十番の長行偈頌には、勝慧菩薩の問に因りて、行する所なくして行することを明し、第十一番には勝慧、頌を說て佛を讚し、誓願して法を受持することを說き、第十二番

には佛、偈を說てこれを讃成し、並に古の徧照佛の時、勇猛軍轉輪王、法を聞て受持し、既に無邊精進光明功德超勝王佛と成ること、次に無邊勝菩薩の問に因りて爲めに長行偈頌を說き、無住にして住するを如理住と爲すこと、次に無邊慧の問に因りて爲めに長行偈頌を說き、無所安立、無畏發趣の義を明し、又た往古、月燈王佛の時、雲雷、無邊音の二大士、この法門を聞て皆既に成佛せることを說けり、若し精勤修習するあらば當に一切法海印三昧を得べく、又た能く阿字等の諸三昧印を攝得すべしと、又た往古、超過須彌光王佛の時、勇猛軍、勇猛力の二大士あり、この法を受持して皆既に成佛す、一を無邊辨才と名け、一を最勝光明と名くと、次に慧義菩薩あり、法の希有を歎じ佛これを印成す、次に加持付囑して流通せしむ。

法界體性無分別會第八（Dharmadhâtu-hridaya-samvrita-nirdesa）佛、給孤獨園にまし〳〵て八千の比丘、萬二千の菩薩、三萬三千の天子と俱なりき、時に寶上天子あり、文殊の說法を請せんと念ず佛乃ち文殊に勅して法界の體性因緣を說かしむ、文殊、舍利弗と法界の體性に就て問答す、五百の比丘無漏心を得たり、文殊復た舍利弗と問答して無縛無脫の義を明かにす、二百の比丘文殊の所說を聞き、その深義を解する能はざりし爲め怫然として起ち去る、文殊乃ち一比丘を化作し諸比丘と問答せしめ、無漏解脫を得せしむ、次に寶上天子の問に答へて菩薩の六度淸淨、四念淸淨、如實授記等の義を明かにし、及び菩薩自在品を得ることを說く、諸天發心し世尊讃印す、又は天子と文殊

と種々問答して不生自在等の義を明かにす、五百の比丘無上道の記を得たり、次で又た寶上天子の爲めに記を授く、時に魔王波旬眷屬と共に來る、佛、神力を以て文殊と問答せしめ、又た魔をして變して佛身と作りて佛法を說かしむ、五百の菩薩無生法忍を得たり、次で又た舍利弗を變じて佛身と爲し魔と問答せしむ、諸比丘漏を斷じ諸天發心す、而して最後に佛光明を放ちて文殊及び阿難に此經の廣宣流布を付屬し、且つ此經をば法界體性無分別、亦は寶上天子所問、又は文殊師利童子所說と名くと說きたまひき。

大乘十法會第九（Dasadharmaka）佛、耆闍崛山にまし〳〵て五百の羅漢及び無量無邊の菩薩と俱なりき、時に淨無垢寶月王光菩薩あり、大乘の義を問ひ奉る、佛、十法を以て答へたまひき、曰く一に信成就、二に行成就、三に性成就、四に樂三菩提心、五に樂法、六に觀三正法行、七に行法愼法、八に捨慢大慢、九に善解如來秘密之敎、十に心不悋求二乘と。

文殊師利普門會第十（Samantamukha-parivarta）佛、耆闍崛山にまし〳〵て八百の比丘、四萬三千の菩薩と俱なりき、又た無垢藏菩薩、九萬二千の菩薩と普華佛國より來り、且つ他方世界より無量無邊の菩薩悉く集會す、時に文殊、普入不思議法門を說かんことを請ふ、佛爲めに二十八の三昧の名を擧げ一々に頌を以てこれを說示し、又た十四種の三昧の名及び功用を說く。

出現光明會第十一（Rasmiuirbhâra-sahgirathi）佛、耆闍崛山にまし〳〵て五百の比丘、八十那由

陀の補處の菩薩及び四十那由陀の大士と俱なりき、時に月光童子あり、「佛、昔、何等の業を修して能く是の如きの決定、攝取、廣大、清淨等種々の光明を得たまひしか」と問ひ奉る、佛、五言の偈を說て「我以不思議　善業因緣故　遠離諸迷惑　成就種々光」等と、具に光明の因を答へ、次に七言の偈を以て一々の光明の用を示し、次に四言の偈を以て月光の本事を說き、次に七言の偈を以て此經を愛樂する人と愛樂せざる人との差別を說き、及び受持の功德を明し、次に五言の偈を以て、「我昔爲是經　護持清淨戒　常修於定慧　及施諸衆生」等と、求經の因行を示し、及び「我以佛眼觀　明見未來世　隨其種々行　一切皆了知」等と、懸かに未來の事を知るを明し、次に八十種の善根資糧成就して光明を出現し、復た八十種の法ありて能く如來の無碍解脫を成ずることを說きたまひしに、月光童子は偈讚發願し、世尊は微笑放光し、彌勒は偈讚して廣く問ひ奉るところありき、次で世尊、月光の頂を摩して說偈付囑し、月光、佛を供養せんことを請ふ、佛これを容れて大神變を現じて法を說きたまひ、供養を受け終りて、爲めに施を行ずる資糧に八十種の殊勝功德あることと及び陀羅尼を成せんと欲する者は、當に八十種の人を遠離すべきことを說けり。

佛敎講義錄

菩薩藏會第十二（Bodhisattva-pitaka）この會十二品より成る。

開化長者品第一　佛、室羅筏國に安居し終りて、鷲峰山に詣りたまふ、賢守等の五百の長者、佛を路に見たてまつり頌を以て相好を讚し、且つ捨家の因を問ひ奉る、佛答ふるに、諸の衆生の十苦

十惱、十稠林、十毒箭、十愛、十邪、十不善業、十染汚法、十種の纏縛を觀ずるは、家を捨る所以なることを以てしたまふ、次で長者妙法を開かんことを願ふ、佛爲めに廣く根塵蘊界因緣等の法無我不實なることを說く、長者乃ち法眼淨を得、遂に阿羅漢を證しき。

金毗羅天授記品第二　城を護れる藥叉を金毗羅と稱す、佛に妙供を奉り且つ衆神おの〳〵僧に供を奉る、佛、金毗羅に無上道の記を授く、金毗羅乃ち道路を莊嚴し、佛に隨侍して鷲峰山に至る。

試驗菩薩品第三　舍利子、菩薩の法を問ひ奉る、佛答ふるに菩提心及び信欲具足を以てす。

如來不思議性品第四　詳に如來十種の不可思議法を說く、曰く、一に信受如來不思議身、二に不思議音聲、三に智、四に光、五に尸羅及び等觀、六に神通、七に力、八に無畏、九に大悲、十に不共佛法。

四無量品第五　過去無量劫に佛あり、大蘊如來と名く、精進行童子の爲めに大慈大悲大喜大捨の四波羅密を說くことを述ぶ。

陀那波羅密多品第六　具に五十種の淨行施、三十種の上妙の功德を明す。

尸波羅密多品第七　尸羅波羅密多を行する菩薩は、身語意三種の妙行を成ずること、十最勝法に安住すること、十種發心を具すること、人中天上おの〳〵四種廣勝處法を獲ること、乃至種々の四法を明し、次に五十種の淨尸羅を明し、次に過去最勝衆佛の時に得念菩薩あり、常に梵行を修して

既に娑羅王佛と成れることを明し、又た次に菩薩、清淨戒を行じ、應に衆生に於て父母の想を起すべきことを明し、並に欲の過失を訶す。

羼底波羅密多品第八　具に畢竟忍、非畢竟忍を說く。

毗利耶波羅密多品第九　菩薩、大精進を發して菩薩藏微妙の法門を求むること、智者能く十障礙法を覺知して隨轉せざること、及び三業精進の相を明し、次に在家出家の菩薩おの〳〵五損減の法あることを明し、次に往古に於ける律儀童子の精進行並に法行苾芻の精進行を說く。

佛教講義錄

靜慮波羅密多品第十　菩薩、四靜慮に依りて五通を發し遠く二乘に勝過し、及び種々の大定を得ることを明す。

般若波羅密多品第十一　先づ菩薩藏微妙の法門に趣入する聞相に四十一法あるを明し、次に如法聽聞し終りて能く解了し、解了して正行を起すの相を明し、次に如理の方便作意、如理の證入、如理の句、及び如理の正觀を明し、次に復た廣く十種の善巧を明し、次に妙慧及び到彼岸の義、五番十種の功德を明す。

大自在天授記品第十二　釋迦牟尼佛本生の事を說て曰く、往昔過去に大蘊如來あり、精進行童子の爲めに廣く四無量及び六度を說き終りて更に四攝法を說けり、然れども菩提の記を授けざりき、その時の精進行童子とは豈異人ならんや、我身是れ也、次に寶性如來出世したまひし時、善慧長者

あり、佛の說法を聞て善根已に熟し、大願を發し衆行を修せしかども、佛未だ大菩提の記を授けざりき、而してその善慧長者とは乃ち我身是れ也、次に放光如來に値ひ奉り、轉じて迷伽儒童と名けら る、佛所に詣り廣大の淨信を得、大供養を興して終に無上道の記を得たり、その迷伽儒童とは乃ち我身是れ也と、時に長者子那羅達多あり、是の如きの大菩薩藏微妙の法門を聞き終りて、大乘の意を發し、妻子眷屬樂土及び城中十千の人民と共に廣く供養を興して大乘の誓を立てき、佛爲めに大神變を現じ、三乘の記を授け且つ菩薩微妙の法門を受持すべきことを勸む。

佛爲阿難說入處胎會第十三　佛、給孤獨園にましませし時、阿難日晡に禪定より起ち五百の比丘と共に佛に見え奉る、佛爲めに入胎の因緣より說き起して、胎中に三十八七日を經ること、出胎後七日にして八萬の戶蟲身より生ずることを說き、以て五陰皆無常苦無我の相を詳にす、阿難法眼淨を得、五百の比丘悉く漏盡意解せり。

佛說入胎藏會第十四　難陀を度して出家せしめ、天宮地獄を見せしめ、且つ爲めに入胎住胎出胎の諸苦を說くこと最も詳密、又た三塗の劇苦を說て敎て四會處を修せしむ、難陀乃ち阿羅漢を證す時に大衆、難陀の宿因に就て疑を抱く、佛因りて具に難陀の本事を說けり。

文殊師利授記會第十五（Mañgusri-buddhakshetragu-navyûha）佛、耆闍崛山にまし〳〵て比丘千人菩薩八萬四千、諸天七十二億等と俱なりき、爾時世尊、大神通を現じて王舍城阿闍世王宮に向ひ、

途に菩薩長者子摧過咎の爲めに大悲の法を說て無上道の記を授け、次で王宮に入り供養を受けて山に還り、禪定より起ちたまふや天人雲集せり、舍利弗乃ち嚴淨佛刹の行を請問す、佛、神變を現じて更に十方無量刹中の諸大菩薩を集め、彌勒に命じて大法座を敷かしむ、而して舍利弗の爲めに一法より增して十法に至ること、及び種々の淨行因果相稱せることを說き、結ぶに三法を以てせり、曰く、大願殊勝、住不放逸、如所聞法起正修行これなり、次に四萬の菩薩に無上道の記を授く、次に師子勇猛雷音菩薩あり、「文珠何れの時に成佛し何の佛刹を得るや」と請問せるに對して、自から文珠に問はしむ、文珠乃ち第一義諦法界實相の理を說き、大衆をして益を獲せしむ、次に發心の久近を問ふ、佛、雷音佛の時に於る普覆王の事を述べて曰く、その時の普覆王とは今の文珠是れ也、而して王に隨從せる二十億の衆生皆文珠師利の勸發に由りて既に成佛し畢ると、次に復た將來の佛刹莊嚴を問ふ、佛、文珠に勅して自から昔の願を說かしむ、略して十節あり、佛因て記したまはく、佛を普見と名け刹を隨順積集淸淨圓滿と名く、所有の莊嚴遠く阿彌陀佛刹に勝ること大海を以て一滴水に比するが如し、唯、住最上願と名くる東方の普光常多功德海王佛刹のみ與に等くして異なること無し、及び東方光明幢、南方智上、西方諸根寂靜、北方願慧の四大菩薩ありて當にこの淨刹を得べしと、次で神力を以てこの大會上に東方普光常多功德海王佛刹を現じ、その莊嚴を見せしむ、隨て八萬四千の菩薩に無上道の記を授く、中に十六善大丈夫あり、文殊所發の大願の如く

大心を起して能く成滿すべし、餘の菩薩の所得の刹は皆阿彌陀佛刹の如しと、次に四大菩薩來會す文珠、諸菩薩をしておの〳〵一相法門を說かしむ、略して二十四人を叙す、而して最後に文珠成佛の劫數甚大久遠なりと雖、疲倦あること無きを示す。

菩薩見實會第十六（Pitâ-putra-samâgama）この會二十六品より成る。

序品第一　佛、尼居陀林にまし〳〵て迦盧陀夷を遣はし、父淨飯王を敎化せしむ。

淨飯王詣佛品第二　天龍八部同じく佛所に集る、王亦た來りて佛を禮し、偈を說て問答す。

阿修羅王授記品第三　毗摩質多等の十一の阿修羅王、六十那由他の眷屬と共に大供養を設けて受記を得たり。

本事品第四　大迦葉、如實三昧に入り、過去阿僧祇劫に於る如來所修の一切の功德を憶念し、偈を以て佛を讚す、佛爲めに不可說劫の昔に因陀幢王佛あり、恒沙の世界を以て一佛刹と爲し、刹土莊嚴淸淨なり、國中の衆生純ぱら正定聚なることを說き、而して諸比丘に「彼時の因陀幢如來とは是れ誰なるを知れりや」と問ひたまひしに、諸比丘默然たり、時に文珠菩薩、東方高威德王佛の所より、來りて因陀幢王佛卽ち釋迦佛なることを白す。

迦樓羅王授記品第五　龍女授記品第六　鳩槃茶授記品第八、乾闥婆授記品第九、夜叉授記品第十皆それ〳〵に授記せしことを說く。

緊那羅授記品第十一　大樹緊那羅王を上首とせる八億の緊那羅衆、諸法不可得、並に如來の授記に於て疑あり、佛具に答釋す、乃ち供養し奉りて記を授けらる。

虛空行天授記品第十二　四天王授記品第十三　三十三天授記品第十四　以上亦たそれ〴〵授記せられしことを說く。

夜摩天授記品第十五　四億の夜摩天衆あり、佛能く二諦を知りたまへるを嘆じて廣く供養を設け記を授けらる。

兜率陀天得授記品第十六　八億の兜率陀天自から思惟すらく、諸法空不可得、授記亦空不可得、但是れ世諦の言說にして夢の不實なるが如きのみと、斯く解了せる後、ます〴〵供養を設け佛を讚し奉りて記を授けらる。

化樂天授記品第十七　化樂天王を上首として其眷屬七億、異口同音、佛に白して曰く、「一切法は是れ實際無二なり、一法として實際に非ざるはなし」と、佛爲めに記を授く。

他化自在天授記品第十八　他化自在天王を首として其眷屬八十那由他の諸天衆等、異口同聲に白して曰く、「化樂諸天實際を說く、而るに我等尙ほ實を見ず、況んや復た際を見んや、彼の法知るべきに非ず、乃至、修すべきに非ず、證すべきに非ず」と、而して記を授けらる。

諸梵天等授記品第十九　六千萬の諸梵天、皆悉く定心淸淨にして分別の心を離れたり、乃ち偈を

說て佛を讚し、無上道の記を授けらる。

光音天等得授記品第二十　五十八千萬の光音諸天、照耀一切法三昧を說き、及び偈を以て佛を讚し、無上道の記を得たり。

遍淨天授記品第二十一　十二那由他の遍淨諸天等、超過一切法三昧を說き及び偈を以て佛を讚し無上道の記を得たり。

廣果天授記品第二十二　八億の廣果諸天、無量門陀羅尼を說き、及び偈を以て佛を讚し、無上道の記を得たり。

淨居天子讚偈品第二十三　淨居諸天子四百五十三人各々偈を說て佛を讚す。

遮羅迦波利婆羅闍迦外道品第二十四　八千の外道請問して疑を決す、佛、六道受生の習氣及び對治の法を說く、外道無生忍を悟り偈を以て佛を讚し記を得たり。

六界差別品第二十五　佛、淨飯王の爲めに內外の六界皆是れ假名にして來なく去なし、及び諸根は幻の如く境界は夢の如く、順違中庸の三種皆六塵三解脫門を具することを說く。

四轉輪王品第二十六　過去に四轉輪王あり、一に無量稱王、二に地天王、三に頂生王、四に尼彌王これなり、この中、無量稱、地天、頂生の三王は貪求厭足なきを以て遂に大苦を招き、獨り第四の尼彌王のみは不放逸を以て大益を成せしことを說て曰く、「四王豈異人ならんや、我身是れ也」と

次で淨飯王に勸めて不放逸を修せしめ、且つ一切法無生陀羅尼門、及び不滅等の六十七法門を觀せしむ、七萬の釋種無生法忍を得たり、佛記したまはく、皆安樂世界に生じて後に成佛すべしと、最後に舍利弗に囑して受持流通せしむ。

富樓那會第十七（Pûrṇa-pariprikkhâ）この會八品より成る。

菩薩行品第一　佛、王舍城竹園に住したまふ、富樓那問ふて曰く「菩薩如何にして多聞を修習し且つ不退轉を得べきや」と、佛答ふるに精進、忍辱、正道、深心の四大希有の事を以てし、次で又た四法ありて喜心を生ずること、及び四法ありて難を難るゝことを得と說けり。

多聞品第二　富樓那に對して四法能く多聞を集むることを明す。

不退品第三　四法能く不退轉を得ることを明し、且つ古の那羅延法師及び摩訶耐摩陀比丘、法を弘むる事を說き、次に四法ありて菩提を退失し聲聞乘となること、幷に戒淸淨、念成就、勤精進、多聞慧の四法能く菩提善根を退失せざることを說く、又た持戒、忍辱、精進、多聞の四法は菩提を利益し、行慈、供佛、供法、供僧の四法は身色、財物、眷屬を具足すと。

具善根品第四　四法に親近すれば能く一切の善法を攝することを明す、曰く、忍辱、出家、頭陀近善知識これなり。

神通力品第五　一々の毛孔より大光明を放ち、大神力を現じたる後、此經を以て阿難に付囑し、

及び竹園の功德を讃す。

大悲品第六　目連の問に因りて廣く因中大悲の行を說く。

答難品第七　象手比丘の問に因りて廣く衆生性空、佛亦不滅なることを明す。

富樓那品第八　富樓那、佛の所說を聞き、歎述流通す。

護國菩薩會第十八（Rashṭrapāla-pariprikkhâ）　佛、耆闍崛山にまし〳〵て千二百五十の比丘、五千の菩薩及び一切八部と俱なりき、時に喜王菩薩、偈を以て佛を讃したてまつれる後、法界を觀察す、護國菩薩、諸の初學の比丘と共に來りて佛に見わ偈を以て佛を讃し、且つ菩薩の法要を問ふ、佛答ふるに四法能く淸淨の事を成ずるを以てす、曰く、眞實無諂、行於平等　心念行空　如言而行の四法これなり、次にもろ〳〵の四法を說て曰く、(一)得陀羅尼　(二)値善知識　(三)得深法忍　(四)戒行淸淨これを四種無畏の法とし、一見佛　二聞法　三捨一切　四順法忍の四功德は心をして歡喜せしめ、(一)居家　(二)利養　(三)檀越　(四)身命の四法は應に棄捨すべく、(一)不破戒　(二)住阿蘭(三)四聖種　(四)多聞これを四種無悔の法と名け、(一)願値佛　(二)供師長　(三)樂空閑　(四)頭陀忍を四調伏の行と名け、(一)無憤恨　(二)捨所有　(三)不求果報　(四)不見師過の四法は菩薩の行を淨ふし、(一)不恭敬他　(二)背恩諂曲　(三)多求名利　(四)詐善揚德これを四墮落の法と名け、(一)懈怠　(二)不信　(三)我慢　(四)瞋恚を四障道の法と名け、(一)惡知識　(二)執見人　(三)謗法人　(四)貪利養人の

四種の人には親近するを得ざれ、又た（一）輕慢智人（二）懷嫉妬心（三）於法無信（四）無忍求利の四法は未來の苦を受け、（一）輕慢他（二）世俗定（三）行放逸（四）求利養これを四繫縛の法と名くと、而して次に七言の偈を以て廣く佛本生の妙行及び末世不如法の事を明し終りて結益付囑す。

佛教講義錄

郁伽長者會第十九（Ugra-Rashtrapâla）佛、祇陀林中給孤精舍にまし〳〵て千二百五十の比丘、五千の菩薩と俱なりき、時に郁伽等の十長者おの〳〵五百の長者と共に佛に見ゐて在家出家二種の菩薩の行法を問ふ、佛先づ廣く在家の三歸五戒法の義、及び布施の功德、家を厭離する想、晝夜六時に於る悔過幷に隨喜勸請、出家を希慕し、衆僧を供養することを說き、次に出家の四種を說く、曰く頭陀、淨戒、淨定、淨慧これなり、次に菩薩、在家の地に住し、出家の戒を學することを問ふ佛五法を以てこれに答ふ、曰く施不望報、不習欲想、修禪不證、學慧行慈、護法勸他これなり、而して最後に說て曰く、郁伽長者、在家地に住し是の劫中多くの衆生を化するの功德は、百千出家の菩薩も及ばざる所なりと。

無盡伏藏會第二十、佛、耆闍崛山にまし〳〵て千の比丘、五百の菩薩及び天龍八部と俱なりき、時に電德菩薩、速に菩提を成ずるの法を問ふ、佛答ふるに五大伏藏を以てす、謂く貪行伏藏、瞋行伏藏、癡行伏藏、等分行伏藏、諸法伏藏これなり、法伏藏の中に於て過去寶聚功德聲佛の時に於る

廣授大王の事を說き、深く戒めて害心を生ずること勿らしむ、又た勝生佛の時、旃陀羅法を聞て無生忍を得たること幷に牛法を聞て兜率に生ずることを得たることを示して衆生の根行測り難きを明す、次に月幢菩薩無功用智の問に答ふ、地動雨華の瑞顯はる、而して最後に阿難に對して此經を無盡伏藏又は說一切法無差別相と名くと說けり。

授幻師跋陀羅記會第二十一（Bhadra-māyākāra-vyākaraṇa）佛、耆闍崛山にまし〳〵て、千二百五十の比丘、五千の菩薩、及び天龍八部と俱なりき、時に王舍城に幻師あり、跋陀羅と名く、善く異論に閑ひ呪術を善くす、乃ち佛及び比丘衆を欺誑せんと欲し、耆闍崛山に詣して、「願はくば明日我が微供を受けたまへ」と請ふ、佛、默然これを受けたまふ、幻師還りて其夜、王舍城の穢處に於て道場を化作す、然るに四天王、帝釋おの〳〵來りて亦た道場を化作し、種々莊嚴の具を變現して幻師の所化に倍す、是に於てか幻師驚悔の念を生じ、己が所化を隱沒せんと欲すれども能はず、翌日、如來、彼の幻師の道場に入り大神變を現じたまふや、幻師憍慢を捨てゝ悔過發露す、時に世尊、幻師に告げたまはく、「一切衆生及び諸資具は皆是れ幻化なり、謂く業の所幻に由るが故に、諸比丘衆亦た是れ幻化なり、謂く法の所幻に由るが故に、我身亦た幻智の所幻なるが故に、三千大千一切世界、亦た皆是れ幻なり、一切衆生共に幻する所なるが故に、凡る所有の法これ幻に非ざることなし、因緣和合の所幻なるが故に」と、既にして世尊、一切處に佛身を現ず、幻師これを見奉りて便ち念

佛三昧を得、偈を以て法を問ひ奉る、佛亦た偈を以て答ふ、次で幻師、佛に隨侍して耆闍崛山に至り、菩薩の道を請問す、佛爲めに四十三種の四法を說きたまふ、幻師卽ち無生忍を證して記を得たり。

大神變會第二十二（Mahāpratihāryopadeśa）佛、給孤獨園にまし〳〵て、千二百五十の比丘、八千の菩薩と俱なりき、商主天子、佛に問ひ奉りて曰く、「如來、幾種の神變を以て衆生を調伏したまふや」と、佛答ふるに說法、敎誡、神通の三種を以てす、商主天子又た重ねて「これに過ぐるの神變有りや否や」と問ひ奉る、佛、文殊に問はしむ、文殊答へて曰く、「無言說の法に於て言說を作し、而かも一切の言說實に說くところなきを大神變と名く」と、次に舍利弗、商主の往因を問ふ、佛、答ふるに、過去、等須彌佛の時の淨莊嚴王の本事を以てす、舍利弗、文殊と商主と共に久しく梵行を修し、多く佛を供養し、諸善根を種ゆることを歎ず、文殊爲めに三種決定の義を說く、次て佛、商主を讚じ大神變と名くる法を說きたまへる後、文殊又た商主の問に答へて菩薩智を詳說し、更に菩薩、摩訶薩、殊勝衆生、淸淨衆生等に就ての四十二問、及び諸の菩薩行に就ての問に答ふ、時に五百の菩薩、無生法忍を得たり、而して最後に、佛、商主の無生法忍の義を問へるに答へ、現瑞授記したまひき。

摩訶迦葉會第二十三（Mahākāśyaki）佛、給孤獨園にまし〳〵て、五千の比丘、八千の菩薩と俱なりき、時に迦葉問ふて曰く、「出家の者當に云何か學び、云何か行じ、云何か觀を修すべきや」と、

佛爲めに持戒念佛を說き、及び出家するは二事の爲めなり、一には現に道果を得んが爲めなること、二には未來の佛を見奉らんが爲めなることを說き、次で廣く沙門の四賊及び種々の過を明す、迦葉、佛の久しく世に住したまはんことを乞ふ、佛、久しからずして當に入涅槃すべきを告げ、次で迦葉の言に從ひて、滅後に於る正法護持の大任を彌勒に付囑す、佛、彌勒に對し、「汝當に佛法僧寶を守護して斷絕せしむること勿れ」と告げ、その頂を摩したまふや、大千震動し、諸天勸請す、時に彌勒菩薩、世尊に請ふて曰く、「願はくば世尊、當來の世、愚癡の輩、自から菩薩と稱し、沙門と稱して種々の過を爲すことを說きたまへ」と、佛爲めにこれを說き、更に往昔、智上佛の時に於る樂精進菩薩の行化を說きて、深く法施の功德を顯はし、次に菩薩二十の法業、四種の畢定、及び離薩婆若の四法、應急捨離の四法を明し、又た餘の菩薩に對して瞋恚を起せば、其罪甚だ大なることを示す、是に於て彌勒、獅子吼を作し、會上五百の比丘、自から信施消し難きを愧ぢて歸俗せんと欲す、文殊これに對して說法敎誡し、諸漏中に於て解脫を得せしむ、既にして迦葉復た末世の菩薩諂曲の過を說かんことを請ふ、佛、往古、妙華佛の時、達磨、善法の二童子の事を說きて懇切に勸誡し、更に破戒の身を以て袈裟を着すべからざること、及び古の光明佛の時、大精進菩薩、佛の畫像を觀して五通を成就し、說法敎化して大利益を施せしことを說き、以て末世の出家、利養の爲めに如來の形像を造立し、白衣に對してこれを衒賣することを誡めたまひき。

優波離會第二十四（Vinayaviniskaya-Upâli-paripriikkha）佛、給孤獨園にまし〳〵て、千二百五十の比丘、五百の菩薩と俱なりき、時に佛、「誰か能く末世に於て正法を護持し、衆生を成熟せんや」と問ひたまふ、彌勒、無盡意、跋陀羅等、五十五の菩薩、相次で座より起ち、おの〳〵能く堪任することを白す、舍利弗、是の如きの諸菩薩、勇猛の弘誓を聞き、未曾有と歎ず、佛これを印可し、更に諸菩薩の說法度生を讃じ、幷に破戒の菩薩、應に三十五佛の前に於て殷重に懺悔すべきことを說きたまふ、時に優波離、禪定より起ちて、廣く決定毗尼を說きたまはんことを佛に請ふ、佛爲めに聲聞菩薩持犯の不同を分別解說し、次に文珠に勅して究竟毗尼を說かしむ、佛又た優波離の問に對して廣く聲聞菩薩增上慢の相を示し、偈を說て結持す。

發勝志樂會第二十五（Adhyâsaya-saṁkodana）佛、鹿苑にまし〳〵て、千の比丘、五百の菩薩と俱なりき、時に諸の菩薩、業障深重にして疑惑退轉するあり、彌勒菩薩これを見て、爲めに法要を說き歡喜せしむ、遂に六十の菩薩と共に佛所に詣す、佛、乃ち諸菩薩の五體投地流淚禁せざるを見て、告げたまはく、「善男子、汝等、往昔、法師を誹謗する惡業に因りて多く衆苦を受く、然れども多生を經歷して諸業障滅するの後、當に阿彌陀佛極樂世界に生ずるを得べし」と、時に諸菩薩深く憂悔を生じ、次で十三の弘誓を發す、佛これを印可したまふ、次に彌勒問ひ奉りて曰く、「末世の菩薩、幾ばくの法を成就して安穩得脫すべきや」と、佛答ふるに二種の四法を以てしたまふ、曰く、不求

他過失、亦不擧人罪、離麤語慳惱、是人當解脫と、又た曰く、當捨於懈怠、遠離諸憒鬧、寂靜常知足、是人當解脫と、次に深く憐愍を生じ、無希望の心を以て法施を行すれば、當に二十種の利益を成就するを得べしと說き、又た末世に於る種々の過惡を明し、慧行の菩薩と初業の菩薩との不同の相を明し、幷に初業の菩薩は、當に利養の過を觀察すべく、又た當に憒鬧に二十の過あり、世話に二十の過あり、睡眠及び衆務に耽着するに、おの〳〵二十の過あることを觀察すべしと誡め、且つ諸行を修せず、煩惱を斷せず、禪誦を習はず、多聞を求めざる者は、出家の人に非ざることを示し、最後に戲論の過に二十あること、及び十種の心を發せば、能く極樂世界に生ずることを得と說きたまひき。

善臂菩薩會第二十六（Subâhu-paripriikkhâ）佛、王舍城迦蘭陀竹園にましまして、善臂菩薩の爲めに、廣く六波羅蜜を具足成就すべきことを說きたまひき。

善順菩薩會第二十七（Surata-paripriikkhâ）佛、給孤獨園にまし〳〵て、五百の聲聞、十千の菩薩と俱なりき、時に舍衞城に菩薩あり、善順と名く、恒に五戒八齋を以て衆生を敎化し、且つ勸めて六度四等心を修せしむ、帝釋この菩薩を見て試驗せんと欲し、便ち種々の身を化作し、來りて罵詈危害を加へ、或は種々に誑惑せしかども、遂に破戒せしむること能はず、たま〳〵善順菩薩、劫初の時の閻浮金鈴を得たり、その價直閻浮提に過ぐ、菩薩この金鈴を持ち四衢中に於て唱へて曰く、「こ

の舍衞城に於て誰か最も貧窮なりや、吾れ當にこの鈴を施與すべし」と、時に最勝耆舊長者あり、走り來りて曰く、「吾れ最も貧窮なり」と、菩薩曰く、「汝、貧者に非ず」と、長者曰く、「誰か最も貧なりと思へるか」、菩薩曰く「波斯匿王この城中に於て最も貧なり」と、乃ち偈を說て曰く、

佛敎講義錄

設有伏藏千億餘　以貪愛心無厭足　猶如大海呑衆流　如斯愚人最爲貧　由此復令貪增長　展轉滋蔓相續生　於現在世反未來　彼無智者常貧匱

と、次で菩薩、波斯匿王の所に詣り鈴を奉與して曰く、「王既に貧窮なり、願はくば我が爲めにこれを受けよ」と、王時に五百餘人と共に庫藏財寶を計算す、この語を聞て慚愧の念を生じ、菩薩に問ふて曰く「誰か我貧を證するや」と、菩薩便ち佛に向ひて證を請ふ、佛、五百の聲聞、十千の菩薩及び天龍八部等と地より涌出して爲めに證明を作し、更に告げたまはく、

大王當知　或有於法　善順貧窮　王爲貧窮　或有於法　王爲貧窮　善順富貴　所以者何身登王位　於世自在　金銀摩尼　硨磲珊瑚　庫藏盈滿　當於此時　善順貧窮　王爲富貴勤修梵行　樂淨尸羅　捨家多聞　離諸放逸　八齋五戒　弘濟無疲　有一於此　王實貧窮　善順富貴　王今應知　憍薩羅國　一切衆生　財物庫藏　比於善順　五戒八齋　堅固清淨百分千分　不及其一　至俱胝分　亦不及一

と、王便ち憍慢を捨てゝ無上大菩提心を起せり、次で佛、衆人に對して三無量功德資糧を說き、復

た三十二法ありて能く勤修する者は、則ち如來を見たてまつると爲すことを示す、大衆同じく無上道心を發す、時に波斯匿王、二衣の價直百千兩金なるものを以て善順に施す、善順受けず、王更に善順のこれを踏まんことを求め、次でこれを城中の貧窮に施し、諸貧窮おの〳〵益を得たり。

佛敎講義錄

勤受長者會第二十八（Viradatta-paripṛikkhâ）佛、給孤獨園にまし〳〵て、千二百五十の比丘、五百の菩薩と俱なりき、時に長者あり、勇猛授と名く、五百の長者と共に佛所に詣し、「菩提を求むる者、應に云何か學び云何か住し云何か修行すべきや」と請問す、佛答へたまはく、「善哉々々、汝等無上菩提に發趣す、諸菩薩の如く、應に學び、應に住し、應に修行すべし、當に身命財及び妻子倉庫舍宅飲食衣服等に於て著する所なかるべし、何を以ての故に、諸の衆生、身に執著するを以て惡業を生ず、若し衆生に於て大悲心を起せば、身命財に於て則ち執著せず、この故に菩提を志求する者は、應に諸衆生に於て大悲を起し大捨を修すべく、而して持戒清淨にして忍辱を具し、精進にして身命を惜まず、禪定に安住して智慧を修すべし」と、長者復た白さく、「我等、身及び妻子等に於て心常に愛惜す、云何か觀察すれば、身命財に對して能く貪悋なきを得るや」と、佛爲めに身の無量の過患を觀すべきことを敎へ、次で四十四種の觀身を說く、長者、無生忍を得、偈を說て菩提心を歎ず、佛爲めに記を授く。

優陀延王會第二十九（Udayâna-vatsarâga-paripṛikkhâ）佛、拘睒彌國瞿師羅園にまし〳〵て、千二百

五十の比丘と俱なりき、時に優陀延王、第一の夫人を舍摩と名く、常に如來及び諸聖衆に於て恭敬供養す、第二の夫人を帝女と名く、常に諂妬の心を懷きて王に誣告す、王極めて瞋怒し、箭を以て三たび舍摩夫人を射る、舍摩慈三昧に入るを以て、放つところの箭還て王の頂上空中に住し、燄赫火聚の如し、王乃ち驚悔して舍摩夫人に問ふて曰く、「汝は天女なるか、龍女なるか、又た羅刹女なるか」と、夫人曰く「天女に非ず、又た羅刹女に非ず、我れ佛所に於て正法を聽受し、五戒を受持して優婆夷と作る、大王を哀愍して慈三昧に入るが故に傷損なきを得るのみ」と、更に王に勸めて佛に見わ罪を懺せしむ、王因つて女人の過患を問ふ、佛曰く「應に先づ丈夫の過患を知るべし、然る後、女人の過患を觀察すべし」とて、爲めに廣く丈夫四種の愆過を說く、王遂に三歸を受けて優婆塞となりき。

佛教講義錄

妙慧童女會第三十（Sumati-dârikâ-paripṛikkhâ）佛、耆闍崛山にましまして、千二百五十の比丘、十千の菩薩と俱なりき、時に王舍城に長者の女あり、妙慧と名く、年始て八歲、面貌端正、諸相具足、曾て過去無量の諸佛を供養して善根を種ゆ、便ち佛所に詣して法を問ひ奉る、佛爲めに四十の行を說く、女、大誓願を發す、動地雨華の瑞あり、次に文珠の諸問を答ふ、文珠、佛に向てこれを讚ず、佛、因つて此童女菩提心を起してより三十劫を經て、然して後、佛始めて發心することを說く、童女又た大誓願を發し、卽ち轉じて三十歲知法の比丘の如し、衆會益を獲たり。

恒河上優婆夷會第三十一（Gaṅgottaropâsikâ-paripṛikkhâ）佛、給孤獨園にましませし時、舍衞城に優婆夷あり、恒河上と名く、來りて佛足を禮し、佛と第一深義を問答す、佛爲めに記を授く。

無畏德菩薩會第三十二（Asokadattâ-vyâkaraṇa）佛、耆闍崛山にまして、五百の比丘、無量無邊の菩薩、及び八千の大菩薩と俱なりき、舍利弗等、城に入て乞食し、阿闍世王の宮殿に至る、王に女あり、無畏德と名く、年始めて十二、安坐して起たず、王起ちて佛弟子を迎へしめんと欲すれども、種々に聲聞を彈訶して起たず、舍利弗目連往て問ふ、皆屈服せらる、又た誓願を以て諸聲聞を して香象世界の放香光明如來を見ることを得せしめ、次に大迦葉の問に答へ、須菩提の問に答へ、羅睺羅の問に答へ、父王の問に答ふ、人天益を獲たり、然して後、牀を下りて聲聞を禮敬し、妙飲食を施し、同じく佛所に至りて丈夫身を現ず、佛授記を與ふ、幷にその母月光夫人に無上道の記を授く。

無垢施菩薩應辨會第三十三（Vimaladattâ-paripṛikkhâ）この會五品より成る。

序品第一、佛、給孤獨園に遊び、千の比丘、萬二千の菩薩と俱なりき、文珠等の八大菩薩、舍利弗等の八聲聞おの〳〵勝願を起し城に入りて乞食す、時に波斯匿王の女を無垢施と名く、年始めて八歲、五百の婆羅門と共に城外に出でゝ天像を浴洗す、婆羅門、諸比丘の門外に立てるを見て以て不吉と爲す、無垢施曰く、「我れ初生七日にして三寶の功德を聞くことを得たり、爾來、恒に睡眠せず、

又た欲覺瞋覺害覺なし、聽法厭足なく、供衆倦むことなし」と、卽ち進んで菩薩聲聞の所に到りその足を頂禮す、王亦た隨ふて至る。

聲聞品第二　無垢施、八大聲聞に對して第一義諦を問ふ、皆答ふること能はず。

菩薩品第三　無垢施又た次第に八菩薩と種々に深義を問答し終る、時に大德須菩提、諸聲聞菩薩に向つて曰く「無垢施女の所說、卽ち是れ智者の法食なり、我等今日法食を樂しむ、搏食を須ゐず、宜しく還るべし」と、遂に同じく佛所に還る、無垢施女卽ち偈を以て佛に菩薩の諸行を問ひ奉る。

菩薩行品第四　佛爲めに十八種の四法を說く、女卽ち誓を發して奉行す、動地雨華の瑞あり、天樂自から鳴る、女又た誠實の願を發し、卽ち女身を變じて十六の童子と成る、佛、阿難に告げたまはく、「この無垢施菩薩、菩薩行を修せしより六十劫を經て、文殊發心せるなり」と。

授記品第五　佛、無垢施菩薩の爲めに菩提の記を授く、及び五百の婆羅門に記を授く。

功德寶華敷菩薩會第三十四（Gunaratnasaṅkusumita-pariprikkhā）佛、耆闍崛山にましまして、大比丘衆千二百五十人と俱なりき、復た無量の諸菩薩あり、時に開敷功德寶華菩薩、佛に問ひ奉りて曰く、「佛名を受持して速に無上菩提を證するを得べきや」と、佛爲めに十方の佛號及び受持の功德を說く、東方無量功德寶莊嚴威德王如來　南方功德寶勝莊嚴威德王如來　西方一切法殊勝辯才莊嚴如來　北方積集無量辯才智慧如來　東南方千雲雷吼聲王如來　西南方最上妙色殊勝光明如來　西北方

種種勝光明威德王如來東北方無數劫積集菩提如來　上方虛空吼聲淨妙莊嚴光明照如來　下方一切法門神變威德光明照耀如來。

善德天子會第三十五（Akintyabuddhavishaya-nirdeśa）佛、給孤獨園にましまして、千の比丘、十千の菩薩幷に欲色の諸天子と俱なりき、佛、文殊に勅して天衆の爲めに諸佛甚深の境界を說かしむ、所謂、平等、無依、無數、無得等なり、次に善德天子の請に因りて大神變を現じ兜率天に往き、諸天の爲めに說法す、四種の法あり、菩薩不放逸に住すれば則ち能く一切の佛法を攝取することを得一には戒律に住して多聞を具す、二には禪定に住して智慧を行ず、三には神通に住して大智を起す四には寂靜に住して常に觀察す、これを四種の法となすと、又た八種の八法を說き、更に又た不放逸に依れば、三樂を損せず、三苦を離るゝことを得て、三長三有を超ゑ、三垢を離れ、三學を滿て波羅蜜の三障を離れ、波羅蜜の三伴助を得ることを說き、次に正勤會處如意根力覺道等の法を觀察することを示し、又た次に善德天子の請に因り、大光明を放ちて上方普賢佛刹を照らす、この佛刹に持法炬菩薩あり、兜率天に來り、遂に文殊と同じく佛に見ゑ奉る。

善住意天子會第三十六（Sushthitamati-pariprikkhā）この會十品より成る。

緣起品第一　佛、耆闍崛山に住したまひ、六萬二千の比丘、四萬二千の菩薩、及び天龍八部と俱なりき、時に文殊菩薩、無諍除心三昧より起ち、十方佛土六種震動す、次で又た普光無垢莊嚴三昧に

佛教講義錄

入り大光明を放ちて十方世界を照し、十方無量の菩薩をして娑婆世界釋迦牟尼佛の所に雲集せしめ皆隱身三昧に入る、是に於てか摩訶迦葉偈を說て佛を讃じたてまつり、かくの如きの放光現瑞は何の因緣なるやを問ひ、更に如何なる善根功德を修して菩薩能く隱身三昧に入るやを問ふ、佛答へたまはく、「十法を成就すれば能く隱身三昧に入るを得べし」と、次で迦葉、舍利弗、須菩提等、おの〳〵二萬三萬四萬の諸三昧門に入りて、彼の隱身の諸菩薩を求めしかども終にその微相だも見るを得ざりき、文殊又た化佛及び諸菩薩を遣はして、徧く諸天を勸召す。

開實義品第二　文殊と善住意天子と問答し、共に深法を對揚す。

文殊神變品第三　善住意と文殊と俱に佛所に詣せんとて、まづ見佛の義を問答し、以て佛所に往く善住意は先きに發して後に至り、文殊は後に發して先きに至る、時に會上のもろ〳〵の化菩薩偈を說て佛を讃じたてまつり、大衆益を獲、大地六種震動せり。

破魔品第四　文殊、破散諸魔三昧に入る、卽時に三千大千世界百億の魔宮暗冥にして震動し、衰相忽ち現はる、諸魔恐怖して佛に歸したてまつる、次で文殊、佛の問に答へて、二十種の法、並に六種の四法を具足成就すれば、能くこの三昧を得ることを說けり。

菩薩身行品第五　迦葉、彼の隱身の諸菩薩を見たてまつらんことを願ふ、佛、文殊をして諸菩薩を顯現せしむ、時に文殊、佛に問ふて曰く「如何が名けて菩薩摩訶薩となす、菩薩といふは何の義ぞ

や」と、佛答へたまはく「能く一切法を覺了するを以て菩薩と名く、所謂、一切法を覺了すとは、一切諸法本性空寂無所有なるを覺すると共に、覺知の念をも生ずることなきをいふなり」と。

破菩薩相品第六　佛、文殊、舍利弗、迦葉、善住意等、種々に問答して、菩薩初發心の義、無生忍の義、超越轉入諸地の義を明かにす。

破二乘相品第七　文殊と善住意と問答して、眞の出家、持戒、頭陀、禪行等の義を明かにし、及び聰辨利智、得陀羅尼等に就て空無相甚深の法門を述ぶ、五百の比丘、甚深の法義を信解すること能はざりし爲め、却て大恐怖を生じ誹謗心を起して地獄に墮す、佛、舍利弗に告げたまはく、「この五百の比丘、地獄に墮すと雖も、後に出でゝ速かに涅槃を證せん、何を以ての故に、かくの如きの甚深の法門を聞くを以ての故なり」と。

破凡夫相品第八　文殊と善住意と問答して、修梵行の義を明かにし、以て一切の取著を離るゝを修梵行と名くべきことを示し、且つ眞沙門の義を述ぶ。

神通證說品第九　文殊、善住意の爲めに如幻三昧に入る、及び五百の五通の菩薩の爲めに、劍を執りて佛を害するまねして以て彼の分別の心を除き、無生法忍を得せしむ。

稱讃付法品第十　佛、文殊に告げたまはく、「この修多羅甚深の法門は、卽ち是れ三世諸佛世尊の要道なり」と、文殊、かくの如きの經を護持して末世に流布燦然ならしめんことを佛に願ひ奉る、時

に地動雨華の瑞あり。

阿闍世王子會第三十七（Sinlha-paripṛikkhâ）佛、耆闍崛山に住したまひ、千二百五十の比丘と俱なりき、時に阿闍世王の子、名は師子、その同友五百人と俱に佛所に詣り、合掌恭敬し、偈を以て法を問ひ奉る、佛亦た偈を以て答ふ、問答おの〳〵十六頌あり、佛爲めに授記す。

大乘方便會第三十八（Gñânottara-bodhisattva-paripṛikkhâ）佛、給孤獨園にまし〳〵て、八千の比丘、萬二千の菩薩と俱なりき、時に智勝菩薩、佛に問ひ奉りて問く、「何等をか菩薩の方便と爲す、如何にして菩薩摩訶薩は方便を行ずるや」と、佛具さにこれに答へ、且つ衆尊王菩薩、女人と同じく座せる事、過去の樹提梵志、十二年間女人を攝受せる事、無垢比丘、暴雨に遇ひて寒慄恐怖せる女人を、自身所住の窟中に休息せしめたる事、幷に愛作菩薩、德增女を度する事を說て曰く、是れ皆菩薩の行方便なり、行方便の菩薩は、可意五欲の中に於て娛樂する相を現ずと雖も、五欲に戀著するに非ず、唯是れ化他の爲めなるのみと、こゝに於て阿難、諸菩薩行方便の德を歎じて曰く、「菩薩は須彌山の如し、諸雜色その邊に至れば同一金色なり、若し衆生ありて菩薩の邊に至れば、若くは瞋心、若くは淨心、若くは欲染心、一切悉く皆同一薩婆若色なり、又た菩薩は藥王の如し、彼の藥能く一切の諸毒を除く、菩薩は能く一切貪恚痴の病を除く」と、迦葉亦た空澤大城の喩を說て菩薩の德を讚ず、次に德增菩薩の問に答へて、佛爲めに具に八相十惱等一切の方便を示現して衆生を

化度したまへることを說けり。

賢護長者會第三十九（Bhadrapâla-śreshṭhi-paripṛikkhâ）佛、迦蘭陀長者竹園にまし〳〵て、千二百五十の比丘と俱なりき、時に最大巨富長者の子、名は跋陀羅波梨（譯して賢護といふ）、一千の眷屬と俱に來りて世尊を禮し奉り說法を請ふ、佛先づ阿難の爲めに、具さに賢護長者の受くる所の樂果帝釋も及ぶこと能はず、たゞ眞月童子のみこれに勝ることを說き、次で長者の宿因を說て曰く、古の樂光佛の時、大法師となりて未聞を開示せる法施の因緣を以て、九十一劫恒に天人に生れて端正富貴なりと、長者乃ち衆生の神識、その相貌、その轉移、及び此世他世作受等の義を問ふ、佛具さにこれに答ふ、又た一長者童子あり、眞月と名く、佛に問ひ奉りて曰く、「色及び欲取、見取戒取、云何が須く觀ずべきや」と、佛亦たこれに答ふ、次に大藥王子菩薩あり、佛に問ひ奉りて曰く、「神識この身より移りて當に何の色あるべきや」と、佛答へたまはく、「幻師の火の如く、人の水內の影の如く、風輪の定まることなきが如く、定色あることなし、衆生の眼に虛空等を見るが如し」と、幷に受罪受福等の事を問答す、次に又た賢護の「何をか聚と名け、何をか積と名け、何をか陰と名け何をか移と名くるや」の問に對して具さに答へたまひき。

淨信童女會第四十　佛、給孤獨園にまし〳〵て、五百の比丘、八千の菩薩及び賢劫の諸菩薩、文殊等の六十人、賢護等の十六の大士、二萬の兜率天子と俱なりき、時に波斯匿王の女を淨信と名く

五百の童女と俱に佛に詣して法を問ふ、佛答ふるに菩薩の修行すべき十二種の八法を以てす、又た二種の八法ありて能く女身を轉ずべきことを說く、次で淨信及び五百の童女俱に授記を得たり。

彌勒菩薩問八法會第四十一（Maitreya-paripṛikkhâ-dharmâsîta）佛、耆闍崛山に住したまひ、千二百五十の比丘、十千の菩薩と俱なりき、時に彌勒菩薩問ふて曰く、「幾法を成就すれば速に菩提を得べきや」と、佛答ふるに八法を成就すべきを以てす、一に深心、二に行心、三に捨心、四に善知三廻向方便心、五に大慈心、六に大悲心、七に善知方便、八に般若波羅蜜これなりと。

彌勒菩薩所問會第四十二（Maitreya-paripṛikkhâ）佛、施鹿林中にまし〳〵て五百の比丘、一萬の菩薩と俱なりき、時に彌勒菩薩問ふて曰く、「菩薩、幾法を成就して、諸の惡道及び惡知識を離れ、速に菩提を證すべきや」と、佛答ふるに一法を成就し、二法を成就し、乃至十法を成就すべきを以てす、彌勒聞き畢りて歡喜し偈を以て佛を讃じ奉る、次で阿難、彌勒無量の辨才を歎ず、佛、彌勒の本事を說て曰く、「過去十無數劫の前、燄光遊戲妙音自在王佛の時に於て、曾て婆羅門の家に生れ、賢壽といふ、見佛發心して無生法忍を悟り神通を獲たり」と、阿難曰く、「彌勒菩薩久しく已に無生法忍を證得せり、何故に無上菩提を得ざるや」と、佛告げたまはく、「菩薩に二種の莊嚴二種の攝取あり、所謂攝取衆生莊嚴衆生、攝取佛國莊嚴佛國これなり、彌勒は過去世に於て常に攝取佛國莊嚴佛國を樂ひ、我は常に攝取衆生莊嚴衆生を樂ひき、而して彼の彌勒吾れに先つこと四十劫にして發

心せるも、我れ勇猛精進にして二種の十法を行じ、以て能くこれに超ゆるを得たり」と、次に彌勒往昔所行の善巧方便安樂の道を明す、次に又た本生の苦行を明して曰く、「我れ昔、見一切義太子たりし時、血を施し、妙華太子たりし時、髓を施し、月光國王たりし時、眼を施せり、かくの如く捨つる所の身血骨髓等稱計すべからず」と、而して更に佛と彌勒との本願同じからざることを說けり。

普明菩薩會第四十三（Kâsyapa-parivarta）佛、耆闍崛山にまし〳〵て、八千の比丘、萬六千の菩薩と俱なりき、時に大迦葉に對して菩薩に退失智慧、得大智慧等二十種の四法あること、又た三十二法を成就すれば菩薩と名くべきこと、又た菩薩の福德無量なること一切大地の如く、一切水種の如くなり等と說き、又た菩薩の修習すべき中道眞實の正觀を說き、又た菩薩は眞の佛子たること、及び菩薩の畢竟智藥を說く、曰く、四念處、四正勤、四如意足、五根五力、七覺支、八正道等これを菩薩の畢竟智藥と名くと、又た當來の比丘、空閑處に住して身に五欲を離るゝと雖も、心に之を捨つること能はざるは、恰かも犬の塊を逐ふが、ごとしと誡しめ、次に二不淨心（一に讀外道書、二に畜好衣鉢）、二堅縛（一に見、二に利養）、二障法（一に親近白衣、二に憎惡善人）、二垢（一に忍受煩惱、二に貪諸檀越）、二雨雹壞諸善根（一に敗逆正法、二に破戒受施）、二癰瘡（一に求見他過、二に自覆其罪）、二燒法（一に垢心受著法衣、二に受他持戒供養）、二病（一に壞增上慢、二に壞他大心）、を說き、又た四種の沙門を說けり、一に形服沙門、二に威儀欺誑沙門、三に貪求名聞沙門、四に實行沙門これな

り、又た四種の破戒善く持戒に似るを誡めて曰く、一に持戒清淨の比丘にして有我論を說くこと、二に戒律を誦持して身見滅せざること、三に衆生の相を執取して慈心を行ずること、四に十二頭陀を行ずと雖も、有所得の見に住することこれなりと、是に於てか五百の比丘解脫を得、三萬二千人法眼淨を得たり、然るに更にこの深法を信解し得ざる五百の比丘ありて坐より起ち去る、佛乃ち二比丘を化作して途に諸比丘と問答し、解脫を得せしむ、而して五百の比丘佛所に詣するや、須菩提の種々の問に答ふ、時に會中に普明菩薩あり、佛に問ふて曰く、「この寶積經を學ばんと欲する者、當に云何が住し、云何が學ぶべきや」と、佛答へたまはく、「この經の所說皆定相なし、取著すべからず、而かも行者に大利益あり、行者宜しく大精進を發し、大法船を習ふべし」と。

佛敎講義錄

寶梁聚會第四十四(Ratnarāśi)この會七品より成る。

沙門品第一、佛、耆闍崛山に住したまひ、八千の比丘、萬六千の菩薩と俱なりき、時に摩訶迦葉沙門の義を問ふ、佛詳にこれに答へ、並に沙門の三十二垢、八覆、聖人の十二表式、袈裟を敬重する八法、及び破戒の比丘信施を消することを能はざるを說く。

比丘品第二、比丘と名くる義を明し、次に惡比丘は獅子身中の蟲にして、能く正法を壞するに十六種の四惡法あることを說く。

旃陀羅沙門品第三、惡沙門を旃陀羅沙門と名く、亦た敗壞沙門、拘篋沙門、欄荼沙門、求利沙門、

稗沙門、逋生沙門、形似沙門、失血氣沙門と名くることを說く、是に於てか五百の比丘捨戒還俗す佛記したまはく、「彼の諸比丘、信解して悔心を生ずるが故に、命終の後兜率天に生じ、彌勒出世の時その初會の數中に在るべし」と。

佛敎講義錄

營事比丘品第四、詳に營事比丘の法を明す。

蘭若比丘品第五、詳に阿蘭若比丘の法を明す、五百の比丘漏盡解脫せり。

乞食比丘品第六、乞食比丘の法を明す。

糞掃衣比丘品第七、糞掃衣比丘の法、並にその威德を明し、最後にこの經をば選擇一切法寶、乃至、寶梁、寶聚、寶藏等と名くべきことを說く。

無盡慧菩薩會第四十五(Akṣayamati-paripṛicchā)佛、耆闍崛山に住したまひ、千二百五十の比丘、一萬の菩薩、十六の在家の菩薩、六十の無比喩心菩薩、寶劫一切の菩薩、及び無盡慧等の六萬の菩薩と俱なりき、無盡慧、佛に問ふて曰く、「何の義を以ての故に菩提心を說き、菩薩復た幾法を以て菩提心を成就するや」と、佛答へたまはく、「菩提とは本より名字言說なし、菩提の中に於て名字言說不可得なり、心及び衆生亦た復た是の如し、一切法に於て都て所得なきを名けて菩提心を得と爲す、若し言說に依りて敷演すれば、十發心を以て十波羅蜜の因と爲す、一一の波羅蜜皆十法を以て首と爲す」と、次で十地の先相を明し、十地に十度を圓滿して十三昧十陀羅尼を得ることを說く、

是に於て無礙光明師子幢天子、佛及び法を歎ず、佛更に爲めに此法門を聽受する者は必ず退轉せざることを說く。

文殊師利說般若會第四十六（Mañgusri-buddhakshetragunavyûha）佛、給孤獨園にまし〳〵て、千の比丘、十千の菩薩と俱なりき、文殊晨朝に佛に詣す、舍利弗等の諸聲聞亦た次で至る、佛、文殊に問ひたまはく、「如來を見たてまつらんと欲するや」と、文殊卽ち正觀如來利益衆生の法門を說く、佛これを印可したまふ、又た舍利弗と文殊と問答して、衆生界不增不減、衆生の相不可得の深義を明かにす、次で佛亦た文殊と問答して、般若波羅蜜に住するの相、般若波羅蜜を修するの義等を說き、又た舍利弗と文殊と問答して、觀佛の義を明かにせり、その文に曰く、

云何觀佛者、不生不滅不來不去非名非相、是名爲佛、如自觀身實相、觀佛亦然、唯有智者乃能知耳、是名觀佛。

と、以て一切法空卽是菩提、諸法實相不可壞の義を說き、福田無差別の相を示す、時に大地震動し大衆得益す、次に一切の佛法を具足せんと欲せば當に般若を學ぶべきことを明し、又た一行三昧を說て曰く、

善男子善女人、欲入一行三昧、應處空閑捨諸亂意不取相貌繫心一佛專稱名字、隨佛方所端身正向、能於一佛念念相續、卽是念中、能見過去未來現在諸佛、何以故、念一佛功

德無量無邊、亦與無量諸佛功德無二、不思議佛法等無分別、皆乘一如成最正覺、

と、而して佛この經を說き終りて微笑放光したまひ、以て無相の法印となす。

寶髻菩薩會第四十七（Ratnakûta-paripṛikkhâ）佛、靈鷲山に住したまひ、四萬二千の比丘、八萬四千の菩薩及び天龍八部と俱なりき、時に東方善變世界、淨住佛の左右に一菩薩あり、羅陀鄰那朴（譯して寶髻といふ）と名く、その佛土に於て忽然として現せず、この忍界に至り梵天に住し、一寶蓋を以て普く三千大千を覆ひ、天華を雨らして頌を說き、來りて佛足を禮し、請問して曰く、「如來淸淨の行その義如何」と、佛總じて告ぐるに四事を以てす、一に行度無極、二に遵修諸佛道品、三に具足神通、四に開化衆生、次に詳かに六度三十七道品五通を解釋し、並に菩薩、衆生を開化し生死を厭はざる二十事を說く、又た次に往古、普壞世佛の時に珍寶菩薩あり、衆生を饒益し道場を嚴淨する等の義を問ふ、佛、無放逸を以てこれに答へたまひしことを說て曰く、彼の時の珍寶は卽ち今の寶髻なりと、又た往古、離垢光佛の時に極妙精進菩薩あり、大忍力を以て仰で佛の命を承け往て業首太子を敎化せることを說て曰く、彼の時の菩薩は卽ち今の世尊、而して太子は今の彌勒なりと、次に菩薩四法自在の道業を說く、是に於てか寶髻、その髻中の明月珠を佛に貢獻して發願す佛爲めに記を授く。

勝鬘夫人會第四十八（Vyûha-paripṛikkhâ）佛、給孤獨園に住したまひし時、波斯匿王及び末利夫人

佛敎講義錄

書をその女勝鬘に致して佛德を稱揚し誠信を發さしむ、勝鬘書を發きて尋釋し、遙かに佛を見たてまつらんことを請ふ、佛卽ち身を現ず、勝鬘偈を說て佛德を讃じ、佛爲めに記を授く、次て勝鬘十弘誓願を發し、天の妙花天の妙音を感得す、又た三願を發し、更に一大願能く恒沙の諸願を攝するを說く、所謂攝受如來正法これなり、復た攝受正法廣大の義及び大威力を演說す、佛亦た讃印す、次で大乘了義を說き、廣く二乘は不了義たることを明す、卽ち變易生死を出でず、無明住地を斷せざるを以ての故なり、唯一佛乘、一歸依、一實諦を了義となすことを說く、佛亦たこれを印可す、次に三種の人大乘の道に入ることを說く、一に成就甚深法智、二に成就隨順法智、三に仰推唯佛所知これなり、この三種の人を除て諸餘の有情、甚深の法に於て己れが所取に隨ひて執着妄說し、正法に違背するあらば、一切の天人應に共に摧伏すべしと、佛亦た讃印す、而して後、佛光明を放ち虛空を步みて舍衞城に還りたまふ。

廣博仙人會第四十九（Vyāsa-paripṛikchā）佛、恒河の岸上にまし〳〵て無量の比丘と俱なりき、廣博仙人、五百の同行と來り見ゐて問ふ、「云何なるをか施となし、施の義及び施主施者等の義如何」と、佛詳かにこれに答へ、並に三十二種不淨の施を明す、次に五大施、五無上施、九大施等を明し又た中有の識及び智識の差別を說き、又た次に六道來生の差別に答ふ。

三　一經の大意幷に眞宗より見たる一經の歸趣

上來、大寶積經一部四十九會（百二十卷）の各會に就て其大綱要旨を叙し畢りぬ、今茲に各會の所說を綜合して更に其大旨を概括すれば、應に左の如くなるべき歟。

大乘無上の法門は畢竟空不可得なる諸法の體性を說くに在り、故に元より言說に執着すべきものに非ず、言說は所謂、言に因りて言を遣るの分齊なるのみ、されば菩薩の修行は無所得の念に住して諸善根を種るにあり、諸善根とは要するに六波羅蜜若くは十波羅蜜を出でざるものなること、各會所々に諸菩薩行を反覆懇說せる文に就て應に知るべし、而して彼の天台五時の敎判に於て、佛一代攝化誘引の深意を示すに當り、第三方等時を以て彈呵の時期なりとせり、彈呵とは二乘の根機、小果を究竟至極となし、これを保守せんとする者に對し、歎大拆小とて大乘を以て小乘を彈斥し、小乘の淺劣なるを示し、以て耻小慕大の心を起さしむるをいふ、今經亦た方等時に位し、卷帙廣博實に方等時を代表するに足るものなるが、諸餘の方等部經典と同じく所々に於て彈呵の說法あり、且つ又た修菩薩行の實例としては、佛の本生及び諸菩薩の本事を說かれたるもの頗る多し。

對告衆の中その主なる者は、文殊彌勒等の菩薩及び迦葉阿難舍利弗等の聲聞幷に諸天子等なり、就中、文殊菩薩は各會の上首として種々深妙の法門を宣說せり。

偖、淨土眞宗眼を以て『大寶積經』一部を大觀すれば、その所詮の歸趣如何といふに、眞宗所依の『無量壽如來會』は實にその第五會として編入せらる、然れば四十九會中の一會にして他の諸會と幷肩せるもの丶如しと雖も、佛意の所在を尋究すれば、決して然らざることを知るに足らん、今、聖道八萬四千の法門を以て光闡道敎の分齊とする眞宗の出世本懷說に據りて『大寶積經』の始終を通觀するに、『無量壽如來會』の所說は實に方等經典諸多の法門の歸趣を示せるものにして、『寶積經』各會に說かれたる諸三昧門諸波羅蜜幷に諸種の神變等は、まさに『無量壽如來會』の序分に於る菩薩歎德の一章段を敷衍せるもの、全くこれ遵修普賢之道の道行ならざるはなし、卽ち普照大光世界之中地皆震動魔宮摧毀驚怖波旬破煩惱城と說き、或は善學無邊幻術功德故能示見變化相應能善了知變化之道と說き、或は爲調衆生宣揚妙理と說き、或は遠出聲聞辟支佛地入空無相無願法門而能安住方便善巧初不樂入二乘涅槃得無生無滅諸三摩地及得一切陀羅尼門等と說ける『如來會』序分の文の如きは實に『寶積經』一部諸多の法門を包含せるものなること明かなりといふ可し、されば『如來會』流通分に如來所應作者皆已作之の文あり、以て佛出世の本懷は斯經に說盡せられたるを知るべし。

佛敎講義錄

第十一　金光明最勝王經　Suvarṇaprabhâsottamarâja-sûtra

この經の譯出六本あり、左の如し、

(一)金光明經　四卷(十八品)　北凉　曇無讖 Dharmarakṣha 譯
(二)金光明經　五卷(二十品)　北周　耶舍崛多 Yaśogupta 譯
(三)金光明帝王經　七卷(二十二品)　後梁　眞諦 Paramârtha 譯
(四)金光明經銀主陀羅尼品幷付囑品　一卷(二品)　隋　闍那崛多 Gnânagupta 譯
(五)合部金光明經　八卷(二十四品)　隋　大興善寺沙門釋寶貴對志德等合入
(六)金光明最勝王經　十卷(三十一品)　唐　義淨譯

右六本の中、(二)(三)の二本闕けたり、而して現行の大藏經目錄には(一)(五)(六)の三本を擧ぐ、卽ち(四)は歷代三寶記第十二によれば、その當時別行せられたるもの丶如しと雖も、現に別行するにあらず、(五)合部金光明經中に合入せらる。

『閱藏知津』に記するところを見るに、(一)金光明經は天台智者大師この譯によりて玄義及文句を說くが故に世々摹て流通すと雖も譯出未完なり、(五)合部金光明經は(一)(二)(三)の三譯を總合し、更に(四)闍

那崛多譯の二品に合入せるもの（これ合部の二字を冠する所以なり）、（六）金光明最勝王經は最も後に在りて文義周足せるものなりと、猶この他別行支流の本に、

（一）金光明最勝王經大辨才天女品　一卷
（二）金光明最勝王經如意寶珠品　一卷

現存して共に義淨譯なり、これ次上の（六）義淨譯の如意寶珠品第十四及び大辨才天女品第十五と同し秘密部依用の爲めに別行せらる。

次に題號に就て一言せば、金光明最勝王經は梵音 Suvarna,prabhāsottamarāja-sūtra 蘇跋那（金）婆娑娑（光）鬱多摩（最勝）囉闍（王）蘇怛纜（經）といふ、明の字は所詮の義を以て光字を敷衍したるものにして、金光明卽最勝王なり、經はその能詮なること知るべし、天台の解釋によるに、この經巧に藏通別圓の四敎を並說せり、而して金光明最勝王とは所詮の敎義淺深に從つて釋名一準ならずと雖も、今、圓敎の所談によりてこれを釋せば、金光明最勝王とは直に法性を呼ぶ名目なり、法界の可尊可貴の當體を金と名け、寂而常照の當體を光と名け、大悲益物の當體を明と名く、これ法性深廣の體に名けたる目にして所謂單法立題なり、單譬立題にあらず、蓋し鈍根に對しては單譬立題とするを强ち遮するにあらずと雖も、利根に就ていへば元より單法立題なるものなり、それ法性法界は無量の德を具するを以て亦た無量の名あり、今の金光明最勝王亦た無量名中の一名なりと知るべし

因に天台の七種立題を圖示して題號解釋の凡例に供せん、

- 單三
  - 人——佛說阿彌陀經等
  - 法——涅槃經等（今經亦た此中に屬す）
  - 譬——梵網經等
- 複三
  - 人法——文殊問般若經等
  - 法譬——妙法蓮華經等
  - 人譬——如來獅子吼經等
- 具足一——人法譬——大方廣佛華嚴經等

金光明とは法界圓融の當體を指示せるものにして金光明卽最勝王なり、卽ち此經に說示せる法界圓融の諸法を該攝して金光明最勝王と名くるなり。

二　一經の大意

次上、題號に就て述ぶる所ありし如く、今經は法界圓融の當體たる金光明最勝王の深義を宣說せるものにして、卽ち是れ三諦相卽の中道なり、而してこれを佛果に約して明せり、故に序品に曰く「薄

伽梵於三最清淨甚深法界諸佛之境如來所居」と、又た曰く「金光明妙法最勝諸經王甚深難得」聞諸佛之境界」と、次で壽量品には「眞如性者卽是如來」の文あり、三身品には「善男子如是法身三昧智慧過二一切相一不レ著二於相一不レ可二分別一非レ常非レ斷是名二中道一」の文あり、今茲に一一これ等の類文を引抄するの遑なし、以て今經は圓融法界の德義を佛果に約して宣說せられたるものなるを知るべし。

更に一經正宗の緣起を案ずるに、如來壽量品の所說は、妙幢菩薩、佛壽の短促（八十入滅）を疑へるに對し、四方四佛その室中に現じて爲めに佛壽の無量を說けるに始まり、次で分別三身品に於て廣く佛陀三身の義を明かにし、次で夢見懺悔品以下、滅惡生善の法を說けり、されば今これ等の說相に就て一經の宗體用を分別すれば、圓融の法界法性はその體なり、佛果はその宗なり、滅惡生善はその用なりといふべく、而してこれを金光明の三字に對配せば、金はその體、光と明とは序の如くその宗と用とに當れるものなるべし。

三　各品の大意

序品第一　佛、王舍城鷲峰山頂にまし〳〵て、最清淨甚深の法界に入りたまひ、大衆雲集す、佛時に定より起ちて大衆を觀察し、偈を說く。

如來壽量品第二　王舍城に一菩薩あり、妙幢と名く、靜處に於て獨り思惟すらく、「釋迦牟尼如來壽命短促唯八十年なるは、これ何の因緣によるか」と、時に佛の威力を以てその室忽ち嚴淨の莊嚴を現じ、四方に四佛（東方不動、南方寶相、西方無量壽、北方天鼓音）ありて妙幢菩薩に告げたまはく、「汝今如來の壽命長短を思忖ずべからず、何となれば、一切世間天人等能く佛の壽量を算知することなければなり」と、次で諸天龍神無量百千億那由他の菩薩を集め、偈を以て釋尊の壽命無量なるを說く、妙幢菩薩更に問ふて曰く、「如來何故に短促の壽命を示現するや」と、四佛曰く「五濁の衆生、善根微薄、邪見熾盛にして正法を信解するなし、是を以て、佛、入涅槃を示現し、希有難遭の心を起さしめ正法を信解せしめん爲めなるのみ、入涅槃は如來の方便なり」と、四佛この語を說き畢りて忽然として現せず、次で妙幢菩薩、無量百千の菩薩と俱に鷲峰頂上釋尊の所に至る、四佛亦た至り、おの〳〵侍者を遣はして金光明經甚深の法要を說かれんことを勸請す、釋尊乃ちこれを許可して次の頌を說きたまへり、

我常在鷲山　宣說此經寶　成就衆生故　示現般涅槃　凡夫起邪見　不信我所說　爲成就彼故　示現般涅槃

時に大會中に婆羅門あり、法師授記と名く、佛足を頂禮して一願を述ぶ、曰く「一粒の舍利を得て供養せんと欲す」と、一切衆生喜見童子あり、偈を以て世尊の舍利畢竟不可得なることを答ふ、妙

幢因て問ふて曰く、「若し舍利及び般涅槃なくんば、云何ぞ經の中に入涅槃ありといひ、且つ滅後舍利を流布するの事を說くや」と、佛これに對して三種の十法に名くるに涅槃を以てせること、及び十種希有の如來の行を說けり。

分別三身品第三　虛空藏菩薩の問に答へて、化應法三身の實義を說く。

夢見懺悔品第四　妙幢、夢中に金鼓を見る、一婆羅門あり、來りて金鼓を擊つに大音聲を出だし聲中懺悔法を演說す、翌日、妙幢、佛所に詣し、夢見の事を述ぶ。

滅業障品第五　佛、甚深微妙靜慮に入り、大光明を放ち、次で帝釋の爲めに、廣く懺悔勸請隨喜廻向の四法、四種の重障を滅除することを說けり、四重障とは、一に於二菩薩律儀一犯二極重惡一、二に於二大乘經一心生二誹謗一、三に於二自善根一不レ能二增長一、四に貪二著三有一無二出離心一これなりと。

佛敎講義錄

淨地陀羅尼品第六　師子相無礙光燄菩薩あり、菩提心の義を問ふ、佛先づ不可得不可言說の勝義諦を以て答へ、次に十度を菩提の因と爲す、而しおの〳〵五法に依りて成就することを明し、次に波羅蜜の義を明し、次に十地の先相を明し、次に十地の名義を釋し、次に十地及び佛地におの〳〵二の無明ありて障を爲すことを明し、次に十地に十波羅蜜を行ずることを明し、次に十呪ありて十地を護ることを說けり。

蓮華喩讃品第七　佛、菩提樹神の爲めに、妙幢の金鼓を夢みたるは、宿世の善因緣に由ることを

說て曰く、「過去に金龍主王あり、常に蓮華の喩を以て十方三世の諸佛を讃歎せり、その金龍主王こそ今の妙幢菩薩なり」と。

金勝陀羅尼品第八　佛、善住菩薩の爲めに、呪及び持呪の功德を說く。

重顯空性品第九　眞實第一義に悟入せしめんが爲めに二空の境觀を說く。

依空滿願品第十　寶光耀天女、修行の法を問ふ、佛、法界に依りて平等の行を修すべきを示す、天女領解して轉じて梵身と成り記を授けらる、幷に五十億の菩薩、大心を發して授記せらる。

四天王觀察人天品第十一　多聞、持國、增長、廣目の四天王、世尊に向つてこの經の尊勝を讃し且つこの經を廣宣流布せしめんことを請ひ、この經の力用能く無量の災患を除き、衆生を安穩ならしむことを說けり。

四天王護國品第十二　佛、四天王に告げたまはく、「若し人王ありて、この經を恭敬供養せば、汝等應に守護して安穩ならしむべし」と、四天王、敎を奉じて守護せんことを誓ひ、多聞天特に如意寶珠陀羅尼法を說き、次に四天王、佛恩を感荷し偈を以てその德を讃じ、次に佛更に偈を說きて守護を勸む、四天王慶喜極まりなく、重ねてこの經の守護廣布を誓ふ。

無染着陀羅尼品第十三　佛、舍利子に告げたまはく、「法門あり、無染着陀羅尼と名く、これ諸菩薩の修行するところ、これ菩薩の母なり」と、次に陀羅尼者、非方處、非非方處、非法、非非法、

非過去、非未來、非現在等と說きて、一切染着の相を離るべきを示し、次に正しく陀羅尼を說き、幷にその受持を勸む。

如意寶珠品第十四　佛、阿難に對して神呪を說き、次で觀世音、金剛秘密主、梵天王、帝釋等各一呪を說き其利益を述ぶ。

大辨財天女品第十五　辨財天女、佛に白す、「若し法師ありて是金光明經を說く者あらば、我れ當に其智慧を益し、不可思議辨財を得せしめ、速に生死を出て、且つ資身の具悉く圓滿ならしめん」と、次で災厄諸障を除滅せしむる爲めに呪藥洗浴の方軌を說く、佛これを讃じ、次に法師授記憍陳如婆羅門と辨財天女と問答する所あり、佛又たこれを讃じ、次に憍陳如婆羅門更に上の讃歎及び方軌を說きて辨財天女を讃ず。

大吉祥天女品第十六　大吉祥天女、佛に白す、「若し苾芻苾芻尼等ありて、この經を受持讀誦せば我れ當に四事を以てこれ等の法師を供養恭敬し、且つ一切諸餘の資具乏少なからしむべし」と、次で自から過去の宿因を說く。

大吉祥天女增長財物品第十七　大吉祥天女復た佛に白す、「若し人ありて財穀を增長せん爲めに、敬信の心を起し、呪を誦じて我を請召し、佛名及び菩薩名を稱すれば、所求皆成就すべし」とて、具に請求の方軌を示し、且つその受用を示す。

堅牢地神品第十八　地神、佛に白す、「この經王の流布するところ我當に往詣して供養恭敬擁護流通せしめん爲めに、その地味を增益し、諸有情をして勝飲食を受用せしめん」と、次に佛重ねてこれを述成し、次に地神自から心呪を說きて行者呪願の方軌を示す。

僧愼爾耶藥叉大將品第十九　僧愼爾耶、佛に白す、「この經の流布する處、我れ二十八部藥叉諸神と俱に其所に詣り、形を隱して隨處に彼の說法師を擁護せん」と、次にその所以を述べて曰く、「我れに難思智光あり、難思智境に於て能く通達するが故に、我れを正了知と名く、故に我れ能く彼の說法師をして言詞辯了し具足莊嚴せしめ、且つ難思智光成就して正憶念を得せしめん」と、次に神呪を示して物資を給與せんことを誓ひ、最後に佛これを勸讃す。

王法正論品第二十　堅牢地神、佛に白す、「世尊、諸國中の人王たる者、若し正法なくんば能く國を治め衆生を安養すること能はず、願はくば、我が爲めに王法正論治國の要を說きたまへ」と、世尊乃ち告げたまはく、「過去に王あり、力尊幢と名く、其子妙幢に告ぐ、我父王智力尊幢、我が爲めに王法正論を說けり、我れ此論に依りて善く國土を治む、當に汝が爲めに說くべし、善聽せよとて妙頌を授けたり」と、次でその頌を說けり。

善生王品第二十一　世尊、王法正論の頌を說き畢りて後、更に偈頌を以て宿昔奉法の因緣を說けり、曰く、「我れ昔、寶髻佛の滅後、妙音聲城に王として善生王と名く、一夜夢中に法師寶積なる者

金光明經を演說するを見、覺めて後これを僧中に求め、更に此經を聞き此經を供養したるに、願に應じて天より雨らしたる七寶を以て寶髻佛及び所有の僧を供養したり、而して寶積法師はこの經演說の功德によりて東方に今現在して不動佛となりたまひ、我はその聞經供養の功德によりて今この最勝金剛身を得たるなり」と、而して最後に大衆この經を奉持して流通絕ねざらんことを願ひき。

諸天藥叉護持品第二十二　佛、大吉祥天女に告げたまはく、「若し善男子善女人ありて、三世諸佛に廣大微妙の供養を爲し、及び三世諸佛甚深の行處を解了せんと欲せば、當に所在この經を流布すべく、聽者は應に一心なるべし」と、次に偈を說きて廣くこの經の威德利益を示す。

授記品第二十三　佛、妙幢菩薩及びその二子銀幢銀光の爲めに當來成佛の記別を授け、次に佛更に會中十千天子の善根成熟するを知りて授記したまふや、菩提樹神、疑を起して、十千天子暫時聞法の後、授記を得る所以を問ふ、佛これに對して彼等皆勝妙善根の因緣に依りて方に授記を得ることを示せり。

除病品第二十四　以下二品は、次上、十千天子授記の因緣を詳說せるものにして、就中、この一品は其遠緣を明す、佛、菩提樹神善女天に告けたまはく、「十千天子本願の因緣今汝が爲めに說かん過去無量不可思議無數劫に於て、寶髻如來出世したまひ、その滅後像法の時、天自在光王の國中に持水長者と名けられたる者あり、醫方に達し八術に通じたりしも、既に老衰して外出に堪へず、時

に國中惡疫流行し萬民大に困苦す、而して長者に一子あり、流水と名けらる、無量百千の衆生の病苦を見て大悲心を起し、父なる長者大醫の所に至り、醫方秘法を諮問し、以て百千無量の衆生の病苦を治療せり」と。

長者子流水品第二十五　次に近緣を明して曰く、「長者子流水、時に國內の惡疫を治療除去せるに由り、時人敬仰して長者子をば大力醫王慈悲菩薩と尊稱しき、流水に二子あり、長を水滿と呼び、次を水藏と名く、或時、父子三人、城外空澤の中を遊行するに、諸多の禽獸皆悉く同一の方向に奔飛し去るを見、往てこれを驗す、既にして野生池といへる大池に達せしに、池水將に涸れんとし、衆魚旋轉死門に入らんとす、父子これを見て大に驚き、大悲心を起して四方に水を覓むるに得ることを能はず、漸くにして水生といへる一大河を發見せり、河邊に多くの漁人あり、捕魚の爲めに河水を決し、下に向つて流れしめず、峻崖卒かに修補するに由なし、乃ち流水城に還り、大王天自在光に請ふて二十頭の大象を借り、水を皮囊に盛りて群象に滿載し、行てこれを野生池に瀉ぎ、更に二子に命じて父持水に請はしめ、家中一切の食物を齎し來りて徧くこれを池魚に施し、又た自から池中に入りてその衆魚の爲めに過去寶髻佛の御名を稱へ、甚深十二緣生の法要及び陀羅尼を演說し、父子俱に家に還る、後に池中の衆魚同時に命終して三十三天に轉生し天子と爲る、一夜流水の所に來りて法財二施の洪恩を謝し、奇瑞を現じて國王及び諸人を歡喜せしめき、而してその長者子流水

は我身にして、持水長者は妙幢、二子滿水滿藏は次の如く銀幢銀光是れなり、又た國王天自在光は即ち汝菩提樹神にして、救はれたる衆魚は今の十千天子是れなり」と。

捨身品第二十六　世尊已に十千天子往昔の因緣を說き、復た菩提樹神及び諸大衆に告げたまはく「我れ過去に於て但魚命を濟ひしのみならず、菩薩の道を行じて所愛の身をも捨てたり、是の如きの因緣共に觀察すべし」と、乃ち諸比丘及び大衆を率ひて般遮羅聚落一林中に至り、告げたまはく、「汝等彼の往昔苦行菩薩の本舍利を見んと欲するや否や」と、即ち百福莊嚴の手を下して其地を按したまふや、大地震動して開裂し、七寶の塔忽然として涌出す、次で阿難に命じて其塔中に藏められたる七寶の函を開かしめたまふに舍利あり、白蓮華の如く、阿難取りて世尊に奉授す、世尊受けて諸比丘に告げたまはく「汝等應に苦行菩薩遺身の舍利を觀すべし」と、次で左の頌を說けり。

菩薩勝德相應慧、勇猛精勤六度圓、常修不息爲菩提、不捨堅固心無倦。

而して次に曰く「汝等應に菩薩の本身を禮敬すべし、この舍利は是れ戒定慧香の薰復する所の最上福田なり、極めて逢ひ難し、我れ此骨に因りて速に無上覺を得たり、往恩を報せんが爲めに我れ今禮を致す、當に舍利往昔の因緣を說きて汝等の疑惑を除くべし、過去世に國王あり、大車と名く三子あり、長子を摩訶波羅といひ、次子を摩訶提婆といひ、第三子を摩訶薩埵といふ、曾て相携へて山林に遊觀せしに、三王子は華菓を求めん爲めに、父を離れて周旋し大竹林中に至りて息ふ、時

に三子互に所念を述ぶ、長子曰く「我れ今日心甚驚惶す、この林中に猛獸あるなからんや」と、次子曰く「我れ自身に於て悋惜なきも、父母に於て別離苦あるを恐る」と、第三子曰く「我れに恐怖なく、また別離の憂なし、身心充遍して當に殊勝功德を得べし」と、かくて復た前行するに、一虎七子を產ーて纔に七日を經、諸子圍繞して飢渴に逼られ、羸瘦して將に死せんとするを見、三子おの〳〵悽傷哀愍の心を起し徘徊これを久ふす、既にして第三子身命を捨てゝ餓虎を救はんと決心し二兄を前に去らしめ獨り林中に入り頸を刺して血を出だし、餓虎をして血を舐り肉を噉はしめき、後に父母これを聞て大に愁傷し、號哭すれども又た奈何ともするなし、遂に其殘骸を拾ひ七寶函に納めて塔を建てしもの即ち是れなり、かくの如く我れ昔五趣中に於て衆苦を代受し出離を得せしめたり、而してこの第三子摩訶薩埵とは我身これなり、國王大車は今の父淨飯王なり、その后は今の摩耶夫人なり、又た彼の長子は慈氏にして、第二子は曼殊師利なり、虎はこれ大世主（第一夫人瞿夷）にして其七子の內の五子は五比丘なり、一子はこれ目連にして他の一子はこれ舍利弗なり、汝等亦た是の如く菩薩成佛の因を學ぶべし、これは是れ我捨身の處、七寶塔も無量時を經て遂に厚地に沈めるのみ」と、かくの如く本生を說き畢りて佛神力を攝したまふに塔亦だ地に沒したりと。

十方菩薩讚歎品第二十七　十方世界無量百千萬億の諸菩薩衆、おの〳〵本土より鷲峯山に詣し、異口同音に偈を說て佛德を讚歎す。

妙幢菩薩讃歎品第二十八　次に妙幢菩薩、偈を說て佛德を讃歎す。
菩提樹神讃歎品第二十九　次に菩提樹神同じく說偈歎德す。
大辨財天女讃歎品第三十　上に同じ。
付囑品第三十一　佛、最後に無量菩薩諸天人等に對して、此經の護持者を募りたまひしに、諸大菩薩、四大天王、天帝釋、觀史多天子、魔王子商主、魔王、妙吉祥天子、慈氏菩薩、大迦葉波、阿難陀等、おの〳〵偈を以て護持せんことを答へ奉る。

四　高祖の『金光明經』觀幷にその弘傳

『淨土和讃』中、現世利益和讃十五首あり、その第一首に曰く

阿彌陀如來化シテ　息災延命ノタメニトテ
金光明ノ壽量品　トキヲキタマヘルミノリナリ

と、右は『金光明經』壽量品を以て、息災延命のために阿彌陀佛の來化して說きたまへる妙法なることを示したまへるなり、壽量品の大意は既に述ぶるところの如し、卽ち妙幢菩薩（懺譯には信相菩薩とす）が、釋尊の壽命僅かに八十歲にして入滅したまふに就て疑念を起せるに對し、四佛四方に

現はれて釋尊の壽命無量なることを說きたまふ、然るにこの讃文に四佛の說法を以て彌陀の所說とするは、如何といふに、彌陀はこれ本、諸佛は則ち末、本を以て末を攝すれば、卽ち三佛（西方無量壽の外の三佛）の說を全ふじて、唯これ一彌陀の說なり、而して釋尊の無量壽を開顯するは、全くこれ本佛彌陀の方便法身の別德たる光壽無量の德を開顯するに外ならざるなり。

先きに一經の大意を叙するところに於て一言せる如く、金光明最勝王とは法界圓融の當體に名けたるものなるが、こは通途の解釋にして、若しこれを淨土眞宗別途の法門より見れば、金光明最勝王とは本佛彌陀の光明無量の德に名けるものなり、卽ち諸佛中之王光明中の極尊たる彌陀修德の顯現に外ならずして、これを要するに、『金光明經』一部に開顯せられたる息災延命の妙法は、これ光壽二無量の果德を攝在せる名號の現世利益を示せるものなりといふべし、同經序品の偈に曰く、

金光明妙法　最勝諸經王　甚深難レ得レ聞　諸佛之境界　我當下爲二大衆一　宣中說如レ是經上　幷四方四佛　威神共加護　東方阿閦尊　南方寶相佛　西方無量壽　北方天鼓音　我復演二妙法一　吉祥懺中勝　能滅二一切罪一　淨除二諸惡業一　及消二衆苦患一　常與二無量樂一　一切智根本　諸功德莊嚴衆生身不レ具　壽命將二損減一　諸惡相現前　天神皆捨離　親友懷二瞋恨一　眷屬悉分離　彼此共乖違　珍財皆散失　惡星爲二變怪一　或被二邪蠱侵一　若復多二憂愁一　衆苦之所レ逼　睡眠見二惡夢一　因レ此成二煩惱一　是人當二澡浴一　應レ著二鮮潔衣一　於二此妙經王　甚深佛所レ讃　專注心無レ亂　讀

誦聽受持上　由二此經威力一　能離二諸災横一　及餘衆苦難　無レ不二皆除滅一　護世四王衆　及大臣眷
屬　無量諸藥叉　一心皆擁衛　大辨才天女　尼連河水神　訶利底母神　堅牢地神衆　梵王帝釋衆
龍王緊那羅　及金翅鳥王　阿蘇羅天衆　如レ是天神等　并將二其眷屬一　皆來護二是人一　晝夜常
不レ離　（下略）

佛敎講義錄

と、以て知るべし、而して現世利益和讃十五首の中、初十二首は全く『金光明經』に依りたまへるものにして、念佛の現益これを要するに滅罪と護念との二種を出でず、次下の讃に、或は七難消滅益（山家ノ傳敎大師ハ等）を示し、或は轉重輕重益（一切ノ功德ニスグレタル等）を述べ、乃至、神祇尊敬益（南無阿彌陀佛ヲトナフレハ梵王帝釋歸敬ス等數首）を說くもの一首として、この經に依らざるはなし、卽ち前の序品の偈及び壽量品以下の各品に於て滅罪護念の益を說くもの悉くこれ念佛の現益なり、『持名鈔』に曰く、

問テイハク、念佛ノ行者ハ諸佛菩薩ノ擁護ニモアツカリ、諸天善神ノ加護ヲモカウフルヘシトイフハ、淨土ニ往生セシメンカタメニ、タヽ信心ヲ守護シタマフ歟、マタ今生ノ穢體ヲモマモリテモロ〳〵ノ所願ヲモ成就セシメタマフ歟、アキラカニコレヲキカントオモフ。

コタヘテイハク、カノ佛ノ心光コノヒトヲ攝護シテステストモイヒ、六方ノ諸佛信心ヲ護念ストモ釋スレハ、信心ヲマモリタマフコトハ佛ノ本意ナレハマウスニオヨハス、シカレトモマコトノ

信心ヲウルヒトハ、現世ニモソノ益ニアツカルナリ、（中略）サレハ阿彌陀佛ハ、現世後生ノ利益トモニスクレタマヘルヲ、淨土ノ三部經ニハ後生ノ利益ハカリヲトケリ、餘經ニハオホク現世ノ益ヲモアカセリ、カノ金光明經ハ鎭護國家ノ妙典ナリ、カルカユヘニ、コノ經ヨリトキイタストコロノ佛菩薩ヲハ護國ノ佛菩薩トス、シカルニ正宗ノ四品ノウチニ壽量品ヲトキタマヘルハスナハチ西方ノ阿彌陀如來ナリ、コレニヨリテ阿彌陀佛ヲハコトニ息災延命護國ノ佛トス。

佛敎講義錄

最後にこの經の弘傳に就て一言附記し置くの要あり、この經は西紀前第二三世紀の頃より夙に印度の或地方に流布せられたるやの形跡ありと雖も、もとより之を確むる史料あるにあらず、支那に於る傳譯は既に述べしが如く、北凉の曇無讖一たび之を譯出せしより數回の飜譯を重ね、六朝の間盛んに講布せられたりしが、本朝に來りても奈良朝以來、亦た講讃の盛を見、『仁王般若波羅密經』『妙法蓮華經』と共に鎭護國家の三部妙典として尊重せられたり。

猶この經の梵本は、ホヂソン（B. A. Hodgson）氏に依りて尼波羅より發見せられ、爾來東西學者の注意するところとなりしが、尼波羅にては現に九部大經の一として敬重せらるといふ。

第十二　悲華經（Karuṇâpundrika-sûtra）

一　譯出幷に一經の大意（附本典御引用）

この經に四譯ありて二存二缺なり、二存とは

悲華經（六品十卷）　北涼　曇無讖譯

大乘大悲芬陀利經（三十品八卷）（Mahākarunāpuṇḍarīka-sūtra）　附三秦錄

而して二缺とは

閑居經（十卷）　西晉　竺法護譯

悲華經（十卷）　北涼　釋道龍譯

なり、次に一經の大意を窺ふに、蓮華尊佛初めて正覺を成就し、大佛事を作したまへること、幷にその佛刹の莊嚴相より說き起し、蓮華尊佛は曾て過去世に於て日月尊佛より授記せられ、且つ解了一切陀羅尼門を授與せられたること等を說き、次で寂意菩薩の問に答へて、無量壽佛は過去恒河沙阿僧祇劫の昔に於て、無諍念王といへる轉輪聖王なりしが、寶藏如來の許に於て發願し、その千子と共に佛の授記を被れることを說けり、曰く、輪王は無量壽佛、第一の太子は觀世音、第二の王子は大勢至、第三の王子は文殊、第四の王子は普賢、第五の王子は今の蓮華尊佛なりと、次で寶藏如來、大悲菩薩の爲めに諸三昧門助菩提法淸淨門經を設けり、而して最後にこの經を解了一切陀羅尼

門、亦たは示現諸佛世界、亦たは大悲蓮華と名くることを說きて、誦持を勸む、之を要するに、この經は諸佛の濟凡利生まことに深重の因緣に由ることを示せるものなりといふ可し。

更に高祖が、『本典』の行卷五右、幷に化卷本二右にこの經を引きたまへる引意如何といふに、既に述ぶるが如くこの經の諸菩薩本受記品第四に於て、無諍念王發願の因緣を說けり、これ迹中の迹なるものにして實に數々發願中の一なり、而して願相願數大に正依經に同じ、これを以て高祖は異譯の經に次でこの經を引證し以て助顯に供したまへるものなるべし、卽ち願相の同じき邊よりこれを引きて本佛攝化の周徧深重なるを示したまへるものなる歟。

二　各品の大意

轉法輪品第一　佛、王舍城耆闍崛山にまし〳〵て大比丘僧六萬二千人、菩薩四百四十萬、梵天六欲天等と俱なりき、時に彌勒等の上首の菩薩、東南方に向ひ、蓮華尊佛の名を稱し功德を讚す、會中、寶日光明菩薩あり、佛に問ふて曰く、「何の因緣を以てか、彌勒等の菩薩、東南方に向て禮するや」と、佛曰く、東南方こゝを去る一億百千佛土にして佛世界あり、名けて蓮華といふ、蓮華尊佛昨夜その土に於て始めて正覺を成じ、大神變を現じ大佛事を作したまへばなり」と。

陀羅尼品第二　寶日光明菩薩の問に答へて、東南方蓮華世界の相貌を說き、又た過去の日月尊佛蓮華尊佛の爲めに記を授け、解了一切陀羅尼門を授與するを說く、既にして十方の菩薩同じく耆闍崛山に來り陀羅尼門を聽受し、皆彼の蓮華佛刹を見ることを得たり、次に解脫怨憎菩薩あり、陀羅尼を修集するの法を問ふ、佛答ふるに四法を成就し、五法を成就し、乃至六法を成就すれば、則ち能くこの陀羅尼門を修し、七歲を過ぎて聖淸淨眼を得、十方世界の諸佛世尊を見たてまつるべきを以てす、時に彌勒菩薩、佛に白して曰く、「往昔過十恒河沙劫に娑羅王如來出世したまひ、我れその佛の所に於て是の法を聞くことを得、又た修することを得たりしかども、本願を以ての故に久く生死に在り云云」と、次に佛、彌勒及び諸大衆の爲めに陀羅尼章句を說きおの〳〵益を得せしめ、又た遍一切功德三昧に入り、三惡道の衆生を度して天人に生せしめ、且つ諸天人の爲めに宿世の因緣を示す。

大施品第三　寂意菩薩、佛に問ふて曰く、「世尊、何の因緣に依りて五濁惡世に出現したまへるや」と、佛、答へて曰く「本願を以ての故にこの穢惡不淨世界に處するのみ」と、次で備に恒沙阿僧祇劫の前の事を述ぶ、曰く、この佛世界を刪提嵐と名け、劫を善持と名く、時に轉輪聖王あり、無諍念と稱す、一大臣あり、寶海といふ、寶海に一子あり、出家して無上道を成じ寶藏佛と號す、無諍念輪王及び千子、諸小王等皆悉く寶藏佛を供養し、以て人天の樂果を希求す、寶海梵志一夕靈夢を

感得して、彼等の志の甚だ淺劣なるを知り、夢中の所見を佛に白し、遂に輪王及び諸人を勸めて無上道心を發起せしむ。

諸菩薩本授記品第四　寶藏如來。不失菩提心三昧に入り大光明を放ちて無量の世界を照す、十方無量の菩薩おの〳〵その世界より來りて、寶藏佛の授記を聽かんと欲す、既にして無諍會輪王、佛に白す、「我れ今眞實に菩提を得んと欲す、我が所有善根悉く無上菩提に回向す、終に不淨の佛土を願取せず」と、次で左の如く諸願を述ぶ。

時世界之中無有地獄餓鬼畜生、一切衆生命終之後、令不墮於三惡道中、世界衆生皆作金色、人天無別皆得六通（中略）願我世界無有女人及其名字、一切衆生等一化生、壽命無量除其誓願、無有一切不善之名、世界淸淨無有臭穢、常有諸天微妙之香皆悉充滿、一切衆生皆悉成就三十二相而各瓔珞、所有菩薩皆是一生除其誓願（中略）於一念中成阿耨多羅三藐三菩提已、光明照於無量無邊百千億那由佗諸佛世界、令我壽命無量無邊百千億那由他劫無能知者、除一切智、令我世界無有聲聞辟支佛乘、所有大乘純諸菩薩、無量無邊無能數者、除一切智、願我成阿耨多羅三藐三菩提已、令十方諸佛稱揚讚歎我之名字、願我成阿耨多羅三藐三菩提已、無量無邊阿僧祇餘佛世界、所有衆生聞我名者、修諸善本欲生我界、願其捨命之後必定得生、唯除五逆誹謗聖人廢壞正法、願我成阿耨多羅三藐三菩提已、其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生、若發阿多耨羅三藐三菩提、修諸善根欲

生我界者、臨終之時我時當與大衆圍繞現其人前、其人見我卽於我所得心歡喜、以見我故離諸障閡卽便捨身來生我界、（中略）我成阿耨多羅三薩三菩提已、其餘無量無邊阿僧祇世界、有諸女人聞我各者、卽得第一信心歡喜、發阿耨多羅三藐三菩提心、乃至成佛終不復受女人之身、願我滅度已、雖經無量無邊阿僧祇劫、有無量無邊阿僧祇佛刹、其中女人聞我名者、卽得第一信心歡喜、發阿耨多羅三藐三菩提心、乃至成佛終不復受女人之身、世尊、我之所願如是佛土如是衆生、世尊、若世界清淨衆生如是者、然後乃成阿耨多羅三藐三菩提。

（以上の頌相、正依の說と大に同じきを知るべし、而して圈點を附したるは、行卷及び化卷本に引用したまへる文なり）

佛敎講義錄

時に寶藝如來、輪王に告げたまはく、「善哉々々、大王の所願甚深なり、大王よ、西方百千萬億佛土を過ぎて世界あり、尊善無垢と名く、佛を尊音王如來と名く、彼の佛の世界の功德淸淨莊嚴ことごとく大王の所願の如し、今汝の字を改めて無量淸淨と爲すべし」と、次で更に告げたまはく「彼の尊音王佛般涅槃の後に不可思議功德王如來、寶光明如來、寶尊音王如來相次で出世したまひ、然る後汝當に作佛して無量壽如來と號し、世界をば安樂と名くべし」と、輪王曰く、「世尊、若し我所願成就し、佛の記したまふ所の如くんば、我れ今頭面に佛を禮したてまつらん、當に十方恒沙の世界をして六種震動せしめ、その中の諸佛亦た當に我が爲に授記すべし」と、時にその言の如く地動授記の事終りて後、寶海梵志の勸說により、千子及び諸人次第に發心受記せり、曰く第一の太子は卽

（一〇四）

ち觀世音、第二の王子は卽ち得大勢、第三の王子は卽ち文殊師利、第四の王子は卽ち普賢佛、第五の王子は卽ち今の蓮華尊佛、第六の王子は卽ち法自在豐王佛、第七の王子は卽ち光明無垢堅香豐王佛、第八の王子は卽ち普賢菩薩なりと、次に十千の懈怠の人に記を授け、次に第九の王子は卽ち阿閦佛、第十の王子は卽ち香手菩薩、第十一の王子は卽ち寶相菩薩、又た五百の王子に記を授け、又た四百の王子に記を授け、又た八十九の王子に記を授け、又た八萬四千の小王に記を授け、又た寶海の八十子に記を授け、又た寶海の三億の弟子に、千の童子に、侍者五人にそれ〴〵授記せられ、最後に寶海、大悲願を發し、諸菩薩等皆悉く讃歎す、六方の諸佛華を送りて供養し、寶藏如來頂を摩して授記せられき。

檀波羅密品第五　寶藏如來、大悲菩薩の爲めに諸三昧門助菩提法淸淨門經を說く、大悲菩薩歷劫もろ〴〵の難行苦行を行ず。

入定三昧品第六　十方の諸佛、皆釋尊の化度するところの者、皆菩薩を遣はして來會供養せしむ佛三昧に入り諸の大衆をして皆身の毛孔の中に入らしめ、復た十專心ありて菩提を發し能く一切行門に入ることを說く。

（一〇五）

第十三　大乘大方等日藏經

一　大集經の組織

大集經は大寶積經と同じく諸部の經典を編成せるものにして、古來幾種の異本あり、まづ麗本に依れば左の如く編成せられたり（『縮刷藏經』玄一參照）

佛敎講義錄

一、瓔珞品　卷一
二、陀羅尼自在王菩薩品　卷一—卷四
三、寶女品　卷五—卷六
四、不眴菩薩品　卷七
五、海慧菩薩品　卷八—卷十一
六、無言菩薩品　卷十二
七、不可說菩薩品　卷十三
八、虛空藏菩薩品　卷十四—卷十八
九、寶幢分（此分中有十三品）　卷十九—卷二十一
十、虛空目分（此分中有十品）　卷二十二—卷二十四
十一、寶髻菩薩品　卷二十五—卷二十六（以上大方等大集經、但加次日密分）

十二、無盡意菩薩品　卷二十七、卷三十（無盡意菩薩經）
十三、日密分（此分中有四品）　卷三十一—卷三十三
　日藏分（此分中有十三品）　卷三十四—卷四十五（大乘大方等日藏經）
十四、月藤分（此分中有二十品）　卷四十六—卷五十六（大方等大集月藏經）
十五、須彌藏分（此分中有四品）　卷五十七—卷五十八（大乘大集經須彌藏分）
十六、十方菩薩品　卷五十九—卷六十（佛說明度五十校計經）

『開元錄』卷十一に記するところによれば、『大方等大集經』三十卷（北凉天竺三藏曇無讖於姑臧譯第三譯三譯二闕）とし、その內容を左の如くす、

佛敎講義錄

第一、陀羅尼自在王菩薩品　第三、寶女品
第三、不眴菩薩品　第四、海慧菩薩品
第五、虛空藏菩薩品　第六、無言菩薩品
第七、不可說菩薩品　第八、寶幢分
第九、虛空目分　第十、寶髻菩薩品
第十一、日密分

且つ附記して曰く「群錄を尋檢するに、この大集經卷定准なし、或は二十九といひ、或は三十とい

佛教講義錄

ひ、或は三十一、或は三十二、或は四十卷、今時大集多分三十」と、而して先きの麗本六十卷は、括弧内に記せる如く、この大方等大集經三十卷の外、更に五部を合集せるものなりとす、卽ち左の如し。

大方等大集經(Mahâvaipulya-mahâsannipâta-sûtra)三十卷　北涼　曇無讖(Dharmaraksha)

無盡意菩薩經(Aksharamati-nirdesa-sûtra)六卷　宋　智嚴、寶雲共譯

大乘大方等月藏經(Sâryagarbha-sûtra)十卷　隋　那連提耶舍(Narendrayasas)

大方等大集月藏經(Kandragarbha-sûtra)十卷　同　上　譯

大乘大集經須彌藏分(Sumerugarbha)二卷　同　上　譯

佛說明度五十校計經　二卷　後漢　安世高譯

猶、『開元錄』には、梁沙門僧祐の大集記に(『出三藏記集』卷第九參照　大集經の編次を、第一瓔珞

品、第二陀羅尼自在王品、第三寶女品、第四不眴品、第五海慧品、第六無言品、第七不可說品、第八虛空藏品、第九寶幢分、第十虛空目分、第十一寶髻品、第十二無量意品とせるを批議して曰く、

「今、羅本を檢するに祐記と同じからず」と、次で前記の如く『大集經』三十卷十一段の編次を示し、更に僧祐記の依憑し難き點を指摘して曰く、

「陀羅尼品を分ちて、瓔珞、陀羅尼の二品となせるもの然らず、これは是れ一段にして二に分つべからず、『大哀經』は卽ちこの品の異譯なればなり、又た、目密分なくして、無盡意品あるもの然らず『無盡意經』は是れ大集の別分なりと雖も、曇無讖の譯にあらず、且つ次第にも非ざれば中に入るべからず、又た虛空藏品を以て不可說品の後に置くと雖も、これ亦たその所以を詳かにせず、今、陀羅尼自在王品より日密分に至る、總じて十　分なり」と、以て『大集經』三十卷の編次に關する『開元錄』著者智昇の意見の在る所を知るべし。然るに大集部に屬する經卷は此外に頗る多く傳譯せられたること、前の『大集經』六十卷の內容に就ても明かなるも、故に智昇は、進で斷案を下して曰く

『日藏經』と日密分とは同本異譯(日密分は譯出未盡なり、これが完全なる譯出を見しならば、更に一卷の增加を免れざるべし)なれば、『日藏經』亦た是れ第十一分(日密日藏俱に卷頭に說、虛空目安那般那廿曇門、已云々の文あり、然れば日密分は虛空目の後にあるべきに、今、寶髻品などその中間に挿入するもの其所以を詳にせず)月藏分これ第十二分(卷初に說日藏經已云々の文あり)十輪經これ第十三分(初に說月藏經已云々の文あり、而して第十四分は未傳)須彌藏經これ第十五分(經初に題して大乘大集經須彌藏分第十五といふが故に)第十六分は應にこれ虛空孕經なるべし(同經の初に授功德天記別法已云々の文あり、而して須彌藏經は功德天の問に因りて佛の說きたまへるものなり)而して日藏經は初

め迦蘭陀竹園に在りて說き、次に須彌の頂に昇り、後に龍の請に因りて佉羅帝耶山に往きたまひしとあり、かくて月藏等の四經は、並に佉羅帝耶山に在りて說きたまへるものなれば、說法の次第明かなりといふべし、然るに、『念佛三昧』、『賢護』、『譬喩王』、『無盡意』等の經これ大集の別分なりと雖も、その次第を知るに由なければ編記し難し、彼の隋朝の僧就が『明度五十校計經』を以て『大集經』に合し、題して十方菩薩品となせるもの、既に憑准なきが故に依るべからず、若し大集部に屬すべき諸經を總合し、且つ重複を省きて卷軸を整正せんには宜しく『日密分』を除き、これに替るに『日藏分』を以てし、次に『月藏』、次に『地藏十輪』、次に『須彌藏』、次に『虛空孕』、次に『念佛三昧』、次に『賢護』、次に『譬喩王』、次に『無盡意』、總じて八十卷と成せば亦將に契はんとす」と（『念佛三昧』以下の四經はその說次を知らずと雖も、意を以て合せるのみ）、今、智昇の斷案を一括して、八十卷の編成を列記せば應に左の如くなるべし。

佛敎講義錄

第一、陀羅尼品　第二、寶女品
第三、不眴品　第四、海慧品
第五、虛空藏品　第六、無言品
第七、不可說品　第八、寶幢分
第九、虛空目分　第十、寶髻品

（以上合して二十七卷、第十一日密分三卷を加へて三十卷となる、今重複の故にこれを省けば應に二十七卷なるべし）

第十一、日藏分（十卷）　第十二、月藏分（十卷）
第十三、地藏十輪分（十卷）　第十四、（此土未傳）
第十五、須彌藏分（二卷）　第十六、虛空孕分（二卷）
第十七、念佛三昧分（六卷）　第十八、賢護分（五卷）
第十九、譬喩王分（二卷）　第二十、無盡意分（六卷）

麗本の『大集經』卷第一の後に、校正後序と題し、『開元錄』に依りて凡そこの經に六本ありといひ且つ六十卷の編次に對して六失を列擧し、最後に完璧八十卷の說を是認して曰く「爲二八十卷一方備矣、然今不レ能レ卽レ正者、以二此六十卷本是本朝芬皇宗選行經一、來已久久、則難レ變耳」と。

先に曇無讖譯の『大方等大集經』三十卷は、この經の第三譯にして三譯二闕なることを記せり、二闕とは左の如し。

『大方等大集經』二十七卷　後漢月支三藏支婁迦讖譯　第一譯
『大方等大集經』三十卷（或有二新字一或二十四卷）　姚秦三藏鳩摩羅什譯　第二譯

二　『日藏經』各品の大意

護法正持品第一　佛、王舍城迦蘭陀竹園にまし〳〵て、十方世界の無量大菩薩衆、及び帝釋梵天四天大王諸大龍王等雲集す、時に一大梵天王あり、功德蓮華光と名く、偈を說て佛を讃じ、佛亦た偈を說て答へたまひ、次で諸大菩薩衆おの〳〵三昧に入り大光明を放ちて佛事を莊嚴す、佛告げたまはく、「若し善男子善女人ありて、三寶所に於て種々諸物を供養すれば當に二利を獲べし、一に法利、二に財利なり」と、次に破戒にして施物を受用すれば、現在未來おの〳〵四惡果あるを明し、又た頻婆娑羅王の問に答へて、未來の惡王等、法師の物を侵奪すれば、現に二十種の惡報を得、捨身の後大地獄に墮し備に鬼畜を歷べし、然るに之に反して能く法を護る者あらば、功德無量なるべきを說けり。

陀羅尼品第二　東方の瞻波迦華色如來、日行藏等の諸菩薩をして、盡一切衆生惡業陀羅尼、及び日眼蓮華陀羅尼を持して來らしむ、南方の山帝釋王如來、香象等の諸菩薩をして順空陀羅尼、無盡根大受記陀羅尼を持して來らしむ、西方の智德峯王如來、炎德藏菩薩をして無願順陀羅尼、智慧依止授記陀羅尼を持して來らしむ、北方の德華藏如來、虛空藏等の諸菩薩をして滅一切惡陀羅尼を持して來らしむ。

菩薩使品第三　佛、耶舍に勅して日眼蓮華陀羅尼を持せしめ、憍陳如に無盡根陀羅尼を持せしめ舍利弗に智慧依止陀羅尼を持せしめ、目犍連に惡心者生歡喜心諸不信者悉皆悟睡陀羅尼を持せしむ

定品第四　四方四佛より遣はされたる四大菩薩及び眷屬等、おの〳〵定に入り光明を放つ、次で憍陳如の問に答へて愛に欲愛、色愛、無色愛、及び有愛、離有愛、法愛の三種あるを說き、又た日行藏菩薩の賫し來れる盡一切衆生惡事陀羅尼（四諦順陀羅尼）を解說す、憍陳如更に日眼蓮華陀羅尼に就て問ふ、佛答へたまはく、「この陀羅尼知り難く覺り難し、一切聲聞辟支佛の境界に非ず」と、次に又た憍陳如の問に答へて、香象菩薩の賫し來れる順空陀羅尼、幷に炎德藏菩薩の賫し來れる無願順陀羅尼を解說す。

惡業集品第五　憍陳如の請問に對して、一切世間不可樂想、食不淨想を說く、亦た卽ちこれ無願順陀羅尼なり、次で舍利弗の淨陀羅尼を問ひ奉れるに因りて四倒を破するの法を說く。

護持品第六　爾時、一切諸天大玉幷にその眷屬、一切龍王、夜叉王、阿修羅王等、佛を禮して白す、「我等今より在々處々、若し比丘比丘尼、優婆塞優婆夷ありて、佛の所說の如く、不淨觀を修じ寂滅三昧を得る者あらば、爲めに擁護供養を爲さん」と、佛これを嘉納し、その功德を稱讃す。

佛現神通品第七　頻婆娑羅王、佛の不淨觀法を說きたまへる後、一切大衆その護持を欲するを聞き、踊躍歡喜して更に佛及び諸菩薩の光明に就て請問す、佛乃ち四衆に勅しておの〳〵禪定に入らしめ、亦た自から佛境界三昧に入る、是に於てか一切世界悉く佛身に入り、一切衆生身心快樂、譬へば比丘の第三禪に入れるが如し、而して十方一切の諸佛おの〳〵其刹中に於て大衆のために佛功

德を稱揚せり。

星宿品第八　時に欲界の魔王波旬、一切娑婆國土諸有衆生悉く佛身中に在るを見て悲泣雨涙し、大苦惱を感ず、既にして一魔軍主あり、戒依止と名く、魔王の身心愁惱せるを見、乃ち龍王の宮に至り諸惡龍をして沙門瞿曇を害せしめんと欲す、諸龍、魔波旬の宣告に由り悉く須彌山下の佉羅抵山に集合す、然るに皆勢力を失ひて自在ならず、亦た如何ともなすなし、時に大魔軍主戒依止、百千萬衆を從へて前進せる途上、佛を見奉りて過去の誓願幷に福德因緣を知ることを得、五體を地に布きて懺悔發心す、次で諸龍王、佉羅抵山上の光味大仙の所に詣り、救濟を乞ふ、光味大仙乃ち佉盧虱吒大仙の往事を示し、具に星宿の法を說き、諸天龍王をして歡喜せしむ。

送使品第九　光味大仙、諸龍王に對して佛の功德を稱讚し、勸めて佛に歸せしむ。

念佛三昧品第十　魔王波旬に一女あり、離暗と名く、如來の功德深遠なるを聞て、五百の魔女と共に歸佛發心す、魔王ます〳〵瞋恚畏怖せり、次で光味大仙佛に向て四禪地依止心念陀羅尼の功德を說く、佛これを印可して又た四禪地依止念佛三昧の修相幷にその勢力利益を詳說す。

昇須彌山頂品第十一　佛、諸大菩薩聲聞天人龍神等に圍繞せられて須彌山頂に昇り、神光を現じて諸龍を度し、幷に憍陳如に對して生死因緣の法を說く。

三歸濟龍品第十二　世尊、須彌山頂より下りて佛羅抵山に至り、十種の業に由りて龍中に來生することを說き、及び龍の爲めに種々の夙因を說く。

護塔品第十三　佛、二十八の大支提を以て諸龍及び夜叉に付囑し、又た大授記呪を說く、波旬聞き終りて歡喜心を生じ、諸眷屬と共に懺悔して三歸依を受く、次で伽羅支魔子、眼色因緣等の義を問ふ、佛爲めに諸法性空を解釋す、大衆齊しく益を得たり。

三　一經の大意幷に本典の御引用

三寶供養幷に護法の功德より說き起し、次に四方四佛おの〳〵菩薩を遣はして諸陀羅尼を送り來る、諸陀羅尼の要は衆生をして欲貪を捨離せしめんが爲めに不淨觀を修し、且つ空無我の理を證らしむるにあり、次に諸天大王及びその眷屬、一切龍王等、法行の比丘幷に淨信の善男子善女人を守護することを示し、次に佛、神通を現じて佛境界三昧に入りたまふや、一切世界諸有衆生悉く佛身中に入る、是に於てか魔王波旬大に憂惱し、惡龍等總て勢力を失ひ救ひ求む、遂に光味大仙の勸めに依りて佛世尊の所に詣し、各自種々の夙因を知り、念佛三昧の修相功德を聞き、齊しく歡喜懺悔して三歸依を受けたることを說く。

『本典化卷』末初丁、勘決眞僞の下に諸經の文を連引したまへる中、日藏經の三文を擧ぐ、卽ち星宿

品、念佛三昧品、護塔品の三品よりおの〳〵一文を引鈔せるものなること、文を披て應に知るべし。今是等の文を一括してその引意を伺ふに、諸天龍神等皆悉く佛法を護持し、歸佛者を護念することを顯はさんが爲めなり、それ三寶に歸依するは眞なり、諸天鬼神に敬事するは僞なり、如何となれば、諸天鬼神は佛法を護持するを以てその分齊とす、然るに佛法を捨てゝ諸天鬼神に事ふるが如きは、本末能所を顚倒せるものなればなり、されば勘決眞僞の證文として日藏經の三文を連引したまへるもの、その意趣自から明かなりといふ可し。

猶、最後に一言附記し置かん、上に、今經十三品（十卷）の大意を叙せるは、全く那連提耶舍譯の『日藏經』にして、曇無讖譯『大集經』三十卷中の日密分は、これと同本異譯なるものなること、前に『大集經』の組織を述べしところに於て言へるが如し、而して日密分は未完の譯にして缺略多し、卽ち護法品第一、陀羅尼品第二、分別說欲品第三、分別品第四、不思議大通品第五、救龍品第六の六品あるのみ。

第十四　大方等大集月藏經

一　各品の大意

月幢神呪品第一　佛、佉羅帝山にまし〳〵て、六百萬の比丘、無量不可計の菩薩と俱なりき、日藏經を說き終るの時、西方に大華雲を現じ、雲中に一半月を現ず、その廣さ十由旬、月中に復た眞金重閣講堂を現じ、堂中復た半月を現ず、月中に千葉の靑蓮華あり、世尊その上に端座して法を說きたまふ、光明普く大衆の頭上を照す、一一の頭上皆半月を現ず、時に目連かくの如きの神通變化を見て希有の心を生じ、又た大衆の心中疑ひあるを知りて、卽ち座より起ち偈を說て佛に問ひたてまつるところあり、佛告げたまはく「西方に世界あり、月勝と名け、佛を日月光と號す、月藏菩薩その世界より來りて我を禮拜供養せんと欲すればなり」と、既にして月藏來り、偈並に神呪を說き且つ來至することの遲かりしを懺謝して曰く「我れ本國月勝世界に在りて諸眷屬と共に七日の中深禪定に入りたればなり」と、佛、その禪定に入りて六度を具足成就せるを讚ず。

魔王波旬諸佛品第二　時に魔王宮中の諸物、皆半月の形に變じ、光を放ちて讚佛の偈を演出す、魔王及び眷屬恐怖戰慄して耳を掩ひ、鼓を擊ち衆を集む、鼓中又た諸法如幻の偈を演ぶ、魔王ますゝ憂惱し、遂に佛所に詣し、詐はりて歸依し、大に供養を爲す、佛乃ち憍陳如に對して利養の過失を說く、魔王羞愧を懷き默座して法を聽く。

諸阿修羅諸佛所品第三　波旬、諸惡物を修羅宮に雨らす、修羅、佛に歸して救を乞ふ、佛、光明三昧に入り、三昧力を以て修羅を救ひ快樂安穩ならしむ、次で四大阿修羅王等佛所に

養偈讃す。

本事品第四　彌勒菩薩の問に答へて、佛、過去の毘舍浮佛の時に於て八弟を化せんが爲めに苦行せり、而してその八弟とは卽ち今の四阿修羅王、波旬、調達、維摩、彌勒なることを說く。

第一義諦品第五　月藏問ふて曰く、「阿蘭若に住して第一義諦を修するの法如何」と、佛答へたまはく、「應に大悲心を起して愛取を棄捨し、四聖種に住して四大五陰根塵識等を念せず、四無礙を以て衆生を成熟し、六度の行を滿足すること初日の月、乃至十五日の月の如くなるべし」と、次に三昧及び第一義諦に就て、「是れ何の身、何の攀緣、何の想、何の相、何の性なるか」を問ふ、佛具さにこれに答ふ、而して又た第一義禪の菩薩の住する居處には、十二種の功德利益あることを說けり。

令魔得信樂品第六　帝釋天衆及び一切大衆、慈心を以て魔王を視る、又た諸菩薩等、魔王を勸諫して三寶を信敬せしむ、魔王乃ち深信懺悔して容恕せられんことを世尊に願ひ奉る、世尊爲めに忍の功德を說て波旬に印を授く、波旬慶喜して呪を說き佛子を攝護せんことを誓ふ。

一切鬼神集會品第七　護世四天王、佛に請ふて曰く、「今この處に一切の菩薩聲聞及び一切の天龍鬼神等雲集す、世尊願くはこの閻浮提の國土城邑を天龍鬼神に分張付囑して護持せしめよ」と、時に會上に大梵天あり、正辯と名く、旨を解して四天王に命じ、おの〳〵焰赫鐵輪を四方に擲たしめ諸鬼神を攝して、同じく佛所に來らしむ。

諸惡鬼神得敬信品第八　佛、一切大衆の爲めに十平等を說く、一に衆生平等、二に法平等、三に淸淨平等、四に布施平等、五に戒平等、六に忍平等、七に精進平等、八に禪平等、九に智平等、十に一切法淸淨平等これなり、羅刹王等自から夙業を述べて悔過し、おの〳〵益を獲たり。

諸天王護持品第九　佛、世間に示さんとて故らに大梵天王に問ふて曰く、「この四天下誰か能く護持を作すや」と、大梵天王具に答へ終る、佛乃ち四天下を以て一切の天龍鬼神に付囑すること、拘留緣等の三佛の如く異なるところなし。

諸魔得敬信品第十　魔王波旬、佛に向つて懺謝し深く敬信す、時に佛、月藏菩薩の言を印可して波旬に記を授く、以て復た百億の諸魔あり、起ちて佛の正法を護持養育せんことを誓ふ、佛重て一切天王に正法の護持を囑す。

提頭賴吒天王護持品第十一　時にこの世界四天下中に日天子月天子あり、一天子を佛所に遣はして正法護持の願を寄す、佛これを讃許し、並に天王に勅して閻浮提南方の第四分を護らしむ。

毘樓勒叉天王品第十二　佛、天王に勅して閻浮提西方の第四分を護らしむ。

毘樓博叉天王品第十三　佛、勅して閻浮提北方の第四分を護らしむ。

毘沙門天王品第十四　佛、勅して閻浮提東方の第四分を護らしむ。

呪輪護持品第十五　佛、四天王の爲めに五呪を說く。

佛教講義錄

忍辱品第十六　羅睺阿修羅王等、佛の付囑を承け、呪を說て法を護らんことを宣佛爲めに忍辱十種の近果及び五の遠果を說き並に不忍の過患を說く、月藏又た大慈陀羅尼を是に於て天龍修羅互に相懺謝す、佛、重て三寶の事を以て付囑護持せしめ、兼て出家の人を打罵する者は罪無量なることを明す。

分布閻浮提品第十七　佛、一切の國土城邑を以て天龍鬼神に分布付囑し、正法を興隆護持せしむ以て月藏に對して滅後に於る法運の隆替をば左の如く懸記したまへり。

爾時世尊告二月藏菩薩摩訶薩一言　了知清淨士　若我住レ世諸聲聞衆　戒具足　捨具足　聞具足定具足　慧具足　解脫具足　解脫知見具足　我之正法熾然在レ世　乃至一切諸天人等　亦能顯二現平等正法一。於二我滅後五百年中一　諸比丘等　猶於二我法一解脫堅固　次五百年　我之正法禪定三昧得二住堅固一　次五百年　讀誦多聞得二住堅固一　次五百年　於二我法中一　多造塔寺得二住堅固一次五百年　於二我法中一　鬪諍言頌白法隱沒損減堅固　了知清淨士　從レ是以後　於二我法中一　雖レ復剃二除鬚髮一身着二袈裟一　毀二破禁戒一　行不レ如レ法　假名比丘　如レ是破戒名字比丘　若有二檀越一捨施供養護持養育　我說是人猶得二無量阿僧祇大福德聚一　何以故　猶能饒二益多衆生一故　何況我今現在二於世一　譬如レ眞金爲二無價寶一　若無二眞金一銀爲二無價一　若無レ銀者鍮石無價　若無二鍮石一僞寶無價　若無二僞寶一赤白銅鐵白鑞鉛錫爲レ無價寶一　如レ是一切諸世間中佛寶無上　若無二佛寶一

佛教講義錄

緣覺無上　若無二緣覺一羅漢無上　若無二羅漢一諸餘聖衆以爲二無上一　若無二聖衆一得定凡夫以爲二無上一　若無二得定一淨持戒者以爲二無上一　若無二淨戒一汙戒比丘以爲二無上一　若無二汙戒一剃二除鬚髮一身着二袈裟一名字比丘爲二無上寶一　比二餘九十五種外道一最尊第一　應レ受二世供一爲物福田何以故能示三衆生可二怖畏一故　若有二護持養育安置一　是人不久得住忍地。

右は佛滅後に於る法運の通塞を五箇の五百年に分ちたる說にして、次に末世名字の比丘亦た無上の寶たることを喩示したまへるものなること文に就て知るべし。

星宿攝受品第十八　佛、復た諸國を以て二十八宿、七曜、十二辰に付囑す。

建立塔寺品第十九　梵天帝釋四王、過去の二十五塔を例となし、佛に問ふて曰く、「現在未來に幾所の塔寺ありて我等にそれを護持せしむるや」と、佛便ち微笑して光明を放ち、諸國を照曜して四天下中處々に無量百千の諸佛を化現し、而して曰く、「かくの如きの諸佛の數に等しき塔寺を造らんに、亦た當に護持すべし」と。

法滅盡品第二十　月藏、月燈を顧て偈を說く、月燈偈を以て佛に問ひ奉る、佛偈を以て末法の時の事を答へ、且つ諸菩薩に囑して護持せしむるに、皆默然たり、唯彌勒等の賢劫の大士、護持せんことを宣ぶ、佛復た更に偈を說て法滅の事を懸記す、次に金剛堅固深密解脫味體陀羅尼句を說く、大衆得益の後、大に妙供を興す、而して最後に持經十種の淸淨功德、八種の淸淨功德、十

淨德を說けり。

二　一經の大意並に『本典』の御引用

佛敎講義錄

まづ佉羅帝山上の大會に於ける奇瑞に次で月藏菩薩の來至せるを說き、次で魔王の愁憂、阿修羅の歸佛、佛の本事、魔王の懺悔受記、並に一切鬼神の歸敬、諸天の護持等を說き、最後に末法法滅の事を懸記したまへり、これを要するに一經の旨歸は佛陀の神變功德不可思議なることを示すと共に、魔王鬼神の歸敬、諸天の護持を說くにありとす。

『本典』化卷末六左以下に、この經の七文を連引したまへり、引意は次上『日藏經』の三文と同じく、諸天鬼神の歸佛護持を示し、三寶の威德廣大なるを證し、以て末世の道俗をして背邪歸正せしめんが爲めなりとす、而して又た同化卷本三十四右以下に於て數文を引用したまへり、是等の諸文は末法に於る聖道の難證を示さんが爲にして、彼の五箇五百年の文、我末法時中乃至可通入路の文、名字比丘無上寶の文等悉く然らざるはなし、一々の引文この旨を得てその引意を知るべし。

最後に一言し置かざるべからざるは、我末法時中の文なりとす、この文は『安樂集』に聖淨二門の鴻判を示せるところに、聖道難證の證文として引かれたるを相承せるに外ならずと雖も、月藏經を

（一三四）

檢するに斯の如きの文なし、これに就ては先哲既にこれを考覈して取意の文なるべしといへり、卽ち五箇五百年の文並に末法の衰運を懸記したまへる文等に依りて隨宜綴文したまへるものあるべし

（一三五）

第十五　大乘大集地藏十輪經　(Daśakakra-kshitigarbha)

唐　大慈恩寺沙門　釋玄奘譯

一　傳譯並に題號

この經の傳譯前後二回あり、他の一は

佛說大方廣十輪經　八卷（十五品）　北凉錄　失譯人名

にして、玄奘譯の『地藏十輪經』に比すれば缺略せるところあり、而して玄奘譯は十卷八品に分る。

『地藏十輪經』と題せるは、地藏菩薩の功德を稱說し、且つ佛菩薩の十輪を說けるを以てなり、次下各品の大意を叙して一經の旨歸を明かならしめん。

二　各品の大意

序品第一　佛、佉羅帝耶山に於て月藏經を說き終りし時、南方より大香雲大花雲衣服雲等來りて香花衣服等を雨らし、且つその中より諸法の妙音聲を演出す、時に大衆各自の手中に如意珠を現じ一一の如意珠又た雨寶放光の奇瑞を現ず、而して光明に因りて大衆悉く十方恒沙の諸佛世界を見ることを得たり、既にして皆疑ふらく、かゝる瑞相これ何の因緣を以て現せるにやと、是に於てか無垢生天帝釋、坐より起ちて此の事を世尊に問ひたてまつる、世尊答へたまはく「地藏菩薩、既に無量劫の間、五濁惡時無佛世界に於て有情を饒益す、今諸の菩薩眷屬と共に此に來らんと欲して、まづこの變化を現せるなり」とて、菩薩の功德を稱讃す、次で地藏菩薩、聲聞の像を現じ來りて佛足を禮し讃嘆供養す、佛又た好疑問菩薩の問に因りて廣く地藏の無量功德を述ぶ、大衆卽ち種々の華香妙寶を以て菩薩を供養す、地藏菩薩更にこれを世尊に供養し、兼て神呪を說て一切を利益せり。

十輪品第二　地藏菩薩、佛に問ふ「如何が五濁惡世に於て能く佛輪を轉せん」と、佛卽ち答へたまはく「本願力に由りて十種の佛輪を成就すれば、能くこの土五濁惡世に居して有情を饒益すべし」とて、十輪を說き、一一の輪を譬ふるに轉輪聖王の十王輪を以てす。

無依行品第三　時に會上に大梵天あり、天藏と名く、偈を以て佛に法を問ひ奉る、佛これに對し

て二種の十無依行を說き、次に出家破戒の者猶能く十種の殊勝思惟を生ず、非理にこれを辱害すべからざるを明し、次に五無間罪、四根本罪、謗三寶罪皆佛の弟子に非ず、宜しく四根本戒を護持すべしと說き、更に優波離の問に因りて十非法十非人等を示し、復た地藏菩薩の願に因りて末世に十惡輪あるを明し、若し能く十惡輪を遠離すれば則ち十法增長を得、二十の過を離るべきを示す、時に佛爲めに十種の法能く菩薩をして無罪正路法忍を獲得せしむることを說く、卽ち五陰此世他世三界等に著せざるを謂ふなり、次に法忍を得ば王位に處することを許す、或は十善を行じ、或は三寶を信ずれば、亦た以て王たるべし、否まざれば卽ち當に墮落すべしと說けり。

善業道品第六　金剛藏菩薩問ふて曰く「云何が三乘の人と法とに於て過失なきことを得るや、云何が大乘の法に於て常に昇進して退轉あることなきを得るや、又た云何が菩提種々の行願に於て常に心に厭足なきを得るや」と、佛答へたまはく「十輪を成就すれば、能く諸の有情をして意の樂ふ所に隨ひて無畏涅槃の城に起入せしむべし、十輪とは餘法に非ず、當に知るべし十善業道卽ち是れなり」と、而して廣く因果利益を說けり。

天藏、護國不退輪心神呪を說き、佛これが受持を勸む。

有依行品第四　金剛藏菩薩問ふて曰く「既に破戒は佛弟子に非ずと言へり、然るに云何ぞ許さゝるや、又た他經處々に獨り大乘を讃ず、今經云何ぞ三乘の法悉く皆隳沒を許さ